
『Dragon Sword Saga 2』 旅の仲間（後編）

かがみ透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『Dragon Sword Saga2』旅の仲間（後編）

【Nコード】

N5453V

【作者名】

かがみ透

【あらすじ】

普段はよろず屋、実は二つの伝説の剣を持つ青年傭兵ケイン。穏やかで、無欲な彼を、伝説の戦士と信じて付いていく妖精ミュミユ。

異次元から、雷獣神を呼び出すという、最強の召喚魔法を操る、美少女戦士マリスと、美青年魔道士ヴァルドリューズのコンビに、次元の穴を塞ぐ旅の同行者として雇われたケイン、魔法剣の傭兵カイルと、魔道士見習いに転向した巫女のクレアが加わり、旅のご一行が結成される。

アストーレ王国の魔物と次元の穴を塞いだ一行は、魔道士参謀ダミアスと親しくなる。

アストーレの親戚であるフェルディナンド皇国では、無法者の魔道士たちに手を焼いていた。ダミアスとヴァルドリューズは、フェルディナンドへ助っ人に向かい、その間、マリスは別行動、ケインは王女の護衛を、カイルは警備兵に、クレアは王女の侍女代行として、過ごすことになる。

フェルディナンドの化け物化した魔道士たちとの奇妙なバトル、友好的な魔道士との出会いもあれば、最強の魔道士までもが登場！

その頃、アストーレでは、新たな王子が乗り込み、王子たちの決闘が始まる。

王女の心は揺れ動き、ある者へと定まっていく。

そして、いよいよマリスとヴァルドリューズの旅の真実が明かされる。

ケインは、ドラゴン・マスターソードの力を引き出せるのか!?

出世か旅か、ケイン、人生最大の決断を迫られる。

※自作サイト『Mystic Rhapsody』ミステック・ラプソディー』、投稿サイト『20代から中高年のための小説投稿&レビューコミュニティ』にも、掲載しています。

王女の護衛

彼は、私の中で、既に英雄でした。

彼女は、自分の中で、既に雲の上の人でした。

彼は、常に勇敢で、私の危機を、何度も救ってくれました。

自分は、彼女を救いたいと、ただ必死でした。

私は、一目で、恋に落ちました。

自分は、彼女の一途さに、純粹さに、心打られました。

こうして、王女と雇われ兵の恋物語は、誕生しました。

——アストーレ王国三大恋物語の一つ、『王になった傭兵』より

プロローグ

「そうだ、そのままこちらへ来るのだ、光を灯す王女よ。

そうして、そのまま、我が手の内に……！」

暗闇の中で、しわがれた声が、静かに、いんいんと響く。

クリスタルの水晶球だけが、ぼんやりと浮かび、一人の少女の姿を映していた——

第 ？ 章 『青天の霹靂』 第1話 『王女の護衛』

大昔、神の使いという、大きな白い龍がいた。

あらゆる災いから守られたその土地では、人や動物だけでなく、ドラゴン龍を始めとした伝説の生き物、精霊などが穏やかに共存していたのだという。

人々は、白龍を崇め奉り、供え物をし、拝んでいた。

ある時、一匹の魔物が紛れ込み、作物を荒し回り、そこに住むものたちに危害を加えていた時、ひとりの心正しき少女に、白龍の力の一部が授けられた。

少女が呪文のようなものを唱えると、てのひら掌から白い炎が現れ、魔物だけがその炎に焼かれ、消滅した。

少女の不思議な力はそれだけではなく、怪我や病気を治すことも出来た。

その力を授かったものは、その少女のみ——信仰心が厚く、純粋な心を持つ者だけにしか与えられなかったのだという。

それが、白魔法の始まりであり、その伝説の土地のあった場所が、アストーレ王国の、パルストウル神殿の辺りなのだという。

今は、歴史の授業であった。

アストーレ建国の話の途中で、教師が白魔法のことに触れていたのだ。

王女の従姉妹いとこたちの他、高位の貴族の娘たち、外国から留学にきている数人の貴族たちなど、聴講しているのは、全員女性であった。「この国では、貴族は一五歳まで、男女別々の学問所で勉強しなくてはなりません。中原では、どの国もそうなのです。わたくしも、去年まで、こちらでお世話になっていました」

旅の傭兵ケインが、アストーレ王女アイリスの護衛をして数日が

経つ。

退屈だろうからと、王女が氣遣って、ケインを連れ、城の中を案内しているのだった。

それでも、戦場を生き抜いてきた彼にとっては、退屈には違いなかったが。

「あら、もうすぐカルザスさんがいらっしやるお時間だわ」

有名な衣装デザイナーが、王女の舞踏会用のドレスを新調しているところだ。貴族の間でも、人気があるという。

王女の侍女は、縦続く誘拐事件で心労がたたり、療養中で、この日の午後にも、代行が決まることになっている。それまでは、王女自身がスケジュールを管理していて、他に伴もなく、ケインだけを連れていくという、珍しい状況にあった。

まるで、他の女官を遠ざけているかのよう。

王女の耳には入っていないが、それは、宮廷中の使用人の間で、噂の種となっていた。

王女が、ケインを氣に入ってしまった、他の者を寄せ付けたくないのではないかと。

それは、彼らには、アストーレ国王が、外国人で魔道士のダミアスを参謀に選んだ時の様子を、彷彿とさせるのだった。

そのような目で見られていることなどは露知らず、王女はケインを伴い、回廊を進む。

「ご機嫌麗しゅう、アイリス王女殿下」

デザイナーのマリー・カルザスが深々お辞儀をする。深い緑色のドレス姿に、髪の毛を高く塔のように結い上げた、痩せた中年の女性だった。ケインには、少し化粧が濃く見えた。

「本日は、仮縫いの衣装を五着ほど、持って参りました」

「まあ！ 今度はどんなデザインなのかしら。楽しみだわ」

カルザス嬢（独身とのことなので）とその連れの女弟子五人が、それぞれ衣装の入った、それだけでもケインなどは宝箱かと思うほ

ど豪華な模様の、大きなケースを持って、衣装室へ向かう。

「ここからは、男性の方はご遠慮下さい」

衣装室の前で、カルザス嬢はケインをキッと睨んだ。言われなくとも、そのつもりだ、とケインは言いそうになったが、黙って頭を下げた。

「あら、ケイン様は私の護衛をなさっているのよ。誘拐事件では、衣装室に脅迫状まで置かれていたから、また何かあってはと思うと恐ろしいし……」

でも、ケイン様がいてくれれば、わたくしも安心ですわ。それに、男性の方のご意見もお聞きたいし」

アイリス王女は、にこやかに彼女を制した。

（おいおい、いくらなんでも、それはまずいんじゃない……）

と、ケインが思っていると、案の定、

「なりません、姫様！ お召し替えの場に男性を伴うなど、婚礼前の女性のすることではありませんよ！ ましてや、あなた様は一国の王女なのですから、軽はずみな振る舞いは、断じてなりません！

」

幼い頃から王女を知っているカルザス嬢は、まるで、教育係のよう王女を窘める。

「で、では、着替えが終わってから、見て頂くのだったら構わないでしょう？」

王女が甘えるように懇願する。

「……仕方ありませんね……。ただし、あなた、いいですか、私が声をかけるまでは、絶対に覗いてはなりませんよ！」

カルザス嬢に、またしても睨まれたケインは、そんなことするわけねーじゃん！ と、心の中で言い返した。

「ケイン様、しばらくそこで待ってらしてね。着替えている間に、お部屋に戻ったりしては、いやよ」

王女は、伏せ目がちな表情で、少しはにかんだようにそう言うと、衣装室の扉の中へと消えていった。

ケインは、一人、回廊で待つ。

(……『いやよ』……ねえ……。なんとも、まあ、可愛らしいつうか……)

今まで出会ったことのない、可愛らしさであるのは認めるが、彼の中では、どこか腑に落ちないような、引っかかっていることがあった。それが何かは、まだ具体的には解らなかった。

「素敵だわ！ この色といい、形といい……！ ねえ、ケイン様はどうご覧になられて？」

深い緑色を基調とし、薄紫色のレースをあしらったドレスをまとった王女が、笑顔で尋ねる。

「とてもよくお似合いですよ、殿下」

彼も、笑顔で答える。彼には、女性のドレスのことなどわかるはずもなかったが、ただ、いつも淡い色のドレスが多い王女には大人っぽく、少々背伸びをしているような気がした。

「これも素敵ねえ！ ケイン様は、どうお思になられて？」

二着目は、レースをふんだんに使った、淡いピンク色の広がったドレスだった。

「こちらも、非常にお似合いですよ」

彼は、笑顔を取り繕った。

どうも、ごてごてして広がったドレスというのは、あまり好きになれそうもなかった。

舞踏会での貴族の衣装同様に、彼には、どうしても『お腕をひっくり返したよう』に思えてしまうのだ。

次々見せられるドレスも、型は同じであった。

「さつきから、『とてもお似合いだ』としか言わないじゃありませんか。どこがどう似合うとか、もっと気の利いた褒め方をいたしませんと……。まったく、若い男性というものは、気が利かないんだから」

せっかく腕を振るったのに張り合いのない、とでも言わんばかり

に、カルザス嬢が面白くなさそうな横目で彼を見る。

「はあ、しかし、私が意見する筋合いでもありませんし……」

だいたい、あまり良いとも思えないものは褒めようもない、と言う言葉を、ケインは飲み込んだ。

「思った通りに、はつきり言ってくださって構わないのよ。ケイン様は、今までの中で、どのドレスが一番好き？」

王女は、元通りの簡素なクリーム色のドレスに着替えていて、衣装室では、今まで着た仮縫いの衣装が並んで吊るしてあり、デザイナーの弟子たちは、後片付けをしている。

ケインは、遠慮がちに答えた。

「私は、今、殿下がお召しになられているような、あまり膨らんでいないドレスが良いと……」

「まあ、何ですって!？」

カルザス嬢が怒り出した。

ああ、やっぱり言わなきゃ良かったと、ケインは即座に後悔した。「あの、私は、ご婦人のドレスなどには無頓着でありますから、どうかお気になさらないで下さい!」

そして、デザイナーにぺこぺこ頭を下げるハメになった。

「申し訳ありませんでした」

カルザス嬢の帰った後、王女の自室で、ケインは深々頭を下げた。

「男の方は、シンプルなドレスの方が、好きなのですか？」

王女は、特に気分を害した様子はなく、微笑んでさえた。

「私はそうですが、人それぞれだと思います」

王女は、ケインの褒めた、今も着ているクリーム色のドレスの胸に、そっと手を当てた。

「このドレスはね、マリーの弟子だった方が作ったの。マリーのもとから去って独立してしまったのだけだね。今、アストーレでは、マリー・カルザスと、その方ロザムンド・イノワが、貴族の間では特に人気の高いデザイナーとなっているの。」

でも、イノワさんが弟子だった頃から、マリーとは気が合わなかったこともあって、今でも二人は犬猿の仲だと聞くわ。

イノワさんのデザインしたシンプルなドレスも素敵だとは思いますが、私は幼い頃からマリーに作って頂いているし、他の方々にもまだまだマリーのデザインの方が根強いみたいなので、ずっと彼女に頼んでいたの」

聞きながら、ケインは、なんだかいろいろあるらしいことがわかった。一般庶民では、服のデザインの流行りなどは特になく、そのエリアならではの服装をしていたのだが、貴族の世界では、デザイナーなどというものが存在し、好きなデザインを選んで購入するなどは、ケインにはまたまたカルチャーショックであった。

（ふうん、俺がよりによって、そのカルザス嬢と因縁のある弟子がデザインした方を褒めたもんだから、あんなに怒っていたのか）

「でも、ケイン様が、このデザインを気に入ってくださったのなら、普段のドレスはイノワさんの方に頼んでみようかしら」

ケインは、王女の言葉に慌てた。

「い、いや、私の好みなどよりも、殿下のお好きなものをお召しになられた方が……」

「いいえ、わたくしが着ていたいのです。あなたのお好きなものを……」

「えっ……？」

ケインは、目を丸くして王女を見つめた。

王女が、はっとしたように彼から目を反らし、両手を頬に添える。

「……ま、まあ、わたくししたら、なんてことを……」

王女の顔が、どんどん上気していく。ケインは、目を丸くしたまま、それを見ていた。

しばらくして、王女は、気付いたように彼を振り返ると、急に必死な面持ちになり、おそるおそる近付きながら両手をもみ絞り、彼の顔を覗き込んだ。

「……あ、あの……、王女のくせに、はしたない女だと、お気に障

ったのならお許し下さい」

王女は、「ごめんなさい」を連発している。

「い、いいえ、お気に障ってなどはおりませんです！」

変な敬語になりながらも、ケインも慌ててぺこぺこ謝った。

ふいに、扉をたたく音がし、開くと、目の覚めるような真っ赤な色が、彼の目に飛び込んできたのだった。

「アイリス、元気だった？」

「アリッサお姉様……！？」

王女は驚いて、その場に立ち尽くしていた。

年の頃は二五、六、深紅のドレスに身を包んだ、輝くブロンドを結い上げた、華のある女性だった。

侍女を従えて入ってきたその女性は、フェルディナンド王国皇后アリッサであった。

もとアストーレ王国第一王女、つまりアイリスの姉にあたる人物だ。

きりっとした印象を与え、まだ幼い感じのアイリス王女とは、あまり似ていない。

「明後日お着きになると、お聞きしていたのに……ああ、お姉様！」

王女は、フェルディナンド皇后に抱きついた。

「まあ、アイリスったら。いつまで経っても幼いままなんだから」姉は、妹の身体を、愛し気に、そっと抱いた。

そこへ、アストーレ国王アトレキアと、魔道士参謀ダミアスが、ヴァルドリューズとクレアを連れて入る。

「どうじゃな、三年ぶりのご対面は？」

王は、いたってにこやかである。

アリッサ皇后は、既に部屋の隅に下がっているケインに、ちらっと目を向け、王に向き直った。

「随分と若年の警備兵ですね」

「おお、彼はケイン・ランドールといって、若くても腕が立つので

な。先日、アイリスの誘拐事件を二回に渡って防いでくれたのじゃ。だから、何も案ずることはない」

警備の初日、ケインとカイルは、その時の功績を讃えられ、高額な報酬をもらっていた。

「わたくしが申しているのは、そんなことではありませんわ。あなた、ケイン・ランドールとやら、年齢は？」

皇后が、冷やかな目を向けた。

「一八になります」

「まあ！ 私と二つしか変わりませんでしたの！？ もっと離れているものばかり、思っておりましたわ」

声を上げたのは、アイリス王女の方だった。親しみを込めた笑顔で、ケインを見上げる。滅多に年上になど見られなかったケインにとっては、意外であったが。

「そうかしら？ わたくしは、もう少し若いものと思っていたけど……？」

皇后は、じろじろと、露骨に彼を見回した。

ケインは、その皇后の判断の方が普通であると思った。この童顔のせいで、いつも実年齢よりも若く見られ、あまり強そうに見られなかったのだと、思い返す。

「とにかく、いくら警備とはいえ、同じ年頃の男性とアイリスを二人つきりにさせておくなど、わたくしには、お父様の気が知れませんわ」

皇后は、腕を組んでケインを睨みつけた。

「おお、アリッサよ、何をそう目くじらを立てておるのじゃ？ ランドールのことなら心配はいらんというのに。人見知りのするアイリスだって、彼には懐いておるようだし……」

「それが心配だということです！ 現に、さきほどだって、私が部屋に入った時、二人ともなにやら親し気にお話していたわ」

親し気に……？ ケインは、思い起こしてみるのが、どう考えても、ただぺこぺこと、ひたすら謝り合っていただけだった。

「まあ、親し気だなんて……」

アイリスが、ちらっとケインを見る。

「この娘はまだ幼い。何もわかってはいないのですわ。わたくしがアイリスの歳には、もうフェルディナンドへ嫁ぎ、王子を身ごもっていたというのに、この娘ったら、まだ婚約者も決まっていないのでしょうか？ 第二王女のアリエスだって他国に嫁ぎ、もうすぐ四人目が生まれるというじゃありませんか？

アイリスと一緒にになった者がアストーレの後継者となるのだから、お父様だって、そろそろ考えてらした方がよろしいのじゃなくて？ このような若者などに護衛を任せていないで……だいたい、万が一のことでもあったら、一体どうなさるおつもりなんです！？」

まだ王女が幼かった頃、アストーレ王妃を亡くしてから、第一王女である彼女が母親代わりを勤めたというだけあり、少しおおらかなこの王にビシビシ言っているのは昔からであるのだろう。嫁入り前の王女に悪い虫が付いてはと、心配なのが見て取れる。

そこへ、アイリス王女が、皇后とケインの間に割って入った。

「お姉様、ケイン様は、そんな方ではありませんわ。常にお仕事には忠実な方ですし、わたくしが粗相をした時だって、いつもコワイお顔でお咎めになるし……」

ケインには、何のことだかさっぱり見当も付かないのだが、せいぜい思い当たるといえば、貴族の愛想笑いというものが自分には身に付いていないせいだろうか？

「まあ、なんですって！？」 傭兵の分際で、一国の王女を叱っているというの！？」

皇后が、目を吊り上げた。

「い、いいえ、断じてそのようなことは……！」

ケインがたじろいでいると、王が笑い声を上げた。

「彼は不器用なだけじゃよ。自分に正直に振る舞っているだけで、周りの者に誤解されてしまうのじゃ。そういうところは、ダミアスと似ているのかも知れないな」

王はにこやかに続けた。

「そなたとアリエスは他国へ嫁がせてしまったが、アイリスには気に入った相手と一緒になってもらいたいのじゃ。だから、この子には、私の意見を押し付けたりはしたくはないのじゃよ」

「そう言えば、この間、各国からたくさんお客様がお見えになったそうね。アイリス、誰か気に入った王子殿下はいらして？」

気を取り直したように、フェルディナンド皇后は、妹に微笑みかけた。

アイリス王女は、下を向いて、少し沈んだような顔になった。

「……あの、わたくし、そのように思った方は……」

姉は、じれったそうに妹を見た。

「もう、せっかくお父様がああおっしゃっているというのに……！好きな相手と結婚出来るなんて、王族では珍しいことなのよ。大抵、政略結婚なのだから。」

わたくしは、それでも今が幸せだから良かったものの、そんなことは滅多に有り得ないのですよ。本当にこの間、訪問にいらした方の中で、誰もお気に召さなかったの？ それなら、あなたは、どういった方が好みなの？」

下を向いていた王女は、ちらっと、ケインに目をやった。

「……あの、……………」

……頼もしい方……」

王女は、小さな声で答える。

「頼もしいって、どのように？ がっしりとした体格の持ち主ということ？ それとも……」

「おお、デロスのカール王子のことかね？ 彼は、身体ががっしりとしておるし、剣術にも優れ、いくさには、御自分で兵を引くこともあるという勇ましいお方だからのう。だが、気持ちはとてもやさしいと聞くぞ。彼もそなたのことを気に入っていたようだし……」

アトレキア王が嬉しそうに顔をほころばせる。

「あら、デロス王国なら、結構大きな国ではなくて！？ わたくし

のフェルディナンドほどではございませんが」

王とフェルディナンド皇后は、勝手に盛り上がっていた。

乗り遅れたアイリス王女は「あ、あの……」と何か言いかけるが、二人とも聞きもせず、そのうち王がデロス王子の肖像画を取り出し、二人でああだこうだ言い始めた。

その場に居合わせたダミアス、ヴァルドリューズとクレア、ケインなどは、完全に蚊帳かやの外であった。

「確かに頼もしそうだけれど、もう少しハンサムな方がいいんじゃないかしら」

「そうかのう？ 精悍な顔つきだと、私は思うが……」

「……あ、あの、そうではなくて……あまり身体が大きな方は、少し苦手で……。もう少し、スマートで、ハンサムで、しっかりなさっていて、実はお優しくて、……時折見せる笑顔の素敵な方が……」

二人は、やっと王女を振り返った。

「なんじゃ、アイリス、カール殿のことではなかったのか？」

「もう、お父様ったら早とちりして……。あなたも、はっきり言わないからですよ、アイリス。」

それにしても、もう少しスマートでハンサムで、しっかりしていて、心の優しい、笑顔の素敵な頼もしい人……なんだか、具体的だわね、……。それで、そんな方なんて、一体どこにいらっしやると……」

「おお、それならいるではないか！ マスカーナのサンスエラ王子のことじゃな！？ あのお方は良いぞ！ お優しいし、実に素晴らしい詩を詠めるそうじゃ！」

「まあ！ どなたですの！？ ……あら、この方なら、まあまあお顔も整ってらっしゃるし、アイリスともお似合いだわねえ。それに、マスカーナと言ったら、実に洗練された文化をお持ちの国ではありませんか！

わたくしのフェルディナンドは古い伝統を受け継いでいくのはいいのですが、いまいち洗練さに欠けると日ごろから思っております

たのよ。少しは、マスカーナを見習ってほしいものです。それにしても、言いにくいお名前でいらっしやること。サンスエラ・リスカル・デ・マスカーナ殿下とは」

皇后と王が肖像画を手に、引き続き、二人で盛り上がっている。

「……あ、あの……、そうではなくて……」

王女が周りをおろおろするが、いたって二人は聞く耳を持たなかった。

「……そう言えば、この方達は、何ですの？」

散々肖像画を引っ張り出した後、アリッサ皇后は、クレアやヴァルドリューズに初めて気が付いたのだった。

「おお、そうじゃった。そなたたちに紹介しておこうと思っておったのじゃよ」

王は、改めて、皇后に彼らを紹介した。

「こちらは、ダミアスの知り合いの魔道士の方じゃ。ほれ、そなたの国は魔道士が多くて、これから彼らに何か決まりを作ると言っておったであろう？ そなたの方の宮廷魔道士が、ダミアスの腕を見込んで相談したいと」

皇后は頷く。

「そうですね。以前からお願いしていた件を、やっと協力して頂けそうなので、皇后であるわたくしが、こうして、お父様やアイリスの顔を見がてら、わざわざ参ったのですわ」

アリッサは、既に皇后の顔になっていた。

「北の森のモンスターどもが気がかりで、城を離れられなかったのですが、それも、ケイン殿と彼らが倒してくれたので、ようやく身動きが取れるようになったのでございます」

入室して、初めてダミアスが口を開いた。

「ふーん、このような若年の警備兵が、モンスターをねえ……」

アリッサは、腕組みをして、ケインをじろじろ見る。

「そうなのですよ、お姉様。ケイン様は、誘拐事件を解決しただけではなく、魔物を倒せるほど、お強いのです！」

アイリスは、手を組んで、アリッサに自慢気に言うと、ケインにうつとりとした視線を送った。

ケインは、なんとなく、アリッサの視線が怖かったので、ダミアスに注目したまま動かずにいた。

「こちらは私の友人、上級魔道士のヴァルドリューズ殿でいらっしやいます」

話をスムーズに進めるため、ダミアスはヴァルドリューズを友人ということにし、東方の国の宮廷魔道士ということにした。

ヴァルドリューズが、いつもと変わらない態度で、王と皇后に軽く会釈をする。

彼の、肩につくくらい長い黒髪は、アストーレでは珍しい。

東洋人系の雰囲気であるのに、西洋系の顔立ちという、これもまた珍しい外見の上、碧眼と、色鮮やかな額のカシスルビーが、黒づくめの格好の中で、まるで宝石のように、一際映えている。

「まあ……！ どうぞ、よろしくお願いしますわ」

皇后の物腰が、急に丁寧になった。

「そして、こちらがヴァルドリューズ殿の弟子にあたるクレア殿です」

ダミアスの紹介で、クレアが進み出て、丁寧にお辞儀をした。

「クレア・フローディアと申します」

「クレア殿には、アイリス、そなたの侍女代行を勤めて頂くことに致した。そなた、まだ習得していない白魔法があつたじやろう？

ついでに彼女から教わるとよいぞ」

「はい、お父様」

「そうですね。魔道士の侍女が一緒なら、安心ですわね」

皇后はケインを見やる。ケインは、まだ皇后に疑いをかけられているのかと、気を抜けなかった。

アイリスは、しばらく、クレアの、背まである艶やかで、まっすぐに伸びた黒髪と、黒く美しく輝く、大きな瞳に見とれてから、呟いた。

「……綺麗な方ですね」

クレアがはにかみながら、頭を下げた。

「うむ、まったくじゃ。私に王子がおったら、是非花嫁に迎えたいものじゃったが、いやあ、残念じゃのう。はっはっはっ」

上流社会では、巫女はかなり高い位置にいるので、王の口から出た言葉も、まんざらお世辞ではなかっただろう。

その証拠に、王は、どんなにケインの腕を買っているようでも、『王女の婿に』などとは、例え冗談でも言わなかったのだから。

しばらく談話をした後、ダミアスとヴァルドリューズは、アリッサ皇后の帰国に合わせて、フェルディナンド皇国へ出向くこととなった。

彼らがフェルディナンドでの問題を片付けるまでは、クレアはアイリス王女の侍女兼白魔法の講師に、ケインは王女付き護衛、カイルは警備兵として、アストーレ城で過ごすのだった。

王女と傭兵

「……掌に全神経を集中させて、白く暖かい光を感じるのです。頭に思い描いて……そうです、そんな感じですよ。あとは、それを持続させるのです」

国王たちが去り、王女の部屋には、王女とクレア、ケインの三人だけとなった。

ケインが、いつもの立ち位置と同じく扉の近くに立っていると、コツンと、窓に何かが当たった音がしたので、見に行った。

「よう、ケイン、元気にやってるか？」

「カイル！」

王女とクレアも、窓を見る。

「やつほー、お姫さん、クレア」

カイルは、室内にいる二人に向かって、手を振った。彼もまた、ケインと同じく、警備兵の紺色の制服を着ている。

「お前、勤務中じゃないのかよ？」

「もう交代したよ。俺の方は、六時間置きだから、ラクなもんだぜ。お前は、朝から夕方までだもんな。大変だよなー。……よっと」

カイルは、ひらりと窓から入った。

「まあ、カイル！ 勝手に王女殿下のお部屋に入るなんて！ しかも、窓から……！」

「わたくしならいいのよ、クレア。皆さん、お友達なのでしょ？ ちょうどいいわ、お茶にしません？」

怒りかけたクレアの隣で、王女はにこやかに言った。

「さすが、話のわかる姫さんだぜ。どっかのお固い巫女さんとは大違いだよなー。あ、巫女じゃなくて、魔道士見習いだっけ？」

にやにやしながら、ずかずか入ってきたカイルを、じろっとクレアが睨みつける。

「皆さんは、ずっと一緒に旅をしてらしたの？」

紅茶を飲みながら、アイリスは無邪気な瞳で、彼らを見回した。

「ああ。……といっても、仲間になってから、まだ一ヶ月も経っちゃいないがな」

カイルが、茶菓子のクッキーに手を伸ばす。

「ちよつと、殿下の前よ。話し方に気をつけたら？」

横で、クレアがカイルの袖を引っ張る。

「わたくしなら構いません。貴族の方以外とお話する機会なんて、滅多にありませんもの。言葉遣いでも何もかもが新鮮で楽しいですわ」

王女はにこにこ続けた。

「ここの北の森には、魔物が棲んでいたのですってね。ダミアスは何も言ってくれなかったから、そんなことは全然知りませんでした。それも、あなたがたが倒してくださったのでしょうか？ 頼もしいですわ！」

「はっはっはっ、それほどありませんよ」

そこに居もしなかったカイルが、笑いながら紅茶を啜る。

ケイン、クレアは、思わずカップを落としそうになった。

「アストーレには、久しく魔物の影などありませんでしたので、騎士たちも、その手の訓練はしていなかったのです。あなたがたは、魔物を退治する旅をしているのですか？」

アイリスは、三人を満遍なく見渡した。

「いかにもです。俺たちは、この世にはびこる悪を、野放しにしておけないのです。悪であれば、例えば人間であろうと魔物であろうと、とことんその根を断ち切る！ そのような正義の信念のもとに、行っております」

そう真顔で言っただけのカイルに、ケイン、クレアは、吹き出しそうになった。

「ところでさー、殿下」

がらっと、カイルが砕けた口調に戻る。

「殿下がさっき言ってた『スマートで、ハンサムで、しっかりして

て優しくて、笑顔の素敵なお頼もしい男』って、誰のこと？」

「えっ!？」

王女は、びっくりして、紅茶をこぼしそうになった。

「お前、立ち聞きしてたのかよ？」

「はははっ。国王に、フェルディナンドの皇后もいたら、さすがに窓から入る勇気はないからさ」

呆れながらカイルを窘めるケインへと、徐々にアイリスの視線が移動していく。

なんとなく視線に気付いた彼と目が合うと、彼女の頬はポツと真っ赤になり、その大きな栗色の瞳は、みるみる潤んでいくのは、傍目にもわかるほどだった。

（『スマートでハンサムで……』って、姫のただの理想なんだと思っただけど……もしかして……!？」）

ケインも、アイリスの真意を探るように彼女から目が離せず、アイリスも大きく見開かれた瞳を、彼から反らさないでいた。

「あれって、実は、俺のことだったりして」

その空気を、あっけらかんとしたカイルの声が、打ち破った。
ばたっ

ケインとクレアは、思わずソファで倒れた。

が、王女は、真に受けて、真顔で答えていた。

「違います」

ばたっ

今度は、カイルが倒れた。

「じょ、じょーだんだって、じょーだん」

彼は力なく笑いながら、手をぱたぱた振り、よろよろ起き上がった。

「ケイン様は、おいくつの時に、傭兵になられたのですか？」

ある時、アイリス王女は言った。

ヴァルドリューズとダミアスが、皇后と共にフェルディナンド皇

国に出向いて数日が経つが、未だ、何の連絡もない。

彼が、いつも通り扉の近くに立っていると、ソファにいたアイリスが、何気なく尋ねてきたのだった。

「幼少の頃から剣は振っていましたから……いつの間にか、ですね」彼の答えに、アイリスは、目を丸くして、驚いていた。

「まあ、そうでしたの……」

「殿下には、ご縁のない世界でしょう。人を斬るなどと野蛮なことをしないと、毎日の食事にもありつけないのですから」

王女は、意外にも怖がっている様子はなかった。

「そのおかげで国は大きくなって、わたくしたちもこのように何不自由なく暮らしているんですもの。その傭兵の方々を野蛮だなんて言っては、バチが当たってしまうわ」

開いた窓からは、そよそよと気持ちの良い風が吹き込んでいて、まさに平和そのものだった。

「ねえ、ケイン様、……恋ってしたことあります？」

アイリスは、その純真無垢な瞳を、ケインに向けた。

「……ありますよ。前のことですけど」

「おいくつくらいの時でした？」

手にしていた分厚い本を閉じて、ソファから身を乗り出すように、彼を見る。

「……どのような方でしたの？ ……綺麗な方？」

「別に、特に綺麗というわけではなかったのですが……たいしたことではなかったので、あまり覚えておりません」

ケインはウソをついた。

正直、この話題には、あまり触れたくなかったのだった。

王女は、視線を落とした。

「……ケイン様は、わたくしと二つしか変わらないというのに、もう何でもご経験なさっているのね。自分のためや国のためにいくさを何度も切り抜けて、恐ろしい魔獣と戦ったり、……恋もして……。あなたから見れば、私なんて、きつと、何もできない、箱入りの、

つまらない、退屈な娘なのでしょうね……」

溜め息混じりに、アイリスが言った。

「何をおっしゃるんです。殿下は、そのままで充分でございます。貴族の方にしては——というと語弊があるかも知れませんが——私のような傭兵にも親切にして下さるし、清楚でいらっしゃるし、……お、お綺麗だし……」

言っていることが、だんだんぎこちなく、陳腐な言葉になってくる気がして、ケインは困り果て、言葉を詰まらせた。

カイルだったら、慣れてるだろうから、もっと上手く言えるんだろうなど、ひょうひょうとした彼を思い浮かべ、初めて羨ましく思う。

「……ケイン様は、わたくしのことをお嫌いではありませんでしたの？　だって、わたくし、いつもあなたを不愉快にさせていましたし……誘拐事件の時だって、あなたを危険な目に遭わせてしまいましたし……」

アイリスは、驚いた顔をしながらも、おそろおそろ彼に近寄っていった。

「……嫌いだなんて、とんでもない。傭兵が危険な目に遭うなどは、当たり前のことです」

ケインの話す間に、王女は、もうすぐにも、手の届くところにまでやってきて、立ち止まった。

そうしているのは殆ど無意識だろうが、ケインが後退っても、何の警戒もなく、一層彼に近付いていき、見上げた。

小柄な彼女からすれば、長身のケインの顔は、頭2つ分近くも上にあつたので、かなり見上げるような形になる。

潤んだ無害の茶色い大きな瞳に見つめられ、なんだか、大変な成り行きになりそうに感じたケインは、内心では動揺し、冷や汗が流れ出していた。

「……あなたが……もし、貴族だったら……」

小さなピンク色の唇が、ゆっくりと、そう開きかけたその時、気

配を感じたケインの背に、さっと緊張が走る。

バタン！

「お花をお持ちしました」

後ろから聞こえてきた声と同時に、ケインの背中に強い衝撃が走った！

「まあ、クレア……！　いきなりドアが開いたから、びっくりしたじゃないの」

クレアの開けたドアがケインの背に当たり、彼は、のたうち回ってたかったが、何とか痛みを耐えていた。

アイリスも同様に驚き、声がうわずり、手も震えている。

「何度もノックしたのですけれど……あら、もしかして、ケインにぶつかっちゃったのかしら？　ごめんなさいね。それにしても、随分ドアの近くに立っていたのね」

クレアが、何の気なしに部屋の中に入り、テーブルの上に、花瓶に生けた花を飾った。

（まさか、今の話、聞かれてたんじゃ……？　？　）

ケインが、クレアの表情を盗み見るが、いつもと変わらない様子で、どうやら何も気付いていないようだった。

「どうかなさったのですか？　今日は、昨日に引き続いて、治療の魔法をお教え致しますわ」

「あ、あら、もうそんな時間？」

王女が取り繕って、ソファに腰掛ける。

「ちようどいいわ。見本に、ケインの背中を治療してみましようか」
これは助かった、とばかりに、ケインはクレアの隣のソファに座ると、上着を脱ぎ始めた。

「きゃあっ！」

アイリスが顔を真っ赤にして、両手で覆った。

その声にはケインもびっくりしたが、クレアは、きょとんとして、ケインに背中を向けるよう言い、アイリスにも、授業だからちゃんと見ておくよう言って、彼の裸の背中に触れるか触れないかのところ

ろで手をかざし、赤く腫れた部分に『治療』を施した。
アイリスにも、やってみよう勧めるが、彼女には、どうしても出来なかった。

「あのお姫さんさあ、お前に気があるんじゃないの？」

勤務時間を終え、クレアに剣の稽古をつけ、夕食も摂り終わった後、ケインとカイルは、警備兵の宿舎にいた。親衛隊とは違う建物で、少し狭い簡素な造りの二人部屋になっている。

彼らは、それぞれのベッドに腰掛けて、木の実酒を壺ごと口に運んでいた。

その時に、カイルがいきなり切り出したのであった。

「ミュミュも、そう思う〜」

いつの間にか小妖精が現れ、男二人の酒盛りに加わっていた。

ケインは、アルコールで解放された気分になっていた。

「お前たちもそう思うか？ ……実はさあ、今日の午後……」

「なに！？ もうしたのか！？」

まだろくに話をしないうちに、いきなりカイルに話の腰を折られる。

「……したって、なっ、何を！？」ケインは、思わず赤面した。

「だから、俺が聞いてるんだろ？ 何があったんだよ？」

一遍に酔いが吹き飛んだケインは、今までにない、小心者のようなおどおどした態度でひそひそと、昼間の情景を語り出した。

「……って言われてさ」

カイルの表情が、がっかりしていく。

「なんだよ、それで終わりか。アホか、お前は？ 俺はまた、てつきり、王女に手エ付けちまったんだとばかり思ってたぜ」

「アホはお前だ！ 誰がいきなりそんなことするか！ 王女殿下に、そんなマネしてみる？ 大罪で即刻死刑だぞ。いくら俺だって、そんなことくらいわかってるんだからな」

ミュミュは、ばたばたと羽ばたくと、目は見開き、頬に赤みの

差したケインの顔を、珍しいものでも見ているかのように、少し離れたところから眺めていた。

「俺だって、そのくらいはわきまえているさ。そんなことしたら、ただあの世へ行くだけじゃ済まされないだろうぜ。あの王様、娘思いだもんなー。普段は優しそうだけど、ああいう人間に限って、そういう時は豹変して、拷問にかけて殺さない程度にいたぶって……って、ヤツかもな」

カイルのなんでもないような口振りに、ケインは思わず身震いし、両腕で身体を抱え込んでいた。

「だけどな、ひとつだけ怒られない方法があるぜ」

カイルは、木の実酒を一口だけ啜った。

「お姫様と結婚しちまうんだよ」

あまりの唐突な発言に、ケインは声も出せないほど驚いた。

「あの姫、俺が見たところ、絶対お前に気があるぜ！ 姫がお前と結婚したいって王様に言えば、愛娘の言うことだし、姫の婿は気に入ったヤツでいいって言ってるんだし、今までの実績を買って、お前のことを正規の騎士にしてくれるかも知れねえぜ？ ゆくゆくは姫の婿に……ってな。」

そうなりや、大出世だ！ お前は、いずれアストーレの王となつて、この地で安泰に暮らすんだ！ 」

ケインは呆気にとられ、ぽかんと口を開いていた。

ミュミュが、辺りを飛び回っている。

「そうになったら、俺のことは……そうだなあ、伯爵あたりにでもしてもらって、どっか景色のいい領地に住まわせてくれて……、結婚はしなくていいから、綺麗なお姫サマをいっぱい紹介してくれりゃあいいや。どうだ？ いい話じゃないか？」

カイルは思いつきでペラペラ喋っていた。

「ようへいが出世して王様に！？ アストーレ王ケインに、カイル伯爵！？ すごい、すごい！ それなら、ケインが伝説の戦士だったってことにもなるから、ミュミュの見る目も合ってたってこと

だしね！ それじゃあ、ミュミュは、お姫様にしてもらおうかなあ
」

「おお！ ミュミュも、そうしてもらえよ！」

（おいおい、ミュミュがどうやって……？）

はしゃいでいるカイルとミュミュを前に、ケインは少し冷静にな
って、酒を飲む。

「だけど、城って退屈だよなあ。護衛やってて思うんだけど。な
んか肩も凝るし」

ケインがコキコキ首を鳴らし、肩を回す。

「それは、お前、護衛だから疲れるんだよ。退屈なのさ。王様に
なっちまえば、もっと楽しいぞ！ 国交のあるいろんな国を訪問出
来るしさ、美味しいものもいっぱい食べられるしさ、働かなくなっ
て金持ちだし……そうだ！ ゴールドランドだって行き放題なんだ
ぜ！」

調子に乗ったカイルが、ケインの肩をぽんぽん叩く。

「……ゴールドランド、行き放題……！」

ケインの瞳が、みるみるきらめいていく。

「そうそう！ わざわざセコセコと小銭を貯め込まなくて、思
い付いたらいつでも行けるし、いくらでも行けるんだぜ！」

「ゴ、ゴールドランドに、そんな何度も……！？」

「そうだぜ！ な？ いいだろ？ よーし、それじゃあ、未来のア
ストーレ王に乾杯だーっ！」

カイルが酒壺をケインの壺に傾けた。

壺は、鈍い音を立てた。

瞳を輝かせていたケインだったが、少し考えてから、真面目な顔
になった。

「……悪くはないんだけどさ、……何か大事なことを忘れてないか
？」

「何を？」

「例えば……、俺が、王女殿下を……」

好きになるのかどうか……とか。いや、かわいいとは思っただけ……妹みたいっていうか、……なんか、うまく言えないけど、……何かが違うような……？　それが、何なのか、俺もわからなくて……。それが、ハッキリしないことには、どうにも……」

がくつと、カイルは首をうなだれた。

「お前なあ、この後に及んで、なーにを言っただ？　この際、お前の気持ちなんか、どうでもいいんだよ」

「は！？」

「結婚なんて、どーせ誰としたって変わらないさ。だったら、条件のいい方がイイに決まっただろ？」

「そ、そんなことはないんじゃないか？　お前、結婚したことあんの？」

「あるわけないだろ？」

ますます口をあんぐり開けているケインを見ているうちに、カイルは、テンションをいくらかダウンさせて、一口、酒を啜ってから言った。

「でも、まあ、お前が、あんまり乗り気じゃないんなら、それもしょうがないよなー。純真無垢な少女って、一見可愛いけど、裏を返せば、何も知らないってことだから、結構めんどくさいんだよなー。ここの国では、一五歳まで男女別々に勉強するんだろ？　じゃあ、お姫様が年頃の男を見たのって、つい最近なわけじゃねえか？　最初に見たものを親鳥だと思ひ込む雛のように、お前なんかを見ただけで、ぽーっとなって、恋に恋してるだけかも知れねえよなー」

あははっとして単純に笑うカイルに、ケインは、意表をつかれて頭を殴られたかのように、一気に酔いが醒めた。

「ええっ！？　じゃあ、ケインが王様になるかも知れないっていうのは……？」

「現実には有り得っこないだろ？　そんなのは、おとぎ話の世界くらいだぜ」

「なんだあ、そうなのか」

ミュミュも、がっかりして飛ぶのをやめ、ケインのベッドの上に、足を投げ出して座った。

「そ、そうか、……そうだよな。だいたい、俺なんかが、そんなに簡単にモテるわけないしな」

「そうそう！　だけど、このまま姫のご機嫌を取って、気のある素振りでもして、姫の心をキープしておくんだな。そうしてて、損はないだろうよ」

「いや、だけど、そんな騙すようなことは……」

「騙すのとは違うぜ。夢見させてやるだけだって。それが功を奏して、そのうち、ホントに王様になれるかも知れねえぜ？」

その後、女心を掴む方法や話術を、カイルが得意気に講義していたが、いつしか、自分の過去の恋愛話に発展し、単なる自慢になっていた。

一方、王女の寝室では、天蓋付きの広い豪華なベッドの中で、アイリスが、一冊の書物を抱えて眠っていた。

それは、アストーレの貴族たちの間でベストセラーとなっている、三大恋物語のひとつ、『名もない兵士と王女の出会い』の巻であった。

王女と騎士

「大昔に存在した神の遣いであるホワイトドラゴンの化石の一部が、今でもパルストウル神殿で保管されているのです」

神殿行きの馬車の中で、アイリスが語る。

未習得であった白魔法をクレアから教わり、マスターしたので、神殿へ、洗礼を受けに行くところであった。

馬車の中には、アイリスと護衛のケイン、侍女兼白魔道教師のクレアがいる。

その他の馬車には女官たちが乗り、外には、ウマに乗った警備の兵がぞろぞろと付き添っていた。

貴族や神官以外は神殿には入ることが出来ない。

王女とクレア（まだ巫女の証明があったので）、女官たち以外は外で待つのは変わらずである。

警備兵たちは、ウマに餌をやったり、手入れをしたりして、休んでいた。

以前は、アイリスの誕生パーティーのために警備の人数を増やしていたので、国の親衛隊までが警備に加わっていたが、誘拐事件の決着が付いてからは、親衛隊は普段通りの訓練に戻り、警備は元通り警備兵のみになっていた。

正規の騎士たちである親衛隊ならば神殿にも入れたが、彼らは貴族ではなかったので、傭兵のケインと同じく、外で待たなければならなかった。

パルストウル神殿は、アストーレ郊外のそのまた山奥にある。ずっしりとした重みのある、石で出来た支柱が支える円形の建物だ。聖なる青い色の屋根は、日の光を浴びて輝きながら、天に向かって聳えている。

以前は気に留めていなかったが、建物の奥の方には青や赤、緑、

黄色などのステンドグラスが嵌め込まれていることに、ケインは気が付いた。その辺りが、礼拝堂なのだろうと思った。

「よお、ケイン！」

いきなり、目の前の何もない空間から、カイルが現れた。

「なっ……！ カイル！？」

彼の肩には、ミュミュが乗っている。

「いやあ、ミュミュが神殿見たいっていうからさー、今日は休みで、俺もヒマだったから、連れてきてもらっちゃったんだよ」

「ミュミュも、ヒトひとりくらいなら、運べるの知ってるでしょー？」

二人は、ヘラヘラ笑っていた。

ケインは、急いで他の兵士たちを見回したが、幸い誰にも気付かれてはいないようだった。

「何しに来たんだよ？ 見付かったら……」

「そのために、警備の制服で来たんだから、だいじょーぶ、だいじょーぶ」

カイルは、ケインと同じく紺色の制服姿だ。

「ミュミュも、見付かったら大騒ぎになるんだから、おとなしく隠れてろよ」

「うん。ミュミュ、神殿に祀^{まつ}つてあるホワイトドラゴンのウロコを見たら、すぐ帰るから、だいじょーぶだよ」

そういうと、ミュミュは直ちに神殿の中へと消えていった。

神聖なる神殿に、ミュミュのような異種族が入っていないものかどうか、ケインの頭をよぎったが、まあ、知ったことではない、と思い直した。

「……で、お前は どうするんだ？ 俺たちは入れないんだぞ」

ケインは、まだヘラヘラしているカイルに言った。

「そうだなー、ミュミュの用が済んだら、アトレ・シティーにでも行って、茶でも飲んで来ようかな」

またナンパだな、とケインはすぐさま見当が付いた。

「さつき、ちょっと町に寄ったんだけどさ、『ドーラ産水牛のしゃぶしゃぶの店』ってのがあったから、そっちも行ってみたいしなあ……」

カイルは、湧き出て来たよだれを、ごくんと飲み込んだ。

こいつって、スマートな見かけによらず、よく食うんだよな、な
どとケインが思っていると、カイルが何かを思い出した。

「そう言えば、マリスのヤツはどうしてるんだ？」

「ヴァルの、フェルディナンドでの用が済むまでは、遊んでるって
言ってたよ。因縁の宿敵を倒した後だから、ゆっくり羽伸ばしたい
のかもな」

「じゃあ、やっぱ、あれはマリスだったんだな」

カイルが、続けた。

「あいつ、珍しく黒いドレスなんか着て、めかしこんじゃってて、
やっぱりイイ女だったんだなー、なんて思ってたら、……驚くなよ、
男と一緒にだったんだよ」

「……マリスが……？」

ケインは、にわかには信じられずに、カイルの顔を不審そうに覗
き込んだ。

「それさあ、ほんとにマリスだったのか？ お前の見間違いじゃな
いのか？」

「いいや、俺が一度見た女を、間違えるわけないだろう？」

ちよっと怪しい気もしたが、ケインは黙って聞くことにした。

「あれは、普通の間柄じゃないと見た！ すっげーカッコいい男で、
マリスのヤツ、腕なんか組んじゃってさ。何だか、親し気だったぜ」

「……それ、ちゃんと正面から見たのか？ 女はマリスと同じ、紫
色の瞳だったのか？」

「いや、後ろ姿だけだからな、そこまでは確認してねえけど、あれ
は、絶対マリスだったぜ」

ケインは、安堵したような溜め息を吐いた。

「なんだよ、それじゃあ、マリスかどうかわかんないじゃないか」

カイルは、ケインの真横に並んだ。その眉間には皺が出来ている。
「お前、マリスが男連れてたら変か？」

「えっ？ ……いや、……ただ、ヴァルと一緒にいるのが自然に思えて……」

「ケイン、お前って、つくづく恋愛には疎いヤツだなあ！ 俺にはわかる！ あいつが操れるのは、何もロング・ブレードや召喚神だけじゃない。女ならではの武器だって、使いこなせるんだと……！」

ケインは、呆れてものが言えなかった。
アストーレに着いたばかりの時には、マリスのことを『お子ちゃま』発言してたくせに、と思いつく。

「あの男、この国の人間じゃないような感じだった。あのガタイや身なりからすると、俺たちのような傭兵とは違う、どこかの将校の路線が強い気がするぜ」

「じゃあ、もしかして、ベアトリクスとか、どこか外国の情報でも掴むために、わざとそう振る舞ってるんじゃない……」

情報のためとはいえ、マリスの操る武道の『愛技』を使っているのだとすると、居ても立ってもいられない思いがした。

だが、その将校のような男は、必要な情報を聞き出されたら、マリスの言っていたように殴られ、気絶させられるのかも知れない、などとケインは想像すると、クスツと笑いが漏れてしまうのだった。

「お前、まだ信じてねえな！？」

勘違いしたカイルが、ぶすつとする。

「いやいや、違うんだ。それで、お前は声をかけなかったのか？」

カイルは、腕を組んで、ふてくされたように、そっぽを向いた。

「俺よりイケメンかも知れない男となんか、話したくもねえからな」
ケインは、感心した。ただのナルシストではなく、一応、美的感覚はあったんだな、と。

「ケイン、カイル、大変だよー！」

血相を抱えたミュミュが、現れた。

「ドラゴンのウロコは見つかんないし、礼拝堂には、なんだかヘンな格好の大きな男たちがいっぱいいて、お姫様もクレアも捕まっちゃってるよー！」

「なんだって!？」

「まさか、賊が入り込んだのか!？」

貴族しか入ってはいけない掟だが、思わずケインもカイルも駆け出していた!

「ドアからは入れないように、『かんぬき』がしてあるよ。だから、ミュミュが運んであげる」

そう彼女の声がケインの頭に響いたと同時に、彼の身体はふわっと浮き、次の瞬間、目の前には、たくさんの野盗の集団と、取り押さえられている祭司長らしき法衣をまとった老人や、神官、巫女などが現れたのだった!

「うわっ!　なんだ、こいつ!？　どっから入ってきやがった!？」

ケインの側にいたモヒカン男が声を上げた。

どうやら、ケインは、今、礼拝堂の入り口にいるらしかった。

ミュミュが、空間を移動して運んだことなど、皆は知る由もない。

「ケイン！」

「ケイン様！」

祭壇の奥では、クレアとアイリス王女が、賊にロープで縛り上げられているところだった。

賊たちは、以前、王女を誘拐しようとした者たちではなく、全員が上半身に太いバンドを巻き付けた、典型的山賊コスチュームだった。

誘拐事件は、もう片付いたはずだった。

なのに、なぜまた……？

ケインの思いは、そこにいる誰もの思いも同じであった。

「ミュミュ、かんぬきを外してくれ」

彼は、辺りをさっと見回し、背に隠れているミュミュに、小声で伝えた。

「見たところ警備兵のようだな、小僧。どうやって入ったのかは知らないが、ひとりでするつもりだ？ こっちには、人質だっているんだぜ？」

入口近くにいた賊の数人が、ケインに近寄って行く。

その時、後ろからやって来る足音が聞こえると、ドアが勢いよく開き、カイルが警備兵たちとなだれ込んで来た。

捕まっているクレアや王女の姿を認め、カイルが小さく舌打ちするの、ケインにもわかる。

「貴様たち、何者だ！」

警備兵の隊長が問いたです。

「王女殿下と祭司長殿方を直ちにお放ししろ！」

「シッ！」

ケインが隊長を遮ったのは既に遅く、賊たちの顔つきが変わっていった。

「ほう、この小娘は、アストーレの姫さんだったのかい？ いいこと聞いたぜ、なあ、みんな！」

賊たちは、「おう！」と意気込んだ。

「伝説のドラゴンのウロコとやらを盗んでトンズラするつもりだったが、王女がいるとわかれば、計画変更だ！ アストーレ王に、多額の身の代金を請求してやれるぜ！」

「そうなりや、俺たちもしばらくリッチな生活が出来るぜー！」

野盗たちは、勝手に盛り上がっていた。

「おーっと、警備のおっちゃんたち、そこを動くなよ。ちょっとでも動いたら、あんたらの大事な王女殿下サマとやらに傷がつくぜ」

「へっへっへっ、さあ、武器をこっちに渡してもらおうか」

賊どもは、でかい段平を手に、にじり寄って来る。

警備兵たちは、なすすべなく、固まっているしかない。

「おお！ まさしく、青天の霹靂^{へきれき}じゃあ！」祭司長が叫んだ。

「うるせー！　じじい！」　野盗のひとりが祭司長を蹴り倒した。

「貴様あ！　祭司長殿になにをする！」

「やめぬか！　無礼者ども！」

警備兵たちが、わあわあ叫んでいたが、それ以上、何が出来るわけでもなかった。

「親分、どっちがお姫様なんですかね？」

ケインたちが武器を取り上げられている間、アイリスとクレアを指差し、小太りの間の抜けた顔をした禿げ頭の男が、体格のいい、首領らしい、特に人相の悪い腕組みをした男に尋ねる。

男は、ギロツと小男を見下した。

「バカ野郎！　豪華なドレスを着ている方に決まってるじゃねえか！……いや、待てよ……」

首領はクレアに近付き、彼女の顎に手をかけると、無理矢理顔を自分の方に向かせた。

「こっちの女官も、よく見るとなかなかの上玉だな。……よし、こっちは後で高く売るとするかあ！」

「なんだと！？　てめえ、クレアから手を放せ！」

カイルが叫ぶが、野盗たちはゲラゲラ笑うばかりで相手にしない。「親分、この巫女さんたちも売ってはどうですかね？」

ネズミのような、逆三角形の顔をした出っ歯の小男が、首領に提案した。

「おお、そうだな。巫女つつたら生娘のはずだ。こりゃあ、高く売れるぞ！」

どうやら、野盗たちはたいした計画性もなく、その場の思いつきで何事も決めているようだった。

当初の予定は、化石を盗むことだったようなので、それも仕方なかったのか。

「そういうことで、警備サンたち、ごくろーさん。アストーレ王によろしく」

首領と、王女たち人質を連れた者と、取り上げた武器を持った連

中は、奥の出口から撤退していった。

それ以外の賊たちは、大きな段平を手に、殺気立った笑いを浮かべ、礼拝堂の中央に追いやられた警備兵たちに、じりじりと歩み寄っていく。

まさしく、ケインは、この時を待っていた！

「ミュミュ、剣を！」

ケインが叫んだと同時に、彼の目の前に剣が、ぼたっと落ちた。礼拝堂に残った賊たちは一瞬驚き、引き退いた。

彼は、すぐさま足元に落ちてきた剣を拾う。が、それが自分のマスター・ソードでないことに気付く。

「ミュミュ、これ、俺のじゃないぞ」

「だゝって、すぐに見付からなかったんだもん！」

彼女は、ケインの髪の中から、ひょいっと逆さに顔を覗かせた。

まあ、いいかと、ケインは、正面から一氣に、野盗たちの剣を弾いていった！

突然の反撃に面食らった賊たちは、一瞬怯むが、すぐに応戦する。ミュミュが空間から一本ずつ剣を放り投げ、それに疑問を持つでもなく、警備兵たちも、即座に野盗に対抗していく。

だが、兵士の数は、それほど多くはない。賊の方が二〇人ほど上回っている。

ケインとカイルが兵士たちの2〜3倍の人数を受け持ったとしても、負傷する兵士も出て来ていて、ますます形勢不利になっていた。

賊というのは、本来情け容赦のない連中である。

前回の賊は、クリミアム王子の雇ったニセモノであり、彼がいいカッコしたかっただけなので、幸いケガ人はでなかったが、今回は本物の賊なので、怪我をした警備兵を数人がかりでいたぶり始めるなど、残忍な行為もあった。

（早く、なんとかしなくちゃ！）

ケインもカイルも、被害を最小限に抑えようと、奮闘する。

「てめえら、どうやって剣を……！？」

見ると、出口には、首領が戻ってきていた。取り上げた武器がなくなっていたので、引き返してきたのだ。

それでも、だんだんと出口に近付いていたケインは、相手をしていた賊どもを振り切り、首領の後ろを取ると、首領の太い腕をぐいっつと背に回し、剣を喉元に当てた。

「抵抗をやめろ！ さもないと、首領の命はないぞ！」

「ああっ！ 親分！」

騒いでいる賊たちに向かって、ケインはもう一度言う。

「抵抗をやめ、武器を捨てろ！」

彼に腕を締め付けられ、首領が苦しそうに呻き声を上げた。今まで戦っていた野盗たちが手にしていた武器を、放り投げ始める。

「凶に乗るな。武器を捨てるのは、貴様の方だ！」

そうケインの後ろで声がしたと同時に、彼は、首領の肩に掴まり、飛び越え、とっさに首領を盾にした。

「ばちばちばち……！」

「あちいっ！！！」

皮膚のやける嫌な匂いがし、首領が背を掻きむしりながら飛び上がった。

「くおら、ギューズ！ 何すんだ！ 俺様に当ててどうする！？」

首領は、後ろを振り返った。

「すいやせん、まさか、あの野郎がよけるとは……」

出っ歯の男が、黒い小袋をいくつか手にしながら、ぺこぺこ頭を下げる。

「小僧、親分を放しやがれ！ これが見えないか！」

途端に、ぞろぞろと、王女やクレア、祭司長らを連れた賊たちが再び現れる。

「ケイン、気を付けて！ 小袋には魔法の粉が入っているわ！」

炎』や『雷』の術が、呪文を唱えなくても使えるのよ！」
クレアが叫んだ。

「そういうことだ。親分を放さなければ、この中の誰かに、こいつを浴びせてやってもいいんだぜ？ 王女サマや、上玉のこのねーちゃんはおいというて、そうだな……、巫女のうちの誰かにでも浴びせてやるか！」

ネズミ男は、ひっひっひっと笑いながら、巫女たちを見回した。
人質たちが、悲鳴を上げる。

「……わかったよ。お前たちのかしらは、返してやる。だから、人質には何もするな」

ケインは持っていた剣を放り投げ、かしの背中を押した。

首領は、くるとケインを振り向くと、にやっと笑い、手を組み合わせてボキボキ鳴らした。

「ありがたいと言わないぜ、ぼうず」

そう言い終わらないうちに、首領の拳がケインに向かって振り下ろされた。それを、彼は飛んで回避したが、

「よけやがったな。だが、今度よけたら、人質に傷がつくことになるぜ」

首領の合図で、賊が巫女の一人の頬に、短剣をぴたりと当てる。
再び悲鳴が上がる。

「わかったら、観念しろ！　へっへっへっ……」

首領は、また手をボキボキと鳴らす。

「てめえだけは許しちやおかねえ。よりにもよって、俺様を人質にしようとするなんざ、ガキの分際でいい度胸してるじゃねえか。しかも、さっきは、てめえのせいで炎の粉を浴びせられたんだからな。……おお、そうだ！　ギューズ！　炎の粉を持って来い！　俺様と同じ思いを、こいつにも味わわせてやる！」

首領は、またしても思いつきで決めた。

ネズミ小男が、黒い小袋を持って、ヘラヘラ笑いながらやる。

「親分、炎の他にも、雷や、凍りつかせる術なんかもあるらしいでっせ」

「ふうん、どれどれ」

盗んだものであるのは、一目瞭然だった。彼らも、あまりよくわかってはいないようで、袋の中身を開けて、中に入っている小瓶を取り出し、瓶に書いてある文字を一生懸命読んでいる。

ケインは、こんなマヌケなやつらにやられるのは、まっぴらごめんだった。

（ミュミュ……！ まだか、マスター・ソードは……！）

今、頼りになるのは、彼女だけなのだ。

だが、まだ彼女が現れる様子もないまま、首領がにんまり笑った。「決まったぜ。貴様は、炎の刑に処す！」

「結局それかい！？」

さんざん考慮していた割には、当初の予定でいくことにしたらしい。

「へっへっへっ、よけるなよ！」

首領の小瓶を掴んだ手が、振り下ろされようとした時だった。

「どわわわーっ！！！」

「うぎゃああーっ！！！」

出口付近にいた賊たちが叫び声を上げ、次々と、噴水のように吹き上がっていく！

「な、なんだ！？」

ケインもカイルも、警備兵も、残りの夜盗も、呆氣に取られて、その光景を見ていた。

「ど、どうしたんだ！？ てめえら！」

首領も思わずビクビクしながら、声を上げた。

波が押し寄せるようにして、後ろの者から前の者へと飛び上がっているのは賊のみで、人質である王女やクレア、祭司長、神官、巫女たちは、すべて無事だった。

その時??

何かが高く、『野盗の噴水』の中から飛び上がったと思うと、空中でくるっと回転し、室内の前方にある祭壇の上に、ひらりと舞い降りた。

それは、真っ白な甲冑に覆われていた。

鎧の胴の部分には、金色の豪華な細工が巡らされており、きらきらと輝いている。剣は腰に下げてはいるが、抜いていない。

逆光のため、顔はよく見えないが、オレンジ色に輝く巻き毛をなびかせ、腕を組んで立っているその者は、ケインよりも小柄な戦士だった！

「て、てめえ……！ 何モンだ!？」

呆然と見つめていた首領は、我に返って喚いた。

「極悪非道を常とする愚かな悪党ども。私は、正義の神が遣わした白い騎士。天に代わって、貴様らを成敗する！」

そして、人差し指を、ビシッと首領の頭上に向けた。

「白い騎士!？ ……あいつは、何でも、最近、アトレ・シティーを襲う賊どもをやっつけているという、あの『白い騎士』なんじゃ……!？」

ネズミ小男が、怯えた声を出す。

「なにい!？ ふざけやがって! そんなヤツ、この俺様が……! おお、そうだ!」

首領は、また何か思い付き、いきなり走り出すと、王女を抱え、短剣を突きつけた。

何度目かの、女たちの悲鳴が上がる。

「動くんじゃねえ! これが見えねえか!」

首領が、王女の頬に短剣を、ぴたぴた当てる。

「いやあ! ケイン様あー!」

王女が、ナイフから顔を背け、固く閉じられた瞼からは、ぼろぼろと涙がこぼれた。

「姫！」ケインが叫ぶ。

白い騎士を名乗る戦士が現れても、不利な状況は変わりなかった。
「はーっはっはっはっ！　いくら貴様らが強くとも、こうして姫を人質に取られては、なすすべあるまい！　賊の天敵であるという白い騎士とて、アストーレの王女を見殺しには出来まい！」

白い騎士は、祭壇から床に舞い降りると、つかつかと首領に近付いていった。

「こ、こら、寄るな！　寄ると姫の命はないと言っておるのに！」
「それがどうした？　お前が姫を殺せば、その後私がお前を斬る。それだけのことだ」

白い騎士の冷淡な口調に、首領の顔色が変わった。

「ハッターだ！　そんなのはハッターだ！　お前だって、アストーレの騎士だろう！？」　王女が死んで、いいわけねえじゃねえか！」

「私がアストーレの騎士だなんて、誰が決めたんだ？」

白い騎士は、くすつと笑いをもらした。

途端に、首領の顔に、はつきりと困惑の色が浮かぶ。それを逃さず、白い騎士は、一気に首領の懐へ飛び込むと、瞬時に抜き放った剣で、首領の短剣を持つ腕を斬りつけた！

首領は、剣を落とし、腕を抱えて絶叫した。

白い騎士は、素早く王女を抱き寄せると、縄を切り、自分の首に王女の腕を巻き付かせて、片腕で抱え、飛び上がると、蹲うすくまっている首領の首に、着地と同時に蹴りを入れた。

首領は悲鳴も上げずに、失神した。

「お、親分が……！」

「そんな……！？　親分が、やられた……！」
賊どもは、逃げ腰になり、礼拝堂の中を逃げ回り始めるが、警備兵たちが追いかけて、縛り上げていく。

白い騎士も、王女を抱いたまま、飛び回り、次々と賊を蹴散らしていく。

ケインとカイル、警備の隊長たちは祭司長たちの救出に急ぐが、

そこは、白い騎士登場の際に賊は倒されていたので、人質の縄をほどこだけでよかった。

「クレア、大丈夫だったか？」

縄を解きながら、ケインが言った。カイルも、巫女たちの縄を解きながら、ホッとした表情でクレアを見る。

「ええ。……ごめんなさい、ケイン。私、せっかく剣を教えてもらってるのに、全然役に立たなくて」

「何言ってるんだ、まだ始めたばかりなんだし、実戦を積んでるわけじゃないんだから、そうすぐには使えるようにはならないよ。ましてや、相手は加減を知らない賊だったんだから。クレアはよく頑張ったよ」

ケインが微笑んで、クレアの肩に手を置くと、安心し、緊張が解けたクレアの目が、涙ぐむ。

「それにしても、ハデにやらかしたな、白い騎士^{あいつ}」

カイルが顎で指した方には、白目をむいた野盗たちが、様々な格好で倒れている。

死んではいないが、その様は、不気味であり、滑稽でもあった。

「……なあ、これと似たような光景、なんだか見覚えはないか？」

「え、ええ……なんとなく……」

ケインとクレアが、礼拝堂の惨事(?)を見つめていた目の前に、白い甲冑の戦士が、アイリス王女を抱いて、舞い降りた。

「殿下！」

ケインとクレアが駆け寄り、白い騎士を見て、ハッと息を飲んだ。風になびいたオレンジ色に輝く巻き毛。

白い面^{おもて}には、キリッとした眉に、バイオレットの瞳、高く筋の通った鼻、微笑んだ口元。

戦士は、姫を降ろすと、ケインに押し付けるようにして引き渡し、踵を返し、出口へと向かっていった。

「あ、あの……あなたは？ あなたのお名前は……？」

王女は、その軽い身体をケインに預けたまま、栗色の大きな瞳は、

白い姿に釘付けとなっていた。

戦士は、足を止めた。

「正義の白い騎士、マリユス・ミラー」

振り返りもせずにそう告げると、彼は、ひらりと白いマントを翻して、出て行った。

「殿下、お怪我はございませんでしたか？」

気を取り直して、ケインは、腕の中の王女を覗き込んだ。

アイリスは、白い騎士が去った後でも、ボーッとしたように、ずっと出口を見つめていた。

「……なんて素敵な方……」

その言葉は、ほとんど無意識のうちに、アイリスの唇から漏れていた。

ケインとクレアは、咄然となった。

王女の視線が、いつまでも白い騎士を追い求めているのを、ただ見守っているしかなかった。

「ありやりや?? まさか、まさか……??」

「ひえー、こりゃあ、ケインの立場ねえじゃん!？」

ミュミュとカイルのコソコソ話が、ケインの後ろから聞こえてくる。

（スマートで、ハンサムで頼もしい——確かに、白い騎士は、それに当てはまっている。だけど……）

ケインは、がくつと肩を落として、カイルを恨めし気に見る。

「お前ー、何が『町で見掛けた』だよ。ここにいたじゃないか」

「あ、ああ、そうみたいだな」

カイルが、えへへと笑ってごまかす。

（何が、マリユス・ミラーだ。こんなことってあるか? ……あい

つは、……あいつは、『マリス』じゃないか……!）

ケインの頭の中では、ゴールドランドがどんどん遠のいていく……。

傭兵上がりの、未来のアストーレ王は誕生にはならずか！？
ましてや、ヒーローの座を奪われた。このような形で……？？

祭司長の叫んだ『青天の霹靂』——ケインにとって、まさしく、
それは、それ以外のなにものでもなかった——。

白い騎士

「最近、野盗の集団が多くなったなあ」

「この間なんて、ベンの店が襲われたらしいぜ」

「サドルんとも、被害に遭ったんだってさ」

「立て続けに？ おお、物騒なこった！」

「国交が盛んになって、国が大きくなったのはいいが、流れ者どもにも目をつけられるのはごめんだよなあ」

「ほんと、ほんと」

「だけど、いいやつも現れたらしいじゃないか」

「ああ、『白い騎士』だろ？ 噂では、白い甲冑を着たまだ若い青年ということらしいが……ほんとにそんなやつ、いるのか？」

「トールのやつが、アリア通りで、野次馬の人垣が出来てたんで覗いてみると、野盗の集団が骨董品屋を襲っていたらしいんだ。そこに、現れたんだってさ」

「白い騎士がか？」

「そう。白地に金色の模様の入った甲冑姿で、すごい美少年だったらしい。軽い身のこなしで、一気に二、三〇人の野盗どもをやっつけてしまったんだそうだ」

「へえ、すごいんだなあ！ そんなやつがこのアトレ・シティーにいたとはなあ！」

「まさに、神が遣わした正義の騎士だって、トールは言ってたぜ」

街の食堂兼酒場の、後ろのテーブルからは、噂話が聞こえていた。

ケインは骨付き肉をたいらげ、木の実酒を一口飲んだ。

（マリスのヤツ、結構有名になっているらしいな）

町外れの鍛冶屋で作直した甲冑を着て、予告通り、思いっきり暴れているのだろう。

ハデに遊んでいるせいか、すぐに噂になったらしいことも見当が付く。

銀色の甲冑のままだった時は、目立たないように抑えてきたようだったが、そのうっぶんを今ここではらしているのか。

食事が終わったケインは、宿屋へ向かい、マリスが一人で宿泊している部屋を訪ねるが、戻っている様子はない。

部屋のドアに寄りかかって、彼女の現れるのを待つ。

どのくらいの時間が経ったのか。剣を抱えて座り込むと、いつしかうたた寝していた。

しばらくして、階段を上る足音に気付き、顔を上げると――

「……ケイン？」

身体にぴったりとした黒いドレスの女が、そこに現れた。「どうしたの？」

思わず目をこすりながら、ケインが慌てて立ち上がる。

「ああ、ちょっと伝言があつてな……。すぐ済ませて帰るから」

夜に女性の部屋に上がりこむことを氣遣ったケインに反して、マリスは好意的な笑みを浮かべる。

「ね、さっき、これ買ったの。一緒に飲まない？」

マリスは、紅茶の入った袋を見せた。

（そっか。武遊浮術を極めた彼女に、怖いものなどないか）

マリスとヴァルドリューズの宿敵グスタフを倒してからというもの、彼らが話をするのは初めてだった。

ケインは、マリスの部屋で、マラスキーノ・ティーをご馳走になっていた。

マリスは、露出した肩の上に、白い絹をはおり、黒い薄布を口にくわえると、長い髪を横に持っていき、一本の三つ編みに編んでいた。

その様子を見ていた彼は、ふと不思議に思った。彼女は、こんなに髪が長かったのか、と。

いつも、頭の上の方でとめていて、降りた部分が、ちょうど肩につくくらいの長さだったのだ。本当は、背中を覆うほどもあったの

かと、初めて気が付いた。

「今日はよく働いたわ。野盗の集団を三つもやっつけたんだもの。ああ、お茶がおいしいわ!」

くわえていた黒い布で髪を結わいてから、マリスは嬉しそうにマラスキーノ・ティーに口をつけた。

「とても、そんな後には見えないけどな」ケインが笑う。

「白い騎士は、青年だと思われてるから……って、あたしがそう振る舞ってるんだけどね。少年服だと、すぐに正体バレそうだから、こうやって全然違うカッコしてるのよ。おかげで、まだ誰にも気付かれてないわ」

見た目は美しく、近付き難い外見の彼女であったが、砕けた口調と、口ほどに喋る瞳が、人好きのする印象を与える。

これまでの短い付き合いの間でも、少年、ドレス、甲冑姿……と様々な変装を目にしてきたが、どれもまったく違う雰囲気であるのに、不思議と、彼女の魅力を損なうことはなかった。

いろいろな表情を持つ彼女の、またひとつ違うタイプの変身に、ケインは脱帽し、感心してもいた。

「それで、伝言で、何なの?」

「ああ。アイリス王女が、『白い騎士』に会いたがってるんだが……どうだ?」

マリスは、紅茶の入った器を手にしたまま、まじまじとケインの顔を覗き込んだ。

「お姫様が……?　なんで?」

神殿で野盗を捕えてからその後、王女は白い騎士の話ばかりしていた。

『あのような方が、このアストーレにいらしたなんて……しかも、わたくし、あんなに美しい男の方は、生まれて初めてですわ!』
『わたくしは、武道のことはよくはわかりませんが、おそらく、相当訓練なされたのでしょうね。あの方とケイン様では、どちらがお

強いのかしら？ ケイン様は、どう思われまして？ 』

『今どちらにいらっしゃるのかしら……。こんなことが頼めるのは、あなたしかいないの。お願い、もう一度、あのお方に会わせてくだらない？ 』

などと、こんな調子であることを伝える。

マリスは、マラスキーノの香草を、箱の中から取り出し、熱い湯の入ったツボを傾ける。充分に色と香りを出してから、ケインの器に注ぎ足し、自分にも注いだ。

「なんだか面倒ねえ。さっさと『白い騎士』の正体をバラしちゃえば？」

「あんなにウキウキしてるのに、そんなこと、俺に出来るわけないだろ？」

「どうして？ 『白い騎士は、殿下の思い描いておられるような者とは違います。ヒマつぶしに正義の味方ごっこをしている、ただの女戦士なんですよ』って、教えてあげれば、もう白い騎士^{あたし}には何の興味に抱かなくなるでしょう？ それとも、姫の夢を壊したくはないとでもいうの？ それって、なんか違うんじゃないの？」

マリスは、椅子の背にもたれかかり、紅茶を口に含んだ。

しばらく考えていたケインだったが、次第に頷いた。

「……そうだな。こういうのって、やさしさとは違うよな。ああ、だけど、本当のこと話したら、王女様、ショックを受けるだろうなあ」

じっと見ていたマリスが、いたずらっ子のように瞳をきらめかせ、ガラッと口調を変える。

「ケインて、ああいう子がシュミだったの？ ヘー、意外だわ。でも、なかなかお似合いじゃない？」

「ちっ、違うよ！ もー、なんでみんな、俺と王女をくっつけようとするんだか」

頬に赤みが差しているケインを見て、マリスは、ふふふと笑うと、

棚から酒のツボを取り出し、二つの杯に注ぐと、一つをケインに渡し、もう一つを手を取った。

「ま、考えとくわ。それも、ケインの仕事なんだったら」

「お前に雇われてるのに、……悪いな」

「あら、いいのよ。適当に稼いでてくれていいって言ったの、あたしなんだから」

マリスは気にも留めていないようで、けろっと言った。

「今度、カイルもクレアも呼んで、飲みたいわね。皆といると、士官学校の仲間と、いろいろ暴れた時のことを思い出すわ。ケインみたいに、剣が得意で強かったダンや、クレアみたいな巫女見習いの――今は、もう巫女になったと思うけど、マーガレットって女の子もいたのよ」

「そう言えば、グスタフが、お前のこと『隊長』とかって言ったよな？　士官学校にまで行ってたのか。ベアトリクス of 騎士になるために？」

マリスは、苦笑混じりに笑った。

「貴族も平民も入り混じっていた学校でね。ベアトリクスは、知っての通り、軍隊に力を入れているからね。小さいうちから、その手の学校に行くのが当たり前なのよ。優秀な人材は、貴族だろうと平民だろうと、平等に扱っていたわ。少なくとも、学校内ではね。もっとも、女の子で通う子は少ないけど、兄達も行っていたから、あたしはそれが当たり前だとも思っていて」

それで、巫女と貴族を両親に持つ、お上品な生まれである彼女が、『イン○ン野郎！』や『ケツの穴』などという、下品な言葉を知っていたわけだと、ケインは勝手に納得した。

「よく暴れたわー。ダンと一緒に他の子たちを仕切って悪さもしたし……そうそう！　『野盗狩り』もその時に味占めちゃって、未だに続いてるくらいだし」

マリスは、単純にころころと笑っていた。

（きっと、そのダンてヤツが、彼女に悪い影響をもたらしただな。

責任取れよな、ダン！」

罪悪感の微塵も現れていないその笑顔を前にして、ケインは、そんなことを考えた。

「その、野盗狩りしてたのって、いくつくらいの話？」

「そうねえ、士官学校は一三歳で卒業しちゃったから……十歳前後だったかしら」

「そ、そんなときから、賊を相手にしてたのか!？」

「やあねー、集団だから勝ってたのよ。あたしひとりじゃとてもとても……」

彼女は、ころころ笑いながら、手をぴらぴら振ってみせた。

「そんな小さい頃から、賊を苛めて快感を覚えていたとは……恐ろしいヤツだな！」

ケインが、冗談めかして言った。

「そっかあ、あたし、ケインのことは、なんだか初めて会った気がしないと思っていたけど、それって、ダンに感じが似てたからだわ。見た目は全然違うのに」

マリスが、懐かしそうな顔をした。

「元気で、わんぱく坊主で……ダンとあたしは、手に負えないって、いつも教官を困らせていたわ。野盗だって、軍隊だって、ダンとあたしがいれば、負け知らずだったんだから。ケインも小さい頃は、暴れん坊だったんじゃないの？ だからこそ、今は、落ち着いちゃつてるとか？」

「お前と一緒にするなよ。俺は、わざわざ賊にケンカふっかけたりはしなかったし、そんな風に気楽に学校なんか通ってたわけじゃないんだからな。いきなり実戦だったんだ。快感なんか、感じるどころじゃなかったんだぜ？」

わざとしかめっ面をして見せるが、彼女は面白そうに彼を見ているだけだった。

マリスは、アイリス王女と違って、彼のことは全然怖がる様子はない。

王女の前では、いかに、嫌われないよう、話す時は笑顔で、言葉遣いも気遣い、ガサツにならないよう、物腰は丁寧に……などと努めていて、それが今まで窮屈であったことを、ケインは改めて感じさせられた。

戦士であるマリスの前では、例え彼女が貴族の出であったとしても、対等である——それが、雇われる時の条件でもあったのだから、雇い主と雇われ人という関係であっても、気兼ねはしなかった。

唯一、『武遊浮術』の『愛技』さえ、使わなくてくれれば——彼は、そう願っていたし、マリスも、初級編を披露してみせて以来は、少なくとも、彼にはそのような素振りは見せなかった。

野盗を退治した時の話や、士官学校の話、友達の話などで話が弾み、話の尽きることはないかに思われた時、マリスが、ふいに眠気に襲われ、欠伸あくびをした。

「あら、もう寝酒がないわ。やゝね、いつの間に、そんなに飲んじやったのかしら？ ……そうだ、ケイン、悪いけど、片付けておいてくれない？ あたし、もう眠くて眠くて……。はー、さすがに、野盗団三つ撃退の後は疲れたのか、酒の回りが速いみたい。じゃ……」

欠伸混じりにそう言うと、マリスは、床にバタンと、俯うつむせに倒れ込んでしまった。

なんてマイペースなヤツ、と呆れながらも、一応、声をかける。

「そんなところで寝てると、風邪引くぞ」

反応がないので、ケインは、彼女のことはそのまま転がしておき、酒などのツボや杯を元通り、壁際の低い棚の上に戻す。

そして、すぐに部屋を去ろうとして、ふと思いつ留まった。

（そういえば、寝る時は、インカの香を炊いてるんだっけ？）
ヴァルドリューズと離れている今、魔道士の使うインカの香を炊いて、結果としているのだと聞いた覚えがある。

「おいしい、マリス、インカの香は、どこだ？」
「なんとも返事がない。」

実は寝た振りをしていて、いきなり襲いかかられ、『愛技』を使われたら……と、一瞬、その考えがよぎると、近付くのは怖かったのだが、そのうち規則正しい寝息が聞こえてきて、どうやら完全に彼女は眠ってしまったらしいことがわかった。

「せめて、ベッドで寝ろよな。しかも、靴くらい脱げよ」

肩を揺さぶってみても、起きる気配はない。マリスのブーツを脱がせてから、そうっと抱きかかえ、アイリス王女よりも多少の重さを感じながら、マリスをベッドまで運ぶ。

「……セルフイス……」

ふと、マリスの唇から、小さい呟きがこぼれた。

「マリス、起きたのか？ インカの香はどこに……？」

顔を覗き込むが、何の反応もない。

（寝言か……。誰のことだろう？ 俺に似てるヤツってのは、確かダンって言ってたけど）

『セルフイス』とは、男にも女にも取れる名前だった。

窓の近くの棚を探すと、香炉はすぐに見付かり、引き出しには、香の袋がいくつかあった。

香りも、それぞれ違っていて、インカの香なのか、普通の香なのかもわからない。

炊いたところで、結界にならなければ意味がなかった。

ヴァルドリユーズと彼女は、いつも同じ部屋だった。

夜の間も、彼女を魔の力から守るために。

ケインは、どうしたものか迷ったが、完全に寝入っている彼女の、まったく大人なんだか子供なんだかわからないあどけない寝顔を見ているうちに、決心がついた。

彼は、マスター・ソードを抱えると、ベッドの下に座り込んだのだった。

王女と白い騎士

「なんて素晴らしい詩なのかしら！　ねえ、ケイン様もお読みになつてみて！」

翌日、ケインは、寝不足の目を一生懸命見開いて、王女の護衛に励んでいたのだが、このごろは何か事件が起こるわけでもなく、すっかり平和だったので、ほとんど王女の話し相手となっていた。

パルストウル神殿は、野盗が暴れたせいで、今は修理中であり、王女の巫女の洗礼は引き延ばされていた。

洗礼を受けた後は、また祝賀会が催される。

（貴族って、お祭りごとが好きだよなー）

ケインは欠伸を噛み殺し、王女から、分厚い詩集を受け取り、勧められるままに目を通してみるが、寝不足で目がしょぼしょぼしているせいもあれば、そのような恋歌には、始めから何の興味も持っていなかったのも、余計に頭に入らなかった。

ただ、『愛』だの『○○の花のよう』だの『美しい』……といった文字が、やたら目につくなー、と思っただけだった。

それにしても、貴族のお姫様方には、こういうものがウケるのか、とまたまたカルチャーショックである。

平民や傭兵たちの間で流行っていたのは、吟遊詩人の唄う、ある英雄の勇ましい武勇伝などであって、恋歌にしても、そのような表現はあまり出て来ない感じだったと、思い起こす。

「いかがでした？」

アイリスが、期待を込めた目で見上げる。

彼は、適当な言葉で逃げた。

この頃、ケインは、つくづく感じる。

王女は自分のことを『気のいいお兄さん』としか思っていないらしい、と。

実は、当初からそうだったのか、白い騎士の登場によってなのか。

少なくとも、自分はヒーローに位置していたと思っていたのが、すっかりその座を白い騎士に奪われているような気がする。

（それって、男の俺よりも、女のマリスの方が『強くてカッコよかった』って、ことだろ？）

それは、いくらなんでも、惨め過ぎた。

しかも、アイリスは、無邪気に『あのお方のお住まいは見付かりまして？』などと、毎日聞いてくる始末だ。

「この詩に出て来る『美少年の剣士』って、あの方に似ていると思いませんか？」

「またもや、『マリユス』の話だった。」

王女は、うっとりとした表情で、ケインの返事も待たずに続ける。「この物語のように、あの方も、実はどこかの王子様で、お城をこっそり抜け出して、庶民のために戦っていて、そうしているうちに、すべての人を守るための旅に出してしまったのではないかしら？」

あのお方には、何か高貴な感じが致しましたもの。きっと、そうに違いありませんわ！　ねっねっ？　ケイン様もそう思いになるでしょう？」

「は、はあ、そうですね……」

いくぶん、引き攣った笑顔で、ケインは答えてしまった。そこへ、クレアが、装飾品のついたケースを持ってくる。

「アイリス様、マリー・カルザス様から、髪飾りがお届けになりました」

「まあ！　さっそく着けてみたいわ！」

豪華なドレッサーの前に王女が座り、クレアが、王女の髪を梳かし始めた。

「……素敵……！」

「とてもよくお似合いですよ」

鏡の中を、二人の少女は覗き込む。

王女の髪には、小さな丸い宝石がいくつもついたレースのリボンが編み込まれていた。

「クレアも着けてみて」

「ええっ？ そのようなことは、わたくしにはもったいないですわ！」

「あなたが着けているのを、見てみたいのよ」

「まあ……！」

今度は、クレアが椅子に座り、アイリスがクレアの髪を梳かす。

二人は、仲が良かった。

アイリスは、クレアを侍女代行というより、友達のように接し、クレアの方も、侍女と白魔法教師というだけでなく、時には姉のようにアイリスをやさしく見守っているように、ケインには映っていた。

さすがに野郎二人とは違うかと、自分とカイルのやり取りとを比べて、彼は心の中で苦笑していた。

そのような微笑ましい光景を眺めていると、誰もが暖かい気持ちになっていたことだろう。

コツン

窓に何か当たったのを見に、ケインが窓際へいく。

（どうせ、またカイルのヤツだろう）

だが、彼が交替するには、まだ早い時間だ。

（さては、あいつ、サボったな？）

そう思いながら、窓の下を覗いてみると――

「やつほー、ケイン。お勤め、ご苦労様！」

「……！」

そこには、白い甲冑姿のマリスが、ミュミュを肩に止まらせていたのだった。

例によって、ミュミュが運んだとわかる。

「ケイン様？ どうかなさって？」

アイリスが、顔だけ窓の方に向けている。

「い、いいえ。……ちよっと、庭にネズミがいたものですから、今、追っ払ってきます」

「ええっ!? ネズミですって!? ……あの、早く追いつめて下さいね」

アイリスは慌てて、クレアとともに、部屋の奥へ引っ込んだ。

ケインが窓から地面に降り立つ。

「ネズミとは、随分な言い草じゃないの」

腕を組んで壁に寄りかかっていたマリスは、苦笑いをしていた。

「どうしたんだよ、マリス」

「あら、ケインの言う通り、お姫様に会いに来たんじゃないの」

「……気が進まなかったんじゃないのかよ?」

「昨日はね。でも、気が変わったわ。会ってあげてもいいかな?」
ケインこそ、何を警戒してるのよ? ……あ、そっか、あたしが『愛技』で、王女をメロメロにしちゃうんじゃないかって、心配してるのね? 大丈夫よ、そんなことしないから安心してよ。あはははは……」

「誰が、そんな異常な心配するか!」

ミュミュが面白がって、彼の頭に乗った。

またマリスにからかわれたと思った彼は、すぐに平常を取り戻すと、にやっと笑ってみせた。

「セルフイスって誰だ?」

マリスの顔色が変わった。

「なっ! なんて、ケインがそんなこと……!?!」

途端に、彼女がうろたえ出し、思ったよりも効果があったことで、ケインは、ちょっとからかってやろうと思った。

「昨日、お前、『セルフイス、ごめんなさい』って、何度も言っ泣いてたぞ」

マリスは、キッと彼を見据えると、わなわなと振るわせた拳を、固く握りしめた。

「な、なんだよ、そんなに怒んなくても……!」
とっさに、受け身の態勢を取るケインの頭から、ミュミュが飛び

上がって、空間に逃げ込んだ。

だが、マリスは、そのまま動かなかった。

ただし、彼を睨んでいる瞳は、今にも泣き出しそうなくらい潤んでいる。

（……もしかして、当たりだったのか!?!）

しばらくすると、マリスは、ケインから視線を反らし、ふっと、諦めたように、力なく笑った。

「……そう、あたしが、そんなことを……。でも、今はもう、どうだっていいことよ。何で今さら……。昨日、昔のことを思い出して、ちよっと懐かしくなっちゃったからかしらね。……でも、あたしかったら、ケインに、そんなことまで……」

適当に言ってみたただけだとは、言い出し辛くなったケインだったが。

マリスは珍しく感情をさらけ出してしまったのを、急に後悔したのか、慌てて何でもないような顔を作った。

「……マリス……?」

話しかけられるのを避けるように、彼女がにっこりと笑顔を作ったと同時に、

「ケイン様、ネズミはもう……?」

アイリスとクレアが、窓の下を覗きに來たのだった。

「……白い騎士……!?!」

アイリスは、その場で硬直していた。

「……マリ……!」

「マリユスです。ご機嫌麗しゅう、アイリス王女殿下」

クレアの声を打ち消して、マリスが一瞬にして、青年騎士を装う。

「……ま、まあ! わたくしの名前をご存知で……?」

「もちろんです。今日は、殿下に御会いするためにやって参りました。よろしかったら、お部屋にあげて頂けませんか?」

「は、はい……! ど、どうぞ!」

『彼』は、窓枠に手をかけ、ひらりと室内に入った。

身のこなし方も、王女に向かってする微笑も、自信に満ち、美しいことを十分に踏まえているものだった。

アイリスは、ポーツと、『マリユス』に見とれていた。

「そ、そうだわ！ クレア、お茶を」

「は、はい。ただ今……」

クレアが引っ込むと、アイリスは、ケインににこにこ微笑む。

「やっぱり、ケイン様は、探してきて下さったのね！ マリユス様、ケイン様は、常にわたくしに忠実で、わたくしのお願いを、何でも叶えて下さるの！」

アイリスは、はしゃいでいた。

「ふーん、あんた、このお姫様に、随分とナメられたものね」

「……おまえに言われたくないけど？」

マリユスとケインは、アイリスに聞こえないように、こそこそ喋る。

その後、ケインは、部屋の隅に立ち、アイリスとマリユスがソファに腰掛けたところで、クレアが紅茶を運んできた。

「あの……わたくしに、ご用というのは……？」

幾分、震える手で、アイリスが紅茶を口に運ぶ。

「実は、姫様にお願いがあって、参りました」

「ま、まあ、わたくしに……？」

マリユスは、キリツとした目で、アイリスを見つめる。アイリスは、ポツと頬を赤らめ、慌てて目を反らした。

「先日のパルストウル神殿の件もそうですが、最近アトレ・シテイーでは盗賊どもが増えてまいりました。町民によりますと、以前はそうでもなく、ごく最近のことだといえます。

それについて、私が思うには、おそらく、北の山に巣くっていた山賊どもが、なだれこんで来ているのではないかと……」

「なんだって！？」

思わずケインが叫んだので、一斉に彼の方を向いた。
マリユスは続けた。

「私も調べてみましたが、あの山の向こうの街道の、その向こうにも山がいくつかあり、お隣のガストー公国の国境までは、あまり大きな町は存在しておりませんでした。」

その街道で、旅人を襲っていた盗賊団や、他の山を陣取っていたならず者どもが、物資も豊かで栄えているこちらの城下町に目を付け、まだ国境警備隊の準備もままならない北の山からの侵入を試みたものと思われます。あの山も、大分、見通しがよくなりましたからね」

マリスは、いけしゃあしゃあと、そう言いわけ、悠長な仕草で、お茶を啜った。

ヤミ魔道士グスタフを一撃で倒し、その時、山の頂上に生えていたものを一気に削り取ったのは、他ならぬ、マリスとヴァルドリューズの操る『獣神サンダガー』の仕業なのだから。

ケインは、ふと思いついた。

マリスが白い騎士を名乗って盗賊団を倒して回っているのは、自分のしたことの後始末なのかも知れない、と。

話を聞いていた王女は、おろおろして両手を揉み出した。

「……そ、そんな……！ では、今、町の人たちは……」

「今のところは、私が民たちをお守りしていますから、大事には至っておりませんが、早く手を打たれた方がよろしいでしょうね」

マリユスは、平然と紅茶を啜る。

「……あの、……どうすれば……？」

王女が両手を組み合わせ、おそろおそろマリユスを見上げている。それには、眉をひそめてから、『彼』は答えた。

「出来るだけ早く、北の山に国境警備隊を設置なされた方がよろしいのではないですか？ 町の警備隊も、今までより人員を増やし、ここで奴等を撃退しておかねば、いずれ、もっと被害が出ることになりますよ。……アストーレの貴族たちは、ご自分たちが平和だと、平民のことなど気が回らなくなってしまうのですか？」

マリユスは、にこりともせず、冷たく言い放っていた。

王女が、ビクッと怯えたように、白い騎士を見ている。

「……少し言葉が過ぎるぞ」

「それは、失礼致しました」

マリユスは、ケインの方を振り向き、何の感情もこもっていない声で返す。

「……知らなかったとはいえ、そこまで町の人が迷惑していたなんて……。すぐに、父王に知らせます。あの、父王にも、今のお話をして下さいませんか？」

王女は、クレアを連れて、急いで部屋を出て行った。

「……なんなの！？ あれでも、未来の国王妃なの？ あれくらいの対策、自分で思い付いて欲しいわね。情けない！」

マリスが——もういつもの彼女の口調に戻っていた——イライラしている。

その時、ケインは、自分が王女に抱いていた、今一步踏み切れなんでいる原因が、わかった気がした。

（そうだったんだ。アイリス王女のこととは、かわいいとは思っていたけど、庶民のことを考えているとか、未来のアストーレを背負う王妃となる人材であるのに、その自覚が見えないというか……。俺は、そういうことが引かかっていたんだ！）

平民の生まれで傭兵の彼は、諸国を渡り歩いていた。

貧富の差の激しい国もあった。

よろず屋として庶民と触れているうちに、彼らが国に不満を持っていることや、暮らしに満足していないことも、見てきた。

なのに、王女がかわいいままであることが、彼には現実離れ、浮世離れして思え、どこかで、そういうものではないはずだと、思っていたのが、マリスの言葉ではっきりと形になったのだった。

ケインは、感心するように言った。

「お前の言うことは、最もだよ。王族や貴族が町の人の声に鈍感だと、庶民の暮らしは、ちっともよくなならない。俺も、そう思うよ。

アストーレは、俺が今まで見て来た国でも、治安もいいし、庶民

もそれほど貧乏してないから良い方だけど、王様が、王女が政治と関わらないようにしてるのか、彼女は、民のことをあんまり知らないみたいなんだ。

そういう問題は、アイリス王女のところに直接来るもんじゃないみたいだったし、ましてや、懂れてたお前に、いきなりそんな話をされて、驚いたんだろう」

「あたしのいたベアトリクスは、あんなんじゃ勤まらないわ。王女だからって、王に政治の話を任せっぱなしなんてことはなかったわ。男でも女でも、上に立つものは、常に『やり手』だったもの」

「そう言えば、あそこは、今、女王が治めてるんだっけ？ 過去にも何度か、女王が政権を執っていたりしてたよな？ 確かに、ベアトリクスでは、やり手じゃないと勤まらなそうだなあ。

ここアストーレでは、王様も穏やかでいい人だし、政治的なことだって、優秀な参謀が付いてるから、それでも上手くいってるみたいだよな。

だから、ちょっとくらい王族や貴族がおっとりしているようでも、それは、その国それぞれの持ち味だって、俺は思うんだ」

やんわり言う彼を、マリスは、少し見直したように見つめた。

「……ケインて、思ったよりも大人なのね」

彼の方が年上にもかかわらず、彼女は、そう給^{のたま}った。

「……そうよね、国は、それぞれよね。ベアトリクスが住み易かったかっていうと、そうでもなかったから、あたしは逃げてきたんだものね……。ああ、あんな国に未練なんかなかったんだけどな」

マリスは、勝手にポットから紅茶を注ぎ足した。

「……マリス、昨日言ってた友達のダンてヤツは、どうしたんだ？ 置いてきちゃったのか？」

ケインは、マリスのソファに手をかけて、覗き込む。

「……彼が、あたしを置いてったのよ……」

少し、沈んだ声で返す。

「どうして？ ああ、話したくなかったら、いいんだけど……」

マリスは紅茶の入っていた器をテーブルに置いてから、言葉を慎重に選ぶように、ゆっくり答えた。

「……運命を受け入れられなくて……かしらね……」

ケインは、黙って、その様子を見つめた。

「その時のあたしには、あんまりわからなかったけど、やっぱり、彼の存在は大きかったのかもって、後になってだんだんわかってきたの。……だから、あたしは、あなたを雇ったのかも知れないわね。少なくとも、契約しているうちは、あたしと一緒に戦ってくれるでしょう？」

「それは、当然だけど……」

自分が雇われたのは、剣の腕さえあれば、誰でも良かったのだとばかり思っていたケインには、少し意外であった。

「ずっと旅していると、なんか人恋しくなっちゃうのかな。ほら、ヴアルのヤツは、いつつも冷静で、ヒト離れしてるじゃない？ あいつ、からかって、ちつともノッてこないんだもん。もう、一年以上あいつと旅してるけど、ずーっとあんな感じよ。

頼りにはなるヤツだけど、……なんか、淋しかったような……。

カイルに出会って、ケインとクレアが加わって、ダンと一緒に暴れてた、あの士官学校時代がまた甦ってきたみたいだったわ。やっぱり仲間っていいな、って思っ」

「その仲間と、ほとんど一緒にいないじゃないか。俺はまた、マリスって単独行動が好きなのかってたよ。ヴアルなら、そんなお前を放っておけるから、お前たちは旅を続けられているんだって。

……あれ？ だけど、あいつって、なんとかっていう魔道士からお前を守るって言われてるんだろ？ その割には、全然一緒にいないよな？ 今だって、ダミアスさんと外国なんか行っちゃってるし……いいのか？ 職務怠慢で、あのカシスルビーの大魔道士に怒られないのか？」

マリスが、くすくす笑った。

「放っておいても大丈夫って判断してるのよ。今のところは、まだ、

ね……」

「マリス、お前、何に狙われてるんだ？ どうして……？」

心配そうなケインの瞳から、目を反らしてから、マリスは、ふつと笑った。

「いろいろとね。『サンダガー』を守護神に持つものの運命……つて、ヤツかしらね」

ケインの頭の中では、『運命なんか、この手で変えてみせる！』と、湖で、そう言った彼女の言葉が、思い出されていた。

旅の全貌

アトレキア王のもとへ、町の近況報告をマリユスが告げると、直ちに会議が執り行われ、北の山の警備の設置と、町の警備隊の増員が決まった。

ヴァルドリューズはまだ外国から戻らないが、彼を覗いた一行のメンバーは、マリスの部屋に集まっていた。

「いやあ、久しぶりだよなー。お城で真面目に仕事なんかしちゃつてると、今までみたいにな、ぷらぷら出来なくてさー、たまには息抜きが必要だよなー」

カイルが、あぐらをかいて床に座り込み、木の実酒の壺をごくくと呷^{あお}った。

「へえ、カイル、女官をナンパはしてないの？」

マリスが、からかった。

マリスは昨日とは違い、町娘の格好で、髪をひとつの三つ編みに結っていた。

「それがさあ、俺に気のある女官がいるんだが、城の中は、人の目が多くて、これがなかなか……」

「まあ！ 不謹慎な！」

そう怒り出したのは、やはり、クレアだった。

ホラ話を信じている彼女を、面白がって、カイルがますますからかっている。

「木の実酒って、おいしーねー！」

ケインの膝の上では、ミュミュが、器に入っている酒をぺろぺろ舐めて、上機嫌になっていた。

「おいおい、ミュミュ、大丈夫か？」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。人間はいいね。こんなもの毎日飲んでるのかー」

ミュミュは、お行儀悪く、口を手で拭い、足を投げ出していた。

「マリス、これからどうするつもりだ？　ヴァルが戻ってきたら、今度はどこに行くんだ？」

マリスは、杯を手にして、ケインを振り向いた。

「あら、ケインは、王女様と結婚して、アストーレに残るんじゃないかなかったの？」

「……俺は、真面目に聞いてるんだよ！　……だいたい、お前がジヤマしてるんじゃないか」

ケインは、後半は、口の中で呟いた。

「そうねえ……魔物のいそうな辺りを風潰^{しらみ}しに……ってのは飽きてきたし……考えとくわ」

「……ホントにお前、隊長だったのか？　何の計画性もないんじゃない、その辺の野盗と変わらないぞ？」

「やゝね、ケインたら、飲んでるのにシラフなんだから。先のことは、ちゃんと考えてるから、大丈夫だってば」

突然、ケインの横で、カイルがゲラゲラ笑い出した。

「うるさいぞ、酔っぱらい！　まったく、人がマジメに話そうとしてるのってのに、こいつらは……」

「そうよ、みんな、不真面目よ！　ヴァルドリューズさんがいなくても、私たちだけでも、ちゃんと次のことは考えておきましょうよ！」

魔道士見習いとなっても、巫女時代から引き続きアルコール度数の低い酒しか飲むのは許されないクレアが、真面目な顔で呼びかけるが？

「きやははははははははははは……！」

ミュミュが笑いながら、その辺を飛び回っていた。妖精でも酔っ払うのだろうか？　と、ケインは目を丸くして見ていた。

「だいたいマリス、私たち、まだあなたから詳しく旅の目的を聞いてないのよ。それだけでも、今ここで、教えてくれない？」

「そうだよ、一体、お前とヴァルは、何を目指してるんだよ？」
クレアに続いて、ケインも、マリスに詰め寄った。

マリスは、杯から一口酒を飲むと、観念したように立ち上がり、壁際の棚の中から数枚の地図を取り出す。

それを、二人も覗き込む。

「この丸く囲ってある箇所が、魔物の出現したという噂のある場所。で、バツがしてあるのは、もう退治してきたところね」

クレアの出身地であり、一行の出会いの場であったモルデラの町には、バツ印がしてあった。

その他にも、数カ所同じ印がある。

他の地図にも、似たような書き込みがされていた。

「これ、みんな、あなたとヴァルドリューズさんが調べたの？ 図書館にだって、こんなに詳しい地図はなかったわ」

クレアが驚いて、地図からマリスへと視線を移動させた。

「ええ、そうよ。諸国を旅して回ってそんな人から得た情報をもとにね。あまり遠い国のことは、吟遊詩人に頼るしかなかったから、大袈裟だけのネタもあると思うけど……」

そこまで話すと、ふとマリスが回りを見回す。

なんだか静かになったと思うと、カイルが床に突っ伏して眠っていた。

ミュミュも、彼の髪の毛に包まって、気持ち良さそうに眠っている。

三人は、安心して、また地図に視線を戻した。

「……で、旅の目的は？」

ケインの質問に、マリスは肩を竦めてみせた。

「それが、あたしにも、よくわからないのよ」

「なんだと？ そんなことあるか」

「そうよ、マリス、茶化さないで、ちゃんと教えてよ！」

二人に両方から攻められ、さすがに逃げられそうもないと諦めたのか、マリスが渋々口を開く。

「あたしは、ほんとによくわかんないんだってば。ただ、ゴドーが……ゴドリオ・ゴールダヌスが……」

「ゴドリオ・ゴールドダヌス……ですって!? あの大魔道士ゴールドダヌスだって言うの!？」

クレアが、すぐさま打ち切っていた。

その名前を聞いた途端、以前のダミアスと同じように、クレアは非常に驚いていた。

『その大魔道士って、一体何者なんだ?』と、ケインが尋ねる必要もなく、クレアは無意識のうちに解説していた。

「魔道士の中の魔道士——魔道士教会の知識と力を大いに超え、半ば魔神と化してしまったと言われている、あの伝説の魔道士ゴドリオ・ゴールドダヌス——!」

そう言えば、大昔のベアトリクス王国の宮廷魔道士をしていたって、聞いたことがあるわ。でも、引退してからは、どこにいるのか誰も知らず、密かに、もう亡くなったのではないかと言われていたのだけれど……。マリス、そのゴールドダヌスのことなの!？」

クレアが、大きな瞳をさらに大きくして、マリスを見つめる。

マリスは、感心したように笑った。

「へー、あのじいちゃん、そんな伝説的な人だったんだー? すごいよねえ」

「なっ、なんてことを……! おお、お許し下さい! ゴールドダヌス様! 我らに災いをもたらすこと勿れ!」
なか

クレアが、跪いて天井に向かい、懇願した。

それを、マリスは、嫌そうな顔で見ている。

「そんなことしなくて大丈夫よ。あのじいちゃんは、そのくらいで怒るような小さい人間じゃないんだから」

呆れたようにそういうマリスのセリフに、クレアは、今にも『ひーっ!』と叫び出さんばかりに、目を見開き、両手を頬に当てた。

「なあ、クレア。そのお方は、そんなに恐ろしいお方なのか?」

ケインは、なるべくクレアを刺激しないように心がけるが、クレアは、キッとした視線を返す。

「当たり前です! モルデラの祭司長様は、村が災いに見舞われた

のは、ゴールドナス様のお怒りに触れたからだと判断し、神様と一緒にゴールドナス様のことも拝んでおられたのですから」

「けっ、バカバカしい！」

マリスが、クレアに聞こえないように、ぼそっと呟いてから、言い放った。

「あのじいちゃんは、ただの魔道士よ。神じゃないわ。拝むようなモンじゃないって」

「ま、またそんなことを……！」

怯えるクレアに構わず、マリスは真面目な表情で続けた。

「『獣神サンダガー』の召喚を思い付いたのは、あいつなのよ！すなわち、あたしの運命を変えた男でもあるわ！」

マリスの、静かだが強い口調が、静まり返った夜の闇の中へ、響いていった。

すべての生き物が活動を停止してしまっていたかのようだった。

闇は、すべてのものを飲み込んでいた。時でさえも――。

沈黙を打ち破ることは、ケインにもクレアにも出来なかった。その同じ空間にいる誰にも――ただひとりを除いては――。

『七つの星が揃う暁の時、千年の長きにわたり眠りから目覚し魔王が、この地に降り立つ。』

この世は再び闇に包まれ、やがて暗黒の時代が来よう。我らの魔王とともに我らの時代が訪れる。

ただひとつ、黒く輝く盾を備えた金色こんじきの龍が、我らの前に立ちはだかり、我らにとって必ずや凶星となるであろう』

「それは、大魔道士ゴールドナスが、闇に住まうものの間に伝わってきた予言を解釈し、わかりやすくしたものだっただけだ。」

まだ不明瞭なところはいくらかあるにせよ、魔道士協会を始め、他の大魔道士と呼ばれる者ですら、ここまで詳しく究明することは

出来なかったわ」

インカの香の漂う部屋の中で、マリスは、声を低くして語る。

「彼は、始め、『金色の龍』をゴールドドラゴンと、それを召喚し、操れる黒魔道士を『黒く輝く盾』としていたわ。でも、彼のあらゆる知識を用いて行われた占い、その他の研究、実験によって、さらに詰め寄っていった結果、ゴールド・メタル・ビーストの化身である獣神『サンダガー』と、もっとも闇に近い神、つまり、『黒い魔神』の異名を持つ『グルーヌ・ルー』を呼び出せる魔道士』のことだと解釈するようになったの。

なぜ、魔神『グルーヌ・ルー』そのものではないのかというと、魔神はもっとも闇に近い、即ち、魔王と共鳴してしまうかも知れなかったからだった。

大魔道士はヴァルに、魔神の召喚の時は気を付けるように言っていたわ。だから、彼が魔神を召喚した時は、ごく一部のみだから、見た目には変わってなかったでしょう？」

クレアとケインが頷くのを見計らってから、マリスは続けた。

「優秀な魔道士の守護神は、大抵、魔神であることが多いのに、『サンダガー』に限っては、稀らしいわ。

ゴールド・メタル・ビーストを守護神に持つ武将たちは、たくさんいるけど、『その化身』を守護神に持つ者は滅多にいないんですって。

あえて、その可能性があるのは戦士であって、どう考えても、魔道士連中の中にはいそうもない。

だけど、魔力の乏しい戦士たちが召喚することはまず不可能だし、万が一、召喚出来たとしても、制御するのが難しく、暴走を恐れるということもあって、魔道士協会では、召喚魔法の書から『獣神サンダガー』の文字を消し去ったの」

「そして、大魔道士ゴールドナス様は、『サンダガー』を守護神に持つマリスと、『グルーヌ・ルー』を召喚出来る魔道士ヴァルドリューズさんを引き合わせ、『獣神サンダガー』の召喚技を成功させ

たのね」

クレアの静かな声に、マリスは、ちよつと首を捻った。

「うーん、引き合わせたっていうか……まあ、結局は、そういうことになるのかも知れないけど。『サンダガー』の召喚は、方法を編み出したのは彼で、実行に移したのはヴァルだったわ。『サンダガー』が完成した時は立て込んでたから、喜ぶ暇もあんまりなかったんだけどね」

マリスはいつもの口調でそう言うのと、思い出したように、木の実酒の杯を口へ運んだ。

（かるく言ってるけど、『サンダガー』の訓練や初陣戦で、実際大変だったんじゃないだろうか？ あんなものを呼び出し、うまくコントロールするなんて？？あの凄まじい威力を考えると、練習する場もなかったはずだ。その度に山一つ削ることになるんだだろうか）

どうも、彼女は、どうでもいいところは本心をさらけ出しているようだが、核心部分に触れようとすると、こうしてなんでもないように、さらつと言いのけてしまう。それは、彼女なりのガードの仕方なのだろうと、ケインは思い、だんだんマリスのことがわかってきた気がしたのだった。

「さっきの予言の『七つの星が揃う』っていうのは、なんのことなのかしら？」

クレアが慎重な面持ちで尋ねる。

「その辺は、まだ説明されていないわ。でも、大魔道士はあたしに、一七歳になるまでに、『サンダガー』を完成させろって、言ってたわ。技の完成が年齢と関係があるのか、もしくは、……今から約一年後から先に……と睨んだのかも知れないわね」

マリスの瞳に、一瞬、真剣な色が浮かび、すぐにまた消えた。

「ちよつと待てよ……、それって、魔王がやってくるのが、早くて一年後ってことか！？ ま、まさか、お前達の最終目的って……魔王打倒なのか！？」

思わず乗り出しているケインの発言には、クレアも、はっと息を飲んだ。

二人に見つめられたマリスは、杯の中身を飲み干すと、重々しく口を開いた。

「……あたしは、そこまで知らされていない……。『サンダガー』の力が、いったいどこまで、魔王に対抗するに値するほどのかどうかかわからない。……ただ、闇の魔王の現れる場所を限定するのだと、大魔道士に言われたわ。魔王もやはり、他の魔物同様、次元の穴を伝わって降臨するのだという結論に達したのですね。」

……そして、これは、あたしのカンだけど、……以前に比べて次元の穴が増えたのは、グスタフみたいに呼び出した者がいるというのももちろんだけど、それだけではない気がするの。」

……あれは、魔物たちが、『魔王を迎え入れる準備に入った』のかも知れない……って……」

マリスは気遣うような視線をケインとクレアに注ぐが、その事態を恐れているというより、彼らが怯えるのを案じていた。

マリスの心配通り、クレアは両手を口に当て、目を見開き、恐怖で顔は青ざめていた。

ケインなどは、魔王といわれても、いまいちピンとこない顔をしていたが、巫女だった彼女は、神のありがたみと共に、魔王の恐ろしさを充分教えこまれてきたのだから、二人の反応が違うのは、当然かも知れなかった。

マリスは、そんな二人に、勝ち気な表情を作り、微笑さえも浮かべて見せた。

それは、何も見せかけだけではなかった。

「……そして、これも、あたしのカンだけど、万が一の対魔王戦に備えて、……『魔王打倒の切り札になるような何かを、ヴァルドリューズは感じ取っている』??そう思うの!」

それは、衝撃的な夜だった。

ケインは、酔っ払って起きないカイルを背負って、クレアを女官の部屋まで送り届けた後、警備兵の宿舎に戻り、カイルを寝かせた。そして、やっと自分のベッドに横になれたというのに、とても寝付けそうにない。

マリスの話の続きを、思い起こす。

「最初っからこんなこと言うと、みんなが怯えると思ったから。ごめんね、今まで黙ってて。でも、そんなあてにならない勝算しかない戦いに、わざわざ付き合うことなんてないわ。こればかりは、ヒトの力では何とも出来ないことだもの。それぞれ好きな町でお別れしてくれていいのよ。あたしは、始めから関係ないあなた達を巻き込むつもりなんてなかったんだから。」

……ただね、昨日もケインに言ったけど、……人恋しかったのよ。同じ世代の人に出会えたのは、旅をしてからは初めてだったものだから……」

そう珍しく、はにかんで話すマリスだったが、酒を一口飲むと、今度は、少し淋し気な口調になった。

「……旅をするまでは、いつもたくさんさんの友達に囲まれていたわ。でも、一番仲が良かった人に去られて、更に、得体の知れない超クールな魔道士さんと旅をしなくちゃなくなつて……特訓も厳しかったし、何度やってみてもうまくいかなかったから、ヤケになったこともあって……。」

淋しい時に出会った人は、すぐに去っていったし……というより、そういう男をひとあえて選んだのかも知れない。情報のために、武遊浮術の愛技を使ったり、イヤな女にもならなくちゃいけないって、思うようになって……」

ケインもクレアも、痛々しい思いで、マリスを見つめる。

「こんなことなら、昔、誰かに言われたように、あたしが男で、セル……」

マリスは慌てて言い直した。

「あたしは、男に生まれてれば良かったのかもね……」

「マリス……！」

クレアが、いきなりマリスを抱きしめた！ ケインも、もし、この場に誰もいなければ、そうしていただろう。

クレアの瞳からは、大粒の涙が零れ落ちていた。

「ずっと淋しかったのでしょーうね！ 可哀相に……！ あなたは、私たちよりも年下なのに、もう一年も旅をしていて……辛かったでしょう！？ それなのに、そんな素振りは一度だって見せずに……！」

「ク、クレア……？」

マリスは驚いていたが、クレアは余計に強くマリスを抱きしめた。「始めは、『なんてお行儀の悪い、乱暴者の、わけのわからない不良娘』だと思っていたけど、それは、あなたの繊細な部分を隠すための『巧妙な演技』だったのね！？ それなのに、私ったら、あなたのこと、『お行儀の悪い、乱暴者の、わけのわからない不良娘』だなんて思っていたなんて……ごめんなさい！ 本当に、ごめんなさい！」

マリスは苦笑しながら、クレアの背中を撫でた。

「ありがとう、クレア。ああ、行儀の悪い、乱暴者の不良娘ってのは、その通りだわ！ あたし、時々クレアに叱られるの、ちよつと新鮮だったのよ。最初は、『なんてウザい女なのかしら！？ 連れてこなきゃよかった』って、思ったくらいだったけど、……だんだん『母親に叱られてる』みたいな気になってきて……」

「まあ！ ……マリス！」

二人の少女は、片や涙ぐみ、片や涙にぬれ、堅く抱き合っていた。なぜか、どんどん感傷的な気分が遠のいていくケインであった。

フェルディナンドの紅通り

ケインとクレアが、マリスとヴァルドリューズの旅の目的を知ってから数日後、一行は、アストーレ国王アトレキアに呼ばれていた。謁見の間には、王と警備隊長、警備兵の数人と、フェルディナンド皇国に行っていた魔道士参謀のダミアスが現れた。

先頭にケインと白い騎士マリユス（マリス）が、そして、カイルとクレアが並ぶ。

ケイン、マリユス、カイルは肩膝を付き、クレアは両膝を付いて、頭を下げている。

「実は、ダミアスが、そなたたちに頼み事があるそうなのじゃ。私が聞いてもよくわからなかったので、直接話してもらおうと思ったのだ」

そう言って、王は、椅子の背にもたれかかった。ダミアスが進み出る。

「失礼ながら、あいさつは省かせて頂く。ご存知の通り、私はヴァルドリューズ殿と一緒に、フェルディナンド皇国へ訪問していたのだが、思ったよりも時間がかかりそうなので、誠に申し訳ないが、もう少し、彼を貸して頂けないだろうか？」

ダミアスの静かな、あまり抑揚のない声が響いた。

ケインは、隣のマリユスを、ちらつと見る。

『彼』も、ケインを見て、静かに頷いた。

「こちらは構いませんが、……どのくらい、かかりそうなのですか？」

「それは、解り兼ねる」

ケインの質問に、にべもなく返すダミアス。

「私とヴァルドリューズ殿は、フェルディナンド皇国に頼まれ、寄り集まってきた魔道士たちの縄張りなどを始め、いろいろな決まりごとを作ることになっていた。」

だが、思ったよりも、その魔道士たちの『個性が強く』、平等に行き渡らせるには、もう少し、考慮しなくてはならない。そして、そこで偶然見付けた『あるもの』を、あなたがたにもお知らせするよう、ヴァルドリューズ殿に頼まれ、私だけがこちらに一時的に戻ってきたのだ」

ダミアスは、一旦言葉を区切ってから、再び口を開いた。

「ヴァルドリューズ殿から、伝言を預かって参った。……『或る晴れた日に吟遊詩人が見える』……だそうだ……」

ケインたちは、顔を見合わせた。

ダミアスも、心なしか、自信がなさそうである。

ケインが、どうしたものかとマリユスに指示を仰ごうとした途端、「いけない！ ケイン、みんな！ 今すぐフェルディナンド皇国へ向かおう！ ヴァルドリューズが危ない！」

「ええっ！？」

一同が驚き、どよめいていると、マリユスは進み出てから、王に向かって跪いた。

「お願いです！ 私たち四人が行けば、なんとか彼を助けることが出来ましょう！ どのくらいの期間が必要か、今は見当も付きませんが、必ずこちらに戻って参ります！ 勝手を承知でお願い致しますが、すぐに私たちを、彼のもとへ行かせては頂けえないでしょうか？」

マリユスの口調から、事態が尋常でないことを知った国王は、直ちに許可を出す。

（……しかし、あのヴァルが危ないなんて……俺たちが行って、本当に助けられるんだろうか！？）

ケインは心配になりながらも、カイルと一緒に一度宿舎に戻り、支度をした。

マリユスを除いて全員が、もとの旅の服に着替え終わると、今度はダミアスの書斎に集合する。

「では、参りましょう」

ダミアスが、一行の周りに結界を張り始めた。

「悪いけど、ちょっと待ってくれ」

ケインの声で、ダミアスが、ふっと出来かけていた結界を解いた。

「ミュミュ、早くおいで！」

ケインが宙に向かって呼びかけると、しばらくして、「うわーん

！」と泣き声が遠くから聞こえ、だんだん近付いてきたと思うと、ケインの差し出したてのひらの上に、小さな妖精が現れたのだった！

「ひどいよー！ ミュミュを置いて行こうとしたなー！」

「だから、その前に、ちゃんと思いついただろ？」

ミュミュがケインのてのひらの上で、背中の羽をぱたつかせ、暴れている間に、マリスは真面目な表情で、ダミアスに目で合図した。途端に、薄い膜が再び現れ始め、すーっと全員を包んでいく。

「マリス、ヴァルのヤツ、どうかしたのか？ 本当に、俺たちが行って助かるのか？」

ケインが尋ねると、クレアも不安そうにマリスを見る。

マリスがダミアスに視線を移したので、ケインもクレアもダミアスを見つめると、なんと、彼は微笑んでいたのだった！

その時、ケインたちは一瞬ぐらっと揺れたような気がしたが、揺れたのは彼らではなく、周りの景色であることが、すぐにわかった！

辺りは、目まぐるしく流れていた。

「あまり『外』を見ていない方がいい。フェルディナンドまでは数分で着く」

彼らにそう告げると、ダミアスはマリスを振り返り、微笑んだのだった。

「聞きしに勝る策士ぶりですな」

「頭の回転は速いし、演技力だってあるんだって、ヴァルのヤツ、言ってなかった？」

マリスが、にっこり答えた。

「なに！？ ……ってことは、ヴァルが危険にさらされてるってのは……！」

マリスは、ケインを見た。

「『或る晴れた日に吟遊詩人が見える』っていうのは、あたしの決めた暗号で、『ある手掛かりを見つけた』ってことなの。ヴァルったら、ちゃんと言うこと聞くじゃないの。よしよし。さて、次は、どんな暗号を覚えさせようかしら。もっとヘンなこと言わせてやりたいわね」

マリスが満足そうに、うんうん頷いている。

「ヴァルはイヌかつ！？」

ケインは呆れ、クレアはマリスを睨むようにして見ていた。

「だって、王様にはああでも言わないと、私用なんだから、あたしたちみんなを行かせてはくれないかも知れないし、急いでくれないかも知れないじゃないの。ダミアスさんがポーカーフェイスでいてくれて、助かったわ！」

マリスが、ダミアスに片目を瞑ってみせた。ダミアスが会釈する。カイルが笑い声を立てた。

「俺はなんとなくわかってたぜ、マリスの作戦だってことはな。だって、あのヴァルが、簡単に危機に陥るわけないもん」

ケインもクレアも、カイルがのほほんとしていた理由が、今わかった。

「お前らも、いい加減、マリスのやり方に慣れろよ。そんなことじゃ、途中で置いていかれちゃうぞ。はっはっはっ」

——と、真っ先に置いていかれそうな人物に言われてしまったと、ケインもクレアも思ったのだった。

フェルディナンド王国？？

小高いいくつもの山が連なったうちのひとつから、一行は、その下にある町並みを見下ろしていた。

ごく普通の町のようなだが、広範囲に渡って同じような造りの家が多く、伝統的なものが感じられる。

その中で、赤い地帯があった。

それは、赤煉瓦で建てられた家がやたらと目立つ箇所であった。

家々の合間に見える道も、赤茶色をしている。

「あそこが、魔道士たちの住んでいる辺りだ。ヴァルドリューズ殿は、今あちらにおられる」

ダミアスが、淡々と告げた。

「この先は、魔道士たちの結界が張り巡らされている。飛んでいたり、空間を渡るとすぐに彼らの結界に触れてしまい、ヴァルドリューズ殿のところまで侵入するのは難しい。悪いが、歩いて行った方がいいだろう」

ダミアスに、マリスたちは頷いた。

一行は、山を下って行った。

フェルディナンドは、アストーレから北西に位置していて、馬車などで、貴族のように休み休みの旅ならば、二〇日はかかると言われていたが、ダミアスが『光速』の術で運んだため、数分で来られたのだった。

何かと歴史の古い国であり、アストーレよりも魔道が盛んで、いろいろな国から魔道士たちが移り住んでいる。

例の赤い地帯は、『紅通り？？くれないどおり？？』と呼ばれ、魔道士たちによる占いの店や、魔法道具マジックアイテムなどの店があった。

紅通りに向かう途中で、一行は食堂に寄った。山から歩いていて、とうに昼を回っていた。

「はー、さんざん歩いた後のメシは、特にうまいぜー！」

カイルが、骨付き肉にばくばく食らいつついている。もう片方の手にはパンを握っていて、そちらもかじることを忘れない。

「お前、ホントよく食うな」

ケインは呆れるのを通り越して、感心していた。

対照的に、クレアは巫女の名残か、肉はあまり食わず、刻み野菜

の入っている白いスープを、静かにスプーンで啜っていた。

ミュミュは、テーブルの上をちよろちよろ歩き回り、皆の皿から少しずつつまんでいて、楽しそうであった。

マリスはフェルディナンドの国の話をダミアスとしながら、時には皆の様子を見て、微笑みながら食べていた。

「なあ、ダミアス、ヴァルのところまでは、まだあるのか？」

食事を終えて再び町を歩いていた一行は、紅通りを目指していた。その辺りは出店が多く、ちょっとした食べ歩きができるようなところだった。

石造りの道がところどころすり減っているところを見ると、かなりの人通りがあったのだろう。彼らの他にも旅人や、商人たちが行き交い、活気づいていた。

きよろきよろしていたカイルが、再び、ダミアスに尋ねた。

「なあ、急がなくちゃダメなのか？　ちょっとくらい、遊んでつちやダメ？」

ミュミュも同じ気持ちであるのか、カイルの肩の上で嬉しそうに羽をばたばたと羽ばたかせた。

「日が暮れると厄介なのでな。すまないが、もう少し我慢してくれ」「ちえーっ。……あ、ちょっと待っててくれよ」

そう言い終わらないうちに、カイルは何かを見つけ、パーツと駆け出していった。

「ちょっと、カイル！　戻りなさいよ！」

クレアの声が届いているにもかかわらず、彼は少し離れた店の前で立ち止まり、肉と野菜を詰め込んだ饅頭を、いくつか抱えて戻ってきた。

「わりい、わりい！　こうずっと歩いているとき、なぐんか間がもたなくてさー。……おっ、これは、なかなかうまいじゃん！　みんなも食うか？」

「さっき食べたばかりだったのに、まだ食うか？」

ケインが仕方なさそうに見ていると、ミュミュが両手を伸ばす。

「わーい！　ちょーだい、ちょーだい！」

「……お前も、ちっちゃいくせに、よく食うなあ」

呆れているケインの肩から、カイルの前へとミュミュが飛んでいく。

「ミュミュには、ちよつとでかいからなー、ちぎってやるよ、……ほら」

「わーい、わーい！」

ミュミュは、飛びながら大きく口を開け、両手で持った饅頭のかげらにかぶりついた。

顔中、肉汁でべたべたにしていたが、彼女は一向にかまわないようだった。

「あっ！」

ミュミュの手から饅頭がすべり落ち、地面にぼたっと落ちた。

「落としたー！」

ミュミュがぎゃあぎゃあ喚く。

「えー？　なんだよ、しょうがねえなー。……ほら、もうひとかけやるよ」

カイルからまたかけらを受け取ると、喜んで飛びつく。まるで、人間のコードモのようであった。

カイルとミュミュの他は、無言でダミアスの後に続いていた。

「ミュミュ、口の周りがべたべたよ」

両手についた肉汁をぺろぺろなめながら飛んでいる彼女に、クレアが注意した。

言われて、ミュミュは、きよろきよろ何かを探し始めたが……

彼女は、カイルの後ろに回ると、彼のサラサラした金髪の裾で、顔を拭いたのだった。

（げっ！！　なんてことを……！　悪気はないんだろうが、間違いなく、恩を仇で返している！）

ケイン同様、クレアも、ぎょつとしてそれを見ていたが、二人は

何も言わなかった。

何も知らないカイルは、ひとり楽しそうに饅頭を食べながら歩いている。

ミュミュは、特に悪びれた様子もなく、彼の肩に止まっていた――。

「あそこが、『紅通り』の入口だ」

ダミアスが指差す前方には、大きな赤い支柱が離れて二本立ち、その手前から赤茶けた石でできた道が現れていた。辺りは、もうすぐ夕方になろうとしていた。

「わー、面白そう！ 一足お先に行ってるよー！」

「あ、ミュミュ！」

クレアが止めかけたが、ミュミュは、さっさと空間に消えてしまった。

「俺たちも、早く行こうぜー！」

カイルが喜んで駆け出していく。

「完璧、目的を忘れてるな、あいつら……」

ケインとクレアは、やれやれと、後を追った。

門をくぐると、大通りの両脇に、ずらっと露店が並んでいる。聞いていた通り、占いやマジックアイテムの店ばかりだ。

それにたかっている人々の中に、カイルの姿があった。

彼は、『まじない棒』という、ただの木で出来た短いスティックにしか見えないものを、買おうとしていた。

「ちょっと、カイル！ 何してるのよ！」

クレアに続いて、ケインたちも人混みをすり抜けて、彼のところへ辿り着く。

「いやあ、このおじさんの話だな、これを毎日立て掛けて拝んでいれば、いずれ魔力が宿り、魔法の杖になるっていう有り難い棒なんだってさ。ついでに、俺にも魔力が備わるらしい。そうなりゃ、俺だっているんな魔法が使えて??」

「そんなわけないでしょう!？」

クレアは、彼の言葉を打ち切った。

「そんなことで魔力がつくものなら、みんなやってます! 厳しい修行によってでしか、魔力を増やすことなんて出来はしないのよ!」

「まったくだぜ。だいたい、そんなウソくさい話に乗るなんて。しかも、杖を振り回して、お前は魔物と戦うのか? 魔法使いのじいさんじゃあるまいし、傭兵のお前がそんなことしてるのは、どう考えても、絶対おかしいって、思わないか?」

ほとほと呆れ果てて、ケインが腰に手を当てて言っている側では、
「そのあなた!」

クレアが、キツと露店の男を睨む。

「この道具は、あなたが作ったものなのですか? 見たところ、魔道士には見えないけれど」

『魔道一番!』と左右に書かれた赤い法被はっぴを着た、誰がどう見ても町民にしか見えない男は、もそもぞしだした。

「そ、それは……ある魔道士の方が作られたものでありまして……その方がお作りになるものを、私はただ売っているだけです」
クレアは、カイルから棒を奪って、じろじろ眺めた。

「その方って、ちゃんと正規の魔道士協会に籍を置いている方なんでしょうね? このお店の看板にも、このまじない棒にもどこにも、魔道士協会の印は見当たりませんけど……?」

「そ、それは……」

クレアに問いつめられて、法被はっぴの男は尻込みし出した。

「もし、魔道士協会に認可されていないものだしたら、知らなかったとしても、あなたのやっていることは犯罪です! 今すぐ悔い改め、自主なさい!」

クレアが、男に詰め寄り、人差し指を突きつけた。

「ひいーっ!」

彼女の迫力から逃げ切れなくなった男は、悲鳴を上げた。

「ちょっと、クレア、あたしたちは魔道士協会の回し者でも何でもないのよ。さ、そんなのほっというて行きましょう。……てことで、おじさん、これ返すわよ」

マリスがクレアからまじない棒をもぎ取り、法被男はっぴに放った。とんだ道草を食ったとばかりに、一行は、再び大通りを早足で歩く。

「そこのお嬢さん、占いはどうかね？」

「お兄さんたちも、安くしとくよ」

これ見よがしに、頭に大きな赤い三角帽を被った老人、黒いフードを被っただけの男など、見るからにニセモノのような易者たちが声をかける。

「もし、そこのお方、女難の相が出ておるぞ」

『人相学』と書かれた旗をはためかせている露店の老人が、ケインに呼びかけた。

余計なお世話だと、ケインは思った。

「へー、じゃあ、俺は？」　「カイルが面白そうに、老人に尋ねる。」

「オマエ、また！」

「だってさー、人相学ってことは、学問だろ？　魔道士協会とは関係ねーし」

「アホか！　そーじゃないだろー！？」

クレアが、ちらっと振り返ったが、呆れたのか放っておいた。

老人は、カイルの顔を、大きな拡大鏡で覗き込んだ。

「おぬしには、金欠の相が出ておる」

カイルは、目を見開いた。

「実は、そーなんだよ！　食う寝ることと女には困ってないんだけどさ、カネばっかりはなー。じいさん、よくわかってるじゃないか！」

彼は、ケインを振り返った。

「な？　ケイン、当たっただろ？　お前は女難の相なんだって？　大変だなー。あー、良かった、俺はただの金欠で」

「はあ……、それは、よかったな」

ケインは、どっと肩に疲れを感じた。

「お二人合わせて、二〇リブになります」

「えっ？ 二〇リブ？……二リブの間違いじゃないの？ しかも、俺なんか、頼みもしないのに、そっちが勝手に占っておきながら、金を取るのか？」

老人は、断固として譲る気はないようで、いくらケインが交渉してみても聞く耳を持たなかった。

「どうしたら女難が追い払えるとか、そういうアドバイスさえなしに、二〇リブは高過ぎるだろ？」

「アドバイスが欲しければ、四〇リブを先払いじゃ」

「なんだって！？」

カイルが、ケインの肩をぽんと叩く。

「とにかく、もう占ってもらっちゃった分は、仕方ないよな……。……てことで、ケイン、俺の分もよろしく頼むわ」

「なんだとー！ お前、陛下からもらった賞金はどうしたんだ？ もう使っちゃったのか？」

「そんなの宿舎に置いてきちゃったよ。ここまでダミアスが運んでくれるってことだったから、旅費もいらねーだろーし、なんかあってもみんながいるし、って思ったからさー、あんまり持って来なかったんだよ」

ケインは、あんぐり口を開けて、その場に立ち尽くしていた。

「……それなのに、饅頭買ったり、無駄遣いを……？」

「わりい、わりい、いやあ、まさしく金欠の相だなー。はっはっはっ」

「人相のせいにするな！ そんなこと認めたら、俺の女難の相つてもホントになっちゃうじゃないか！ ……まあ、一理あるかも知れないが……」

アドバイスは当然断ったが、結局、ケインは二〇リブを払わされたのだった。

しばらく行っても、まだ占い屋は続いていた。先頭を歩くマリスとダミアスが通り過ぎ、ケイン、カイル、クレアが通りかかったところで、声がかかる。

「よっ、その兄ちゃん、運勢占いはどうだねっ？ 一人分の料金で相性占いもできるよっ」

叩き売りのように、扇子でバシバシ台を叩いている、威勢のいい中年男がいた。

（これは、絶対ないだろー！？）

と、ケインが目を丸くしているにもかかわらず、カイルが目を輝かせた。

「へー、おっちゃん、じゃあ、俺とこの娘の相性って、どんなのかなー？」

といって、クレアの肩を引き寄せる。

「お前、まだやるか！」

「そうよ、放してよ、カイル。私、そんな占いなんて……！」

「まあまあ、いいじゃないか。こんなのただの遊びなんだからさ」

カイルは、ケインを無視してクレアに笑いかけるが、彼女にしてみれば、例えウソでも、彼と相性が良いなんて出ようものなら、そんな不名誉なことはないと、言いたげな顔であった。

さっそく男は、いかにもガラス玉のような大きな水晶球に向かって、なにやらぶつぶつ唱え始めた。

「ふむふむ……見えてきたぞ！ ……ああ、悪いが、君たちは、もうすぐ破局するらしい」

占いにしては、ひどいことを平然と告げるものである。

「えーっ！ そ、そんなー……！」

カイルだけが、悲鳴を上げ、がっくりしていた。

「あの……、もうすぐもなにも、私たち、最初から付き合ってたなどいませんけど」

クレアが、慔然と呟く。

「ちなみに、このねーちゃんと一番相性がいいのは……」

クレアのいうことなど聞いてもないのか、うなだれて背中を向けているカイルには構わず、中年男の人差し指は、ケインの前でピタッと止まった！

——かに思えたがまた動き出し、少し離れたところで、腕組みをして待っている、白い甲冑姿のマリスの前で、完全に止まった。

「あの兄ちゃんや！」

「ええーっ!？」

カイルが叫ぶが、ケインとクレアは、しーんと静まり返っていた。
「……さ、行くか……」

ケインは料金を払うと、カイルの首根っこを掴んで、歩き始める。
「なあ、さっきの聞いたか？ クレアとマリスが一番相性がいいなんて、ウソに決まってるよな？ な？ な？」

カイルは、情けない声を出した。いちいち答えるのもバカらしく思ったケインであったが、彼があんまり元気がないので、思わず口を開く。

「だから、アテになんないって、みんな言ってただろ？ あんなニセ易者の言うことなんか、いちいち耳を貸すなよ。金払うだけ損だぞ」

だが、実際に、代金を払ってきたのはケインなので、カイルはちっとも痛い思いなどしていないのだった。

（俺には、男難の相も出てるんじゃないのか??）

そのように思わずにはいられなかった。

「……そうかあ、クレアのヤツ、マリスと……」

カイルは、まだぶつぶつ言っていた。

「だ・か・ら、人の話を聞けって！」

紅通りの魔道士

「ここからは、今までと少し様子が違う。魔道士の結界が、特に嚴重なところだ。はぐれば、再び合流するのは難しい。心してついてくるのだ」

大通りの脇にあるいくつ目かの路地を曲がったところで、ダミアスが一行に言い聞かせた。

ダミアスのすぐ後ろにはクレアが、次にケイン、カイル、マリスと続く。

カイルがまたふらふらどこかに行ってしまったように、ケインとマリスとで挟んだのだった。

いくつか角を曲がり、煉瓦作りの建物の階段を上ったところで、ダミアスが足を止めた。

「おっ？　ここか？　ヴァルのいるところってのは」

それまでおとなしく付いて来たカイルが、嬉しそうに顔を上げた。

「……ダミアスさん……？」

クレアが、ダミアスの様子を伺う。

「……おかしい。……彼の結界が、解かれている……」

「えっ！？　どういうことだよ？」

カイルが皆を見回し、皆も、顔を見合わせる。

「とにかく、中へ……」

ダミアスが、少し錆び付いた扉の把手とってをゆっくりと引く……。

ギイイイイ……！

扉は、重々しい音を立てて開く。

部屋の中は、特に大きな家具らしいものはなく、薄汚れた赤い絨毯が敷き詰められた、何の変哲もない部屋だ。

「つい先程まで、おられたようなのだが……」

ダミアスが辺りをゆつくりと見回す。

「ここで待っていれば、お会い出来るのでは……？」

「……だいいが……」

クレアに應えるダミアスの、予想外な真剣な面持ちを見て、カイルがぶるつと身震いした。

「おいおい、まさか、ヴァルのヤツ、ほんとに危険にさらされてるんじゃない……」

「縁起でもないと言わないで！」

クレアが、キツと睨む。

「今日は、西地区の様子を見るとおっしゃっていたが……何か、気になることでもあったのだろうか……」

ダミアスが、考えながら言う。

「日が完全に暮れていない今のうちならば、まだ間に合う。万が一、彼に何か起きたのだとしても、助けることは出来るだろう」

クレアもカイルも、心配そうな顔になった。

「その西地区って、ここから結構あるの？」

それまで黙っていたマリスが、口を開く。

「歩いて十数分のところだ」

皆は、マリスを見つめ、言葉を待った。

「あいつに限っては大丈夫だと思うけど……。ここは、魔道士だからって安全とは限らないみたいね。ダミアスさんだけ行かせるのも、誰かをここに残すのも危険な気がするわ。だから、みんなで行きましょう」

一行はお互いの顔を見合い、頷いた。

西地区に着くが、あまり見映えは変わっておらず、相変わらず、赤煉瓦の建物が並んでいた。

「……む……！」

ダミアスが、ぴたりと足を止めた。

「どうしたんだ？ ヴァルか！？」

「いや……」

カイルの問いに、ダミアスは首を振る。

「何かの声が聞こえる……」

一行は、顔を見合わせた。

「この感覚は……どこかで……」

気配を探っているダミアスの横で、カイルが「けっ」と言った。

「おい、ヴァルが危ないかも知れないってのに、呑気に、昔の友達にでも会いに行こうってんじゃないだろーな？ 寄り道なんかしてる時間は、俺たちにはないんだぜ？」

「今まで散々道草食ってたヤツが、よく言うよ」例のごとく、ケインがカイルに呆れる。

クレアも耳を澄ませた。

「……これは、……ミミュだわ！」

一行は、ダミアスを先頭に、声のする方へ向かった。

「この中からだ」

そこから幾許もなく、赤煉瓦の小さな小屋の前に辿り着くが、扉は錆び付いていて開きそうもない。

「仕方がない。一刻も無駄には出来ない。危険だが、結界の中に入るぞ」

ケインたちは、ダミアスに身体を寄せた。途端に、空間を移動する際の、身体に絡み付く違和感が訪れ、次の瞬間、目の前の景色は一変した。

「な、なんだここは……！？」

その小屋の中とは見当も付かないくらい、『そこ』は異様だった。薄暗い空間の中を、あちこちに見えるいくつかの蝋燭ろうそくの灯りに、ぼうつと照らされた辺りが赤黒いことで、壁や床が赤い色をしていることがわかる。

だが、どこまでが壁で、どこからが床なのか、部屋は四角いのか丸いのか、おかしいことに、全然わからないのである。

一行は、ダミアスの作った結界の中にいることで、なんとか平衡感覚を保っていた。

「……うわーん！ ……！ ……！ うわーん！ ……！」

遠くなったり、近くなったりしているが、それは間違いなくミュミュの声だった。

「ミュミュ！ どこだ！」

ケインが呼びかけ、皆も見回す。

すると、少し離れた下の方に、小さめの丸いテーブルが浮かび上がった。

その上には、薄汚れた銀色の食器、燭台、白いナプキンやナイフとフォークまでが、ぽんぽんと現れた。

「今日は、いろんなもの、やってくる」

潰れた声が突然聞こえたかと思うと、緑色の人の形をしたものが、そこに出現した！

正確には、人といっても身の丈は子供くらいしかなく、横は子供にしてはがっしりとしていて、頭が不釣り合いに大きく丸い。

といって、小人とも違っていた。

まるで、もともとは人間だったのが、手や足が退化して短くなっってしまったのか、途中まで溶けてしまい、そこから指が生えてきたのか——というような、人の形をしてはいても、とても人間離れしているものだった！

全身が緑色で、髪の毛のようなものは生えておらず、ボロ布に穴を開けただけのものに袖を通して、突っ立っている。更に、両手両足の指が四本ずつしかなく、指先は、丸くなっていた。

大きな目は、どろーんとして生気がなく、鼻は潰れ、大きく裂けた割れ目のような口からは、平たく赤い生き物のような舌が、ベロベロと口の周りを舐め回していた！

「なんだ、ありゃあ！？ カエルじゃねーか！？」

正直なカイルは、『彼』が気を悪くし、下手したら怒り出し兼ねないことを、思わず口走っていた。

「わたし、ここに住む魔道士ドウグ。お前たち、わたしの食事、待つ」

『カエル』は、また潰れた声を発した。

「ああ？ 何言ってるんだ？ お前」

「シッ！ ヤツを刺激するな！」 ケインは、怪訝そうなカイルの首を抱え込む。

魔道士だというカエルのようなものは、浮かんでいるテーブルに着くと、白いナプキンを首に巻き、ナイフとフォークを手にした。

すると、銀の器の中に、何かがボーッと浮かぶ。

それと同時に、泣き声もはつきり聞こえて来たのだった。

「うぎゃーっ！ 何すんのよー！ バケモノー！」

器の上に暴れながら現れたのは、ミュミュであった。

「ミュミュ！」

「ミュミュ！」

口々に、ミュミュを呼ぶ。

「あつ、みんな、助けてー！ このカエル野郎、ミュミュのこと、食べようとすんのよー！ 早くやつつけてー！」

ミュミュは、草のツルのようなもので縛られていて、飛ぶことも出来なかった。本来であれば、妖精ならば難なくすり抜けられるはずが、いくらかがいても捕われたままとすることは、特殊な魔法のかけられたツルだというのがわかる。

「魔道士ドウグ殿、勝手にお邪魔しておいて申し訳ないが、その妖精は、私どもの仲間なのだ。どうか、我々に返してはもらえないだろうか」

ダミアスが、丁寧な口調で語りかけた。

「ここ縄張り。お前、わたしの食事、取る、だめ！」

魔道士は、言いながら、首を振る。

「誰がそんなもん食うかー！」

「そんなもんとは、なにさー！」

カイルの返答に、ミュミュが腹を立てる。

「私たちは妖精は食べない。そのニンフは、こちらでのしきたりがまだ充分わかっていなかったのだ。悪意があつてそちらの結界に現れたのではない。だから、見逃してくれないだろうか？」

ダミアスがもう一度交渉を試みる。

通じているのかいないのか、緑の魔道士は、ナイフとフォークを持つ手をピタッと止め、どうしたものかというように首をかしげて、器の中のミュミュを眺めた。

ミュミュの方も、うんうん頷きながら、虫も殺さぬ顔を作って、ドウグを見上げている。

『彼』は、思い直したようにナイフとフォークを器の横に置くと、空中から小瓶を取り出し、その中身をミュミュに向かって振りかけた。

「妖精食うの、五〇年ぶり。楽しみ」

「うぎゃーっ！ このバカー！ ヒトデナシーッ！」

どうやら振りかけたのはスパイスだったらしく、ミュミュは目からボロボロ涙を流し、くしゃみもしていたが、そうなりながらも魔道士に罵り言葉を浴びせることを忘れてはいなかった。そんなところは、なかなか根性があると言つてよかった。

「ダミアスさん、俺を結界から降ろしてくれ」

高い位置からその光景を見下ろしていたため、ケインはそのような言い方で、結界から出して欲しいことを頼む。

「あたしのことも、お願い」

マリスが、静かに言つた。

「なんで、マリスまで……？」

ケインが、眉をひそめると、

「決まってるじゃない。あいつをぶつた斬るためよ！」

例のごとく、そんな答えだった。

ケインとクレアが慌てる。

「何も、いきなり斬らなくなつて……！」

「そうよ、マリス！ それに、二人とも、今『ここ』から出るのは

危険よ！ あの魔道士の結界の中じゃ、こっちの分が悪いのは明らかだわ！」

「ダミアスさんは、魔道士の誓約があって、あいつと戦うわけにはいかないだろうし、……かと言って、魔道士でもない俺たちが結界から出るのは自殺行為に等しいのかも知れない。だけど、早く、なんとかしないと、ミュミュが……！」

そうケインが言っているうちにも……、

「きゃーっ！ さわらないでーっ！」

はっと皆見下ろすと、ドウグが器具を使うのをやめたのか、わしっと片手でミュミュを掴んだのだった！

その先にある『彼』の大きく開いた口が、彼女を待ち受ける！

「頼む！」

ケインの必死の頼みで、ダミアスが結界の外に押し出そうと両手を構えて、はっとした！

魔道士ドウグの後ろの空間に罅ひびが入ったように見えたかと思うと

どぐあっ！！

「げこーっ！！」

「きゃああああっ！！」

ドウグの後ろの空間が、まるで壁が爆発したように砕け散り、ドウグとミュミュは悲鳴を上げて、食器と共に舞い上がり、ドウグの身体だけが、勢いよく床に叩き付けられた。

「な、なんだ……！！？」

「いったい、なにが起こって……？」

皆は、目を凝らした。

石の壁を砕いたかのように砂塵がもくもくと巻き上げられ、そこへ現れたひとつの黒い人影が、一同の目に映った。

「けほっ、けほっ……」

黒い影の掌は、噎^むせている妖精を乗せ、縛っていたツルは、ひとりでに、プチッと切れた。

ミュミュが目を擦りながら、見上げる。

黒いマントに包まれた、長身の男の、浅黒く整った顔が、そこにあった。

「あ、あ……！　　ヴァルのお兄ちゃん！」

「ヴァル！」

ミュミュと、皆の叫びは、ほとんど同時だった。

魔道士ドウグとバヤジッド

浅黒い肌に、黒い艶やかな髪の間から覗く、真っ赤なルビー。
その下にある深く碧い切れ長の瞳は、何も語ってはいない。

突然、壁を打ち破るようにして現れた黒い影のようなその男は、
皆のよく知る人物だった。

「ヴァルのお兄ちゃん！」

彼の掌にいたミュミュは、泣きながら飛び、肩にしがみついた。
彼の手は、「もう大丈夫だ」とでもいうように、彼女にそっと触れたが、目は『床』に転がっている緑色の塊を見下ろしたままだ。

「お前、わたしの縄張り、荒らす、だめ！」

大きな緑色の頭を起こし、魔道士ドウグがヴァルドリューズに向かつて、潰れた声を発した。

「お前の結界は、せいぜいこの小屋の周りだけにしておくのだ」

ヴァルドリューズは眉ひとつ動かさず、言い放つ。

ケインは、ダミアスを振り返った。

「あなたとヴァルは、確か、ここに集まっている魔道士たちを取り締まるって、言っていましたよね？」

ダミアスも、静かな目を彼に向けた。

「いかにも。このドウグのように、自分の住処すみかの周辺に限らず、紅通り全体に結界を張り巡らせている者や、他の町などにまで手を伸ばしている者どももいる。ここに移り住んできた魔道士たちは、それぞれそれぞれの身を守るためというよりも、おのれの力を他の者に見せしめるために結界を張っているようなもので、まずは結界の解除を求めることになったのだ。それだけは、なんとか聞き入れてもらわねばならない」

「確かに、この紅通りを取り仕切るには、腕のいい魔道士の力が必要みたいね」

マリスも頷いた。

「だけど、魔道士の誓約つてのがあったら、奴等を取り締まるって言っても限度があるんじゃないか？」

珍しく、カイルがまともなことを言ったように、ケインとクレアは思った。

「そこが、難しいところなのだ」

ダミアスが肩を竦めた。

ドウグの部屋の中は相変わらず不安定で、とても一行が出て行ける状態ではなさそうだった。

それでも、ヴァルドリューズは平然としており、ミュミュは、はぐれないように彼の肩にとまり、首につかまっていた。

「わたし、縄張り、広げる。ドウグ、ここで、一番の魔道士」

緑の魔道士は、うっそりと立ち上がった。

彼は、たたた……と走って、ヴァルドリューズに掴みかかろうとするが――

「げこーっ！」

どさん！

ヴァルドリューズに触れる前に、弾き返されたように吹っ飛んだ。対するヴァルドリューズは、身動きひとつしていない。

「愚かな。お前では、私に触れることすら出来ん」

彼の抑揚のない声が、そう告げた。

「いいぞー！ やっちゃえ、やっちゃえー！」

形勢逆転とばかりに、ミュミュは拳を振り回して喜んでいた。

ドウグは、腰の辺りと思われる箇所をさすりながら起き上がると、なにやら奇妙な音を発し始めた。

それは、何かの呪文のようで、そのまま両方の手を上に伸ばすと、徐々にもくもくと煙のようなものが沸き起こり、だんだんと、あるものを形作っていったのだった。

「我が蝦蟇蛙神『ガマンダマ』よ！^{がまがえる} 我に力を貸し与え給え！^{たま}」

彼の拝んでいる神の名前らしかった。

ドウグの口からというよりも、念波としてそう言っているのが、一行にも伝わった。

「『ガマンダマ』ですって!？」

クレアが悲鳴に近い声を上げた。

「あんなものを拝んでいる人間が、まだ存在しているなんて……! 汚らわしい!」

クレアは、胸元で神の印を切った。

彼女によると、ガマンダマというのは、大きな蟾蜍ヒキガエルのような格好をした獣と蛙の間に生まれた邪神で、口から吐く白い毒液で人々を苦しめていたのだという。

恐怖に耐えられなくなった人々の中には、逆にそれをあがめて難を逃れようとする者たちが増えていき、ある村では、彼らと邪神ガマンダマによる大虐殺が行われたりもした。

だが、その邪神を拝んでいた者たちは、次第に手足が退化したように短くなっていき、全身に大きなイボができるなどの、皮膚にも異常が現れ、みるみるうちに人間離れしていったのだという。

「魔道士の塔が設立されてからは、『ガマンダマ』は邪神とされ、あがめるのは禁じられたわ。それが、なぜ……」

「彼は、七〇〇年以上生きている。魔道士の塔と魔道士協会が出来る以前から、『ガマンダマ』を密かに崇めていたのだ」

クレアが、ダミアスを振り返り、声も出せないくらいに驚いて見つめた。

「げーっ! あいつ、そんなに長生きしてたのかよ!? 魔道士って、人間の寿命を越えることが出来るのかー。すげえなー」

カイルが妙なことに感心した。

「こちらの宮廷魔道士の方は? 先に法律を作って、彼らを取り締まるということは、考えられなかったのですか? それに、魔道士の塔にだって協力を求めるとか」

クレアの質問にダミアスが答えるより早く、マリスが口を開いた。

「ここに移ってきた魔道士たちは、上品な宮廷魔道士さんでは手が付けられなかったんでしょね。あたしたちはあいつ（ドウグ）しか見ていないけど、あんなようなヤツが他にもいるっていうのなら、なおさらだわ。魔道士の塔にしても、宮廷に害を成すでもないことでは動いてくれないでしょうし……」

「だったらさー、せめて、こっちの宮廷魔道士が直接案内してくれりゃあいいじゃねーか。何も、わざわざアストーレの宮廷魔道士であるダミアスを、こっちに引き止めなくたってさ。ダミアスの方が腕がいいにしても、てめえの国の始末くらい、てめえでつけらんなくて、どーすんだよ、なあ？」

カイルがケインに同意を求める。

彼がそれを言うことには少々引かかったケインであったが、同感ではあった。

「この宮廷魔道士にヴァルを紹介すれば、もうダミアスさんの用は済んだようなもののに、なぜ、彼らはヴァルと一緒に紅通りを取り締まらないのかな？」

「それは、今にわかる」

そうケインとカイルに言ったダミアスの横顔は、意外なことに、またしても微笑んでいたのだった。

一方、ドウグの両手の上には、大きなイボだらけの茶色い塊が、既にはっきりと浮かび上がっていた。

「なんだ！？ あのでかいのは！？」

カイルが身を乗り出す。

塊は、だんだんと形を成していく。四つん這いの、ヒトとも獣とも違うものだった。

皮膚はてかてかと、脂でも塗っているかのようで、折れ曲がった四肢には動物の毛のような短い毛が生えている。

ドウグと同じように、指が四本しかなく、先が丸い。

まさに、ヒキガエルが、もっと巨大に、おぞましい存在となったような――そんなものだった！

それは、さらに膨張していった。外から見たこの小屋からは、はみ出してしまうほどにまで膨らんでいるように見えるのだが、この室内の広さも何もかもが、一行には見当もつかない空間であったので、『それ』が『そこ』にあっても、不思議ではなかったのだった！ただ、ダミアスが、更に上空に移動したので、一行が上から見下ろしている状態には変わりなかった。

「あ、あれは……『ガマンダム』自身……！？　なんてことを！」

『ガマンダム』を召喚していたというの！？」

クレアが、今にも悲鳴を上げそうになりながら、両手を顔に当ててた。

（自分の技——といっても、体当たりには見えなかったけど、それが通用しなかったからって、いきなり切り札を出してくるとは……！　——てことは、あいつ自身は全然たいしたことないんじゃない……？）

そうも思えたケインであった。

「きゃーっ！　バケモノー！」

ミュミュの叫び声をする。間近で見るとっては、一層気持ちが悪いことだろうと、皆は、ミュミュに同情した。

赤黒い空間の中に浮かんでいる、薄汚れた茶色いものは、ゆっくりと大きく口を開いた。

どばっ！！

濁った白い液体が、ヴァルドリューズに向かって吐きかけられた！

と同時に、ヴァルドリューズの身体は消えていた。

ドウグは、ヒキガエルを持ち上げたまま、敏捷な動きで飛び退った。

が……？！

「げぶあっ!!」

彼の後方に、突然ヴァルドリューズが現れ、ドウグに向けた人差し指が空を切ると、途端にドウグの、緑色の身体は、頭を残してバラバラに飛び散ったのだった!

「ひえーっ! いきなりそこまでやるかー!?!」

カイルが思わず叫ぶ。

「マリスも結構ムチャクチャだけど、ヴァルも似たようなモンだな」
ケインも、思わず口をついて出る。

「殺してはいない。ドウグはまだ生きている」

ダミアスが静かに言った。

「あれで死んでいないって……? 魔道士つつうより、バケモンじゃないか!?!」

カイルが目を白黒させた。

ドウグの頭が床に落ちると、彼から飛び降りた『ガマンダマ』は、今度は口の中から赤くしなやかな鞭のような舌をくねらせ、ヴァルドリューズに向かって行く。

その鞭は、ヴァルドリューズの間近で突然硬質化し、剣のような鋭さで、彼の胸に突き刺さった。

「ああっ! ヴァルー!」

結界から、思わずカイルが叫び、クレアも顔を伏せ、両手で覆っている。

「大丈夫。ちゃんと躲かわしてるわ」

マリスは、視線を反らしていない。

突き刺さっているように見えた舌の鞭は、ヴァルドリューズの身体を覆い尽くしている黒いマントに、めり込んでいる様子はなく、彼は出血もしていない。

「あいつの『舌』は、ヴァルに触れてもいない。ヴァルは、自分の周りの空間を『曲げている』わ。だから、あいつの舌は、ヴァルに

届くことなく、空を切っているのよ！」

「ヴァルドリューズさんが、結界を！？ そんな……全然わからなかったわ……！」

クレアが、信じられない様子で、下で起きている光景に目を見張る。

「たいてい、結界というと、本人の周りを球か半月形に覆い尽くしているものや、網の目のように張り巡らせているものなどは見かけるが、私もあのように『器用に張った結界』というものは初めてだった。彼は今、自分のすぐ外側にのみ結界を張っているのだ。彼と組んで仕事をしていると、実に珍しいものばかり見せられ、常に驚かされる」

ダミアスが、いくらか微笑んだ。

「そんなことが……！」

クレアは、師匠であるヴァルドリューズに、尊敬の眼差しを送っていた。

ヒキガエルは、相変わらず、硬質化した舌をあちこちからヴァルドリューズに突き刺すのを試みているが、無駄だということがわからないのは、やはりカエル並みの知能しか持ち合わせていないからなのだろうか。

ヴァルドリューズは無言であった。

肩に止まっていたミュミュは、彼の首の後ろにまわり、そこから少し顔を覗かせて、戦況を見守っていた。

ヴァルドリューズが片方の手を胸の辺りまで引き上げた。

彼の掌からは、ぼわーっと何かが光り出している。

それは、だんだん大きくなっていくとともに、銀色に輝き出した！それを、ケインは、マリスとヴァルドリューズの宿敵、ヤミ魔道士グスタフを倒そうとしていた際に、ヴァルドリューズが放とうとした銀色の光の球と同じであると思い出した。

ヴァルドリューズは、『それ』を、飛びかかってきた『ガマンダマ』に向けて放った。

ボールをただ軽く放ったように見えただけだったが、それは一瞬のうちに標的目がけて向かっていったのだった！

げぐあごぼっ！！

邪神は銀の球に飲み込まれ、奇妙な叫び声ともつかぬものを上げて、しゅーしゅーと煙に巻かれていき、姿を消し去った。

ヴァルドリユーズは転がっている緑の丸いものを片手で拾い上げ、もう片方の手を、室内に翳した。

突然、目の前の様子が変わる！

今まで、皆が感じていた不安定さはなくなり、石造りの部屋には、農作物の入った袋が積み上げられている。

ヴァルドリユーズが魔道士ドウグの結界を取り除いたのだった。

ヴウン……

ダミアスの結界も解かれ、一行は、やっと床に降り立つことが出来た。

「ヴァル！」

一行は、ヴァルドリユーズのそばに駆け寄った。

といっても、狭い小屋の中なので、二、三步近付いただけだったのだが。

それにしても、久しぶりに会ったというのに、彼はにこりともせず、あいさつすらなかった。

何事もなかったかのように、静かな碧い瞳で、ただ彼らを見下ろしているだけで、そこには、感動的なご対面などというものは、ありはしなかった。

「そ、そいつ、もう何もしないか？」

緑色のドウグの頭を不気味そうに見ながら、カイルがおそろおそろヴァルドリユーズに尋ねる。

「ああ。再生するまでは」

「さ、再生すんのかよ！？」 やっぱ、バケモンだな……」

カイル、ケイン、ミュミュでドウグを取り囲み、不気味そうに眺める。

「久しぶり」

マリスがヴァルドリューズの前に、進み出る。

「苦勞してるみたいね。ちよつとやつれたんじゃない？」

と、マリスはウィンクして微笑むが、皆からすると、彼は、以前とどこも変わらないように見えた。

魔道士にしてはまだ若く、年齢相応に見える彼は、もとより、元気を絵に描いたような健康優良児というわけではなく、やつれたとは言っても、こんなものではなかっただろうか？ と、思ったものだったが。

「無理もない。この一週間もの間、彼は、このように、ひとつずつ結界を解いてまわっていたのだから」

答えたのは、ダミアスだった。

「でも、いい機会だったじゃない？ 思いっきり魔法使えて。たまには、あんたも発散する場所が欲しいでしょうしね？」

マリスがからかうような目で、ヴァルドリューズを肘でつつくが、彼は、ちらつと彼女を見ただけで、何も言わなかった。

「ま、そのために、ダミアスさんがいるんだろうけど」

ケインとカイル、クレアは、マリスのそのセリフで、ダミアスを振り返り、ヴァルドリューズと見比べた。

「この紅通りを訪れた時、あなたたちは、これは一筋縄ではいかなことがわかった。短期間でなんとかするには、少々荒っぽい方法に出るしかなかった。それは、魔道士の塔の会員であるダミアスさんを含め、こちらの宮庭魔道士さん方には、どうしようもなかったけど、ヴァルだから出来たわけ。」

ヴァルは、魔道士の塔から外れてるから、魔道士の誓約なんて関係ないわ。だけど、そのやり方が、この国の宮廷魔道士の耳に入ったら、魔道士の塔に報告され、最悪ヴァルはお尋ね者のヤミ魔道士になってしまう。

そこで、親切なダミアスさんが、『カーテン』の役割をしてくれてるってわけね？」

ダミアスは、そう言ったマリスに微笑してみせた。

「なんだよ、お前、俺の魔法剣取り返してくれて言った時は、『魔道士の誓約があるからだめだ』って言っておきながら、実は関係なかったんじゃないか。ひでーなー」

カイルが、ヴァルドリューズに向かって文句を言うが、彼は何の反応もなかった。

ミュミュが、ちらちら飛んで、ヴァルドリューズに甘えるように、擦り寄っている。カイルと同調していたかに見えたが、てのひらを返したように、ヴァルドリューズに懐いていた。初対面の時から、彼女の中では、順位が決まっていたようだ。

「そういえば、ヴァル、『あるもの』ってなんだ？ 『吟遊詩人がなんとか』って、あの暗号の」

そもそも、それで彼に呼ばれて、ここまで来たのだということを、ケインは思い出した。

ヴァルドリューズは、ケインに、いつもの静かな瞳を向けた。

そして、やはり、いつものように、感情のない声で言った。

「悪いが、それは、もう一仕事終えた後だ」

二つの物体が、うろうろしていた。ひとつは小人くらいの大きさの、黒いフードを被ったもの。もうひとつは、ボロを着た先ほどの緑人間だった。

紅通りのヴァルドリューズの部屋に、一行は、来ていた。

ソファや椅子が用意されていて、一度来た時よりも、ヒトが住んでいるような部屋になっていた。

「これはこれは、お美しいお嬢さん方に、頼もしい剣士の方々。さあさ、皆さん、お疲れになったでしょう？ どうぞ、お寛くわぎください」

ヒトのものではないような、違う高さの声がいくつか一斉に喋っ

ているような奇妙な声で、それは喋っていた。

その黒いフードの中は、茶色いしわしわした枯れ木に、赤く光る小さな目のようなものが二つあるだけ。まるで、木で出来たヒトだった！

ダミアスによると、三、四日前に出会った魔道士で、ヴァルドリューズの力に感服し、こうして身の回りの世話を焼きたがるのだという。

もうひとりの魔道士ドウグは、手も足もすっかり再生していて、これまたうちよろと忙しく歩き回っている。

その、木の魔道士の、木で出来た手が差し出す紅茶の入った器を、一行は、おそろおそろ受け取った。

五本に枝分かれた根っこのような、曲がった指をしている。

「ヴァルドリューズ様、手が空きましたら、どうぞお飲み下さいませ」

ヴァルドリューズは相変わらず口数が少ない。そう言われても、何も返さず、机で書き物をしていた。

あの後、もう一件、別の魔道士の結界を整理してから、ここに戻って来たのだが、それでも、まだなお彼の仕事は終わらないのだった。

木の魔道士は、紅茶をヴァルドリューズの机の隅に置くと、今度は、いそいそと茶菓子を運んできた。

「わたくしは、バヤジッドと申します。もうずっとこの紅通りに住んでいるのですが、最近ひどいもんです。あちこちから魔道士どもが移り住んできて、秩序も何もあったもんじゃありませんで、まったくわけがわかりません」

実際に住んでいる住民がそう言うのなら、よそ者のケインたちになど、一向にわけがわかるはずもなかった。

バヤジッドと名乗る魔道士は、両手を器に添え、「はあ」と溜め息混じりに、茶を啜った。

「ちゃんと皇帝陛下の許可を頂いて住んでおるものもいれば、無許

可のものもいるのです。やつらは、宮廷魔道士のよこした見張りが来ると、結界によって察知し、すぐさま空間に逃げ込んでしまうのです。とくに、夕方から明け方などは、やつらの動きが最も盛んになり、迂闊にでも彼らの結界に触れようもんなら大変です！

変な空間に紛れ込んでしまったり、攻撃をしかけられたり……魔力の特に高い者たちの結界の中でなら、他の魔道士たちに気付かれることなく攻撃出来ますからね。

もう、無法地帯のようなものです。ですから、ここの住民たちは、夜の間は、表をうろつかないようにしてるんです。そうこうしているうちに、宮廷魔道士たちの手に負えないほどの事態に悪化してしまったのですよ」

バヤジッドの話は続く。

「それだけなら、まだいいんですが、やつら、私などのように、もともとこの紅通りで、ささやかに暮らしていた無害な魔道士に対して、力自慢をしてきたり、嫌がらせなどをするように、なってきたのです。

勿論、魔道士の誓約に触れないギリギリの部分で。隣の町の人々に、ちよっかいを出す奴なんかも出てきまして、宮廷の方も苦情が絶えず、大変お困りのようでした。

そして、ご親戚であるアストーレ王国の、有能な宮廷魔道士であるダミアス様に、ご相談されたのです。

……あ、すみません、私ばかり喋っちゃって。

ああ、こちらのケーキも美味しいですよ。さっき、隣町で一番のお菓子屋で購入してきました。遠慮なく食べてください。ヴァルドリューズ様もいかがですか？ よろしければ、お持ち致しますが」

ヴァルドリューズは見向きもせず、書き物を続けている。

「すみませんね、皆さん。せっかくいらしてくださいのに、ヴァルドリューズ様は、今、宮廷に提出なさる報告書をまとめておられるのです。もう少し、お待ち下さいね」

『彼（おそらく、男だろうと、皆思った）』は、まるでヴァルド

リ्यूズの執事のようなだった。

「この紅茶、美味しいわ」

クレアが、マリスに囁いた。

得体が知れなかったので、ケインもカイルも口をつけないでいたのだが、クレアの一言で二人とも飲んでみると、意外にも上品な香りがし、美味しかったのだった。

乾燥させて、細かく砕いたスロウの実を、香草と一緒に抽出した紅茶であった。

「スロウ・ティーなんて、初めてだわ。スロウの実って、紅茶と相性が良かったのね」

マリスは、怖じ気付くことなく、感心して、木の魔道士に微笑みかけた。

「これは、私の自作なんですよ。私、料理にも興味があるもので。ただ、スロウと香草を合わせただけじゃ、ちよつと物足りなかったんで、ミシアの果皮をちよつと加えてみたんです。スロウの実の甘酸っぱい味と香りを、損なうことなく出来た紅茶だと思うんですが、お気に召されましたか？　よかったら、お替わりの方はいかがですか？」

声の調子からすると、彼は喜んでいようだった。

マリスとクレアは紅茶をお替わりする。

ケインとカイルとダミアスは紅茶を啜り、ミュミュがテーブルの真ん中で、ケーキを抱え込んでクリームまみれになりながら、食べていた。

「これ、ドウグ、作った。食べる、よろし」

なんだか異様な匂いがすると皆が思っていると、いつの間にか、緑の魔道士ドウグが、銀色の器をヴァルドリ्यूズに差し出していた。

彼も、ヴァルドリ्यूズの機嫌を取っているつもりなのだろう。食べ物匂いとはかけ離れた、何とも言えないその匂いは、ドウグの差し出す皿に乗ったものから発せられているようだった！

「あ、これ！ ヴァルドリューズ様は、今は、お仕事中だというのに！ だいたい、この家の台所は、私が預かっているのですよ！

お前は、さっさと自分の家に戻んなさい！」

「ドウグ、料理、上手」

「だから、私が……！ だいたい、なんです！？ それは？ 本当に食べられるものなんですか？」

「これ、ドウグの得意料理。とても、うまい！」

「……あっ！ 大ネズミのしっぽなんか入ってるじゃありませんか！？ そんなもの、ヒトは食べませんよ！」

「これ、うまい！ これ、うまい！」

「だめですってば！」

二人（？）の子供のような小柄な魔道士は、ヴァルドリューズの脇で、皿を引っ張り合いながら、揉めていた。

一瞬、ヴァルドリューズが、それにはうんざりしたような目を向けたようだったが、一行が察するに、おそらく、それは、本当にうんざりしているのだろう、と。

紅通りの魔道対決1

「待たせたな」

ヴァルドリユーズが、やっと本題に入ろうとしたのは、それから小一時間経った頃だった。

二人の魔道士は、もうそこにはいなかった。ヴァルドリユーズに言われて、席を外したのだ。

「何かあったら、いつでも言いつけて下さいませ」

木の魔道士バヤジッドは、消える前にそう言った。

「随分いい暮らししてるみたいじゃないの。魔道士の執事兼シェフ付きとはね」

マリスがからかうが、ヴァルドリユーズは、彼にしては多少うんざりしたような顔を向けただけだった。

「俺たち、今夜はここに泊まっていいいのか？」

カイルが、すつとぼけたことを聞く。

ヴァルドリユーズは、無言で頷いた。

「はー、良かった！ さっきの話じゃ、とてもとても、この時間、外を出歩くんなんてムチャみたいだもんな。どうやら、この紅通りでは、常にヴァルか

ダミアスと一緒に

いた方がいいらしいや」

カイルが「あゝあ」と、伸びをした。

「ちよつと黙って。ヴァルドリユーズさんが話せないじゃないの」クレアがカイルを叱りつける。

「そろそろ、聞かせてくれる？ 『吟遊詩人』は何なのか？」マリスも真面目な表情になっていた。

ヴァルドリューズは、マントの中から何かを取り出して見せた。
一冊の分厚い書物であった。

「チャールⅡダパゴの魔道書を見つけた」

彼は素っ気なく言うが、マリスとクレアは驚いていた。

「チャールⅡダパゴっていったら、あなたのラータン・マオの隣じゃない!？」

あそこも魔道が栄えてたわよね」

マリスに頷いてから、ヴァルドリューズは、クレアに魔道書を差し出した。

クレアが顔を上げ、彼の意図がわからず、問うような目を彼に向けていた。

「好きに使っていい」

「ええっ!？ 私に!？ ……そんな、もったいないです! ヴァ

ルドリューズさん

が持つてらした方が……」

あまりの恐れ多さに、クレアが両手を組み合わせている。

「いや、私には必要ない」

クレアは、それでも困ったようにヴァルを見つめていた。

「クレア殿、それを手に入れるには、彼は意外と骨を折ったのだ。

魔道士の塔が設立

されてから、この本の写本はすべて世に出回ることを禁止され、原本は著者の魔道士

たちが焼いてしまい、もうどこにも存在していないと思われたものを、持っていた魔

道士が偶然この紅通りにいたのだから。

何しろ、チャールⅡダパゴ王国の誇る魔道の数々が記された、貴重なものなのだか

ら、快く——とまではいかなかったが、その魔道士の方から譲ってもらったのだ。

頂いておいた方が、よいと思うが」

横から、ダミアスが穏やかな声を挟んでいた。

ケインは、ちらっとダミアスを見て、目が合うと、彼は、また微笑した。

（きつと、ヴァルは、そいつから『少々手荒なマネ』をして、取り上げたに違いない。

なんてヤツだ！ 職権乱用じゃないか？）

そう思い付いて、おかしく思っている横で、クレアはみるみる瞳を輝かせていた。

彼女は、そんなことは思いも寄らないようであった。

「私のために、そんなご苦労を……！」

クレアは、本を恐れ多そうに両手でそうっと受け取り、魔道に縁のないものにはわかりもしないその本の重みを、噛み締めているように、しばらくじっとしていた。

再び、彼女が顔を上げた時は、その瞳は濡れているようだった。

「一日でも速く覚えられるように、頑張ります……！」

彼女は、魔道書を固く胸に抱いた。

ヴァルドリューズはそれを見て、珍しいことに、少しだけ微笑んだ。

「……で？ 他にも何かあるんでしょう？ それだけだったら、ダミ

アスさんに言付け

て、クレアに渡してもらえば良かったんだから。他に、あなたが見たものは、何？」

マリスの声が、話をもとに引き戻す。

ヴァルドリューズの冷静な碧い瞳が、静かに彼らを見渡した。

「実は、手伝ってもらいたい」

「手伝ってもらいたい？ あなたの仕事を？」

マリスが、拍子抜けした声で繰り返した。

ヴァルドリューズは、それに頷いてみせる。

「この通りには、割と腕の立つ魔道士たちもいるが、化け物もいる。

訓練には丁度

良いだろう」

彼は、おそろしく淡々と言ったのけた。

「……あつ、そう！ あんたが珍しくあたしの作った暗号を使ってくれたのは、そう

いうことだったの？ うまいこと言って、あたしたちを乗せて、自分がラクしたかつ

たのね？ このあたしを担^{かつ}ごうなんて、いい度胸してるじゃないの！」

マリスが腕を組み、上目遣いで彼の前に立ち塞がった。

「明日の朝は早い。もう休んだ方がいいだろう」

それだけ言うと、彼は背を向け、さっさと部屋の隅に行き、座って目を閉じた。

「ちよつと……！」

なおも言い募ろうとする彼女の肩に、やさしく置いたダミアスの手が、彼女の機嫌を、それ以上損ねることを食い止めた。

「彼に任せっぱなしにしている私が、このようなことをいうのも何ですが、あなたた

ちなら魔道士の間の方は関係ありませんし、手分けした方が早く済むことは間違いな

いと、私もにらんでおります。

この国で、あまり時間を費やすわけにはいけないのでしょうか？

あなた方には、もっと巨大な敵が、待っているのかも知れないのですから」

マリスの目付きが、戦士の時のように鋭く、ダミアスに向けられた。

部屋の隅では、いつの間にか、魔道士バヤジッドの小柄な黒いフードの後ろ姿が、

ヴァルドリューズに、「よく寝られるようにシヨコラはいかが？」

と聞いていた。

断られると、彼は空間へと姿を消した。

「そうよ！ これは修行だと思って、みんなでヴァルドリューズさんを手伝いましよ

う！」

クレアが瞳を輝かせている。魔道書は、しっかりと胸に抱えたまままだ。

「ええー？ めんどくさー」

「面倒臭いなんていうのなら、あなたとは、もう口も利きません！ そんな人情の

ない人なんて、もう顔も見たくないわ！」

かったるそうにしているカイルに向かって、彼女は人差し指を突きつけた。

「おいおい、何も、そこまで言わなくても……」

ケインが思わず宥めるほどであったが、そこまで言われたにもかかわらず、カイルは、まだきよんとしていた。

「そうは言うけどさー、魔道士たちの結界の中を、俺たち生身の間なんか飛び込

んで行ったら、どうなるかわかったもんじゃないぜ？ そいつら斬

りつける前に、

こっちが危なくなっちゃうぜ」

「それもそうだ」

「まあ！ ケインまでそんなこと言うなんて……！ 信じられない

！ みんな、正義

の心はどこへ行ったの！？」

「正義？ 確かに、巨大な敵を打倒するための訓練と思えば、正義のうちではあるの

かも知れないけど、これは、『正義』というより、『仕事』だろ？俺が言いたいのは、魔道士と対決するには、ちゃんと手順を考え

ておかないと——
ってこと。

カイルの魔法剣の技は『浄化』だから、魔物には有効でも、人間である魔道士には効果はないんだし、俺の剣だって?？」

ケインは、うつむいてから続けた。

「悪いけど、今のマスター・ソードでは、ミドル・モンスター程度には効果はあっても、それ以上の力を持った魔物や魔道士が相手だったりすると、……難しいんだ。」

しかも、連続して魔法効果を使うには、限界がある」

(今のマスター・ソードだと——って?)

マリスは、目だけをケインに注いでいた。

「だから、俺とカイルは、なんとか魔道士たちを出し抜いて接近戦に持ち込まないと、

戦力にならないってことだったんだよ。念を押すけど、これは、あくまでも、『俺た

ちの敵』じゃなくて、『仕事』なんだから、ただ頑張ればいいってもんじゃない。確実に成し遂げないと」

「そうそう、俺も、それが言いたかったんだよ」

真面目に言うケインの後に、カイルがヘラヘラと続く。

「だけど、……だけどっ、そんなこと言ったら……この先、もっと恐ろしい敵が現れる

かも知れないし、私たちに不利な条件で戦わなくちゃいけないこともあるかも知れない

じゃない? ましてや、本当の敵になんて……」

クレアが再び彼らをキッと睨みつけた。その瞳には、うっすらと涙が滲んでいる。

「マリスやヴァルドリューズさんに任せてばかりでいいの? 普段、

お世話になって

る恩を、返そうとは思わないの？」

クレアが何をそんなにムキになっているのか、ケインには解せなかった。

カイルは、ムツとした顔になったが、すぐに「へっ」と笑った。

「奇麗事じゃ敵には勝てないんだよ。勝負するには、ある程度勝算がないとな。まあ、

実戦経験の少ない魔道士見習いのお嬢さんには、わかんねーかも知れないけどな。

感情だけで行動すると、痛い目を見るのは自分だぜ？」

彼にしては珍しく、挑発的な物言い、彼女を見下ろしていた。

「……わかってるわ。あなたたちの言うことが正しいってことも。だけど、私……」

言葉に詰まってしまったクレアの瞳からは、とうとう涙が零れてしまっていた。

しんと陰悪な雰囲気の中で、ぽんっとマリスが手を打った。

「ダミアスさん、明日、あたしたちを案内してくれる時、魔道士の家に着いたら、

まず、やつらの結界を解いてもらいたいんだけど、それくらいは構わないかしら？」

彼女の明るい声を受けて、ダミアスが頷く。

「相手が私以上の力を持っているなければ、可能ですが」

それを聞いたマリスが、勝ち気な笑顔で皆を見回す。

「結界さえなければ——同じ土俵の上でなら、ちょっとは勝算が出て来たと思わない？」

クレアが、みるみる瞳を輝かせていく。

「私程度じゃ、彼らの結界を解くなんて所詮無理だけど、ダミアスさんなら出来る

わ！ 彼らの厄介な結界さえなくせば、ケインもカイルも戦えるじ

やない！」

「だけどさー、関係のない俺たちが、魔道士たちに殴り込みに行くようなマネして

いいのかあ？」

カイルが、疑わしい目になる。

「そうだよ。これは、ケンカじゃないんだ。いくら仕事でも、下手したら、フェル

ディナンドの国自体が大騒ぎにもなり兼ねないんだから、あくまでも慎重に取り組ま

ないと。自分たちの訓練のために戦いをけしかけるのは、正義とは違うし、修行をす

るなら他の方法でも……」

と、ケインが言いかけると、

「あら、これは、『正義の神の思し召し』よ。例えば、相手が異国の見ず知らずの魔道

士さんたちといえども、困っている人々を救うのが、正義の味方『白い騎士』の務め

よ。そうは思わないこと？ 『正義の白い騎士団』の皆さん」

マリスが、両手を腰に当てて、堂々と言ったのけた。

「『正義の白い騎士団』——！？ ……すてき！」

クレアまでが、うっとりと天を見上げている。

「むやみに正義を振り翳すなよっ。どーせ、マリスは、幼い頃野盗をイジメて快感を

得てたのと同じように、やっつけたいだけなんだろう？」

「あーら、そんなこと、ございませんわ！ ただ、人々が困っていることを知って

しまったからには、黙って見過ごせないのが、正義の味方の融通の利かないところで

あって、つまりね、頭が堅いわけよ」

「……さっぱり意味がわからないんだけど？」

呆れているケインに、マリスは、ピシッと指を突き立てた。

「ケイン、あんたのご主人様は誰？　どこのどなた？　しのこの言っていないで、つい

てらっしゃい！　あんたも『白い騎士団』の一員でしょ！？」

「なっ、なんだよ、それ！？　そりゃあさ、一言『ついてこい』と言われれば、いつ

でもついていくって言ったのは、俺の方だけどき、あの時は、状況が状況だったから

……」

ケインが言い訳をしているすぐ隣では、クレアが意気揚々と、見事に言い切る。

「この世にはびこる悪を倒し、正義のために、みんなで力を合わせて頑張りましょう！」

「よし、決まったわ！　さ、明日に備えて、今日はもう寝るとしましょう！」

とんとんと話は進んでしまった。

ケインとカイルは、ぽかんと口を開け、クレアとマリスの意気込みを見せられていた。

「……なあ、クレアって、最近、マリスに感化されてないか？」
カイルが呟いた。

「……まあ、マリスがノセてるんだろうけど」

「女って、キラクでいいよなー」

「ふあゝあ」と、欠伸をしながら、カイルが言う。

（お前もな……）

ケインは、心の中で呟いた。

「まだ起きてたのか？」

床に、毛布だけを被って眠っていた一行だが、夜中、ケインがふと目を覚ますと、

隣では、クレアが小さな光の魔法球で目の前を照らし、ヴァルドリューズからもらった魔道書を読んでいた。

「ああ、ケイン、ごめんなさい。眩しかった？」

クレアは、光の大きさを縮めた。

「明日、魔法を使うんだったら、もう寝た方がいいんじゃないか？魔法を充分に貯めておいた方が……」

「ええ。でも、読んでおきたいところがあつたものだから……。もう少ししたら眠るわ」

彼女は、心配させないよう、ケインに微笑んでみせた。

ケインは身体をクレアのほうに向け、頬杖を付いた。

「なあ、なんでわざわざ戦いたがるんだ？魔法を覚えると、やっぱり試してみたくなるのか？」

彼としては、何気なく聞いたつもりであつたが、少々ぶっきらぼうな問いかけに、気を悪くした様子もなく、彼女は打ち明けた。

「……確かに、練習よりも実戦の方が、精神力も集中力も高まって、魔法の威力も大きくなるけど、それだけのためじゃないわ。……カイルには奇麗事だって言われちゃったけど、私は本当にヴァルドリューズさんの役に立ちたいのよ。マリスにだってそうだわ」

彼女の目は、遠くへ向けられた。

「モルデラで、身寄りのなかった私は、祭司長様のところで巫女になり、人の役に立ちたいと思っていたけど、あそこでは、何かが違うと、いつも思

っていたの。でも、自分ひとりではどうすることもできなくて……違うと思っていながらも、祭司長様方に従っていたわ。

ある国の祭司長様がモルデラを訪ねて来られた時、私を、ご自分の神殿の巫女に欲しいとおっしゃってくれたのだけど、あなたも知っての通り、村は魔獣につけ込まれ、若い娘たちは生け贄に捧げられていたわ。その祭司長様についていけば、私はその宿命から逃れられたでしょうね。

でも、若い娘たちはまだ村に残っているわ。自分だけ助かるなんて、私には出来なかったの。その祭司長様が去ったその後も、魔獣を退治してくれる方を、密かに隣の町や村に呼びかけに行ったけど、結局、協力してくれる人なんていなかったわ。

私は、もう諦めかけていた——そんな時よ。ケインが魔獣ドラドを倒しに行くって言うってくれたのは」

その時のことを、ケインも思い出していた。

（あの時、俺は、食後の運動で、山へモンスターでも倒しに行こうとしていたんだっ

た。今思うと、それって、マリスが盗賊苛めて楽しんでるのと、似たようなモンか……）

「この人なら、もしかしたら、倒してくれるかも知れない——なんとなく、そう思っ

たの。ううん、例えば、魔獣を倒せなくても、私と同じ気持ちの人が、旅人とはいえ、

この村にいてくれた……それだけでも、嬉しかったわ。

私、あなたについていったけど、戦闘自体が初めてで、とても怖かった。だけど、

村の人たちのように黙って運命を受け入れる気には、もうなれないことに気付いたの。

戦うしかないって――！　だけど、私は、攻撃魔法の殆どを主とする黒魔法は、巫女

だったために習うことは禁じられていたし、剣を扱ったこともなかったから、あなた

とカイルに頼ることになってしまった。

さっき、彼が言ったみたいに、『自分の村の始末も自分では付けられない無力さ』

を思い知って、なんだかとてもはがゆくて、あなたたちにも申し訳なくて……」

「クレアが責任感することなんて、なかったのに。俺なんかは、ただのおせっかいやらやったことなんだし、カイルのヤツは、マリスたちと組んで、次元の穴を塞ぐついでだったんだから」

クレアは、下を向いた。

「あの時……魔獣の光線が私に向かってきた時、本当に、もうだめだと思った。私は、

これで死んでしまうんだって。でも、黙って生け贄になるよりは、ずっといいって

思ってた。そうしたら、マリスが助けてくれて、『サンダガー』を召喚して、魔獣を倒してくれたわ。

この人たちに付いて行きたい！　付いていくからには、これまでのように人任せじゃないかって思ったの。

その後だって、カイルが私を庇って怪我をしちゃったし、私はと

いえば、その治療

さえ出来なかった。……あの後、ヴァルドリユーズさんが、『魔法の習得は、徐々に

身に付くものもあれば、突然使えるようになるものもある。だから、焦らなくていい』

って言ってくれて、いくら気が楽にはなったんだけど……。

さっき、カイルに対しても、あんなにムキになっちゃって……。

やっぱり、焦って

るのかも知れないわね。一刻も早く、あなたたちくらいの戦力にならなくちゃって――。

でも、逆に、それが、みんなの足を引っ張ることになるかも知れないのよね。

現に、ここに住む魔道士相手に、私程度の魔力がどれほど通用するかさえ、わからないというのに、『正義のため！』だなんて言っちゃって……。

でも、やらなくちゃ！　って、そればかりが頭の中であって……。

実戦経験が、

私だけ少ないから、だから、あえて飛び込んでいこうとしていたんだと思うわ」

ケインが、くすっと笑った。クレアは、はっと彼を見て、それから、ちよつと恥ず

かしそうに笑った。

「戦いに慣れてるあなたたちからしたら、こんなのって、やっぱり甘いわよね。修行

して、ちゃんと戦力になってから、やることだったのよね。

……ごめんなさい。あなたにも、カイルにも、生意気なこと言つて」

「そうじゃないんだ」

ケインは笑った。

「クレアの話を聞いてるうちに、俺も昔そうだったのを思い出した

んだよ。覚えて

の武術を試してみたくて、今から考えると、無謀なこととしてたよな
ー。その時の俺は、

クレアよりも、ずっと幼かったから、相当生意気だったと思うよ。

でもさ、カイルもマリスも、似たようなモンだったんじゃないか
な？ 武道の世界

なんて、相手あってのものだからな。自分だけじゃ、上達したのか
どうか、なかなか

わからないから、相手にぶつかって、自分の力を量^{はか}ろうとしてたの
かもな。

ヴァルにしたって、あの若さで相当な上級の魔道士らしいから、
魔道士連中の中で

生意気に思われるどころか、疎まれたり、妬まれたりしてたかも？

なんでも、上達するには、ある程度の『生意気な部分』てのは、
必要なことなのか
も知れないな」

ケインは手を伸ばし、彼女の肩に置いてから、改めて微笑んだ。

「だから、クレアは思った通りにやればいいんだよ。明日は、俺が
援護する。ダミア

スさんが、奴等の結界を解いてくれるんだったら、直接奴等に斬り
つけることは無理

だとしても、魔法を跳ね返すくらいは、俺の剣でも出来るからな」

「ケイン……！」

クレアの瞳が、ますます大きく見開いていく。

「……ありがとう……！ 私、明日、頑張るわ！」

「だからって、何も、こっちから攻撃しかけることないんだからな。
あくまでも、話

し合いが先だぞ」

「ええ、ええ……！」

クレアの嬉しそうな笑顔を見て、ケインも安心し、再び毛布に包

まった。

それから、少しの間、クレアは、また魔法書を読んでいたが、その後、光の球を消し、毛布の中に入った。

「……お前、甘いな」

ケインが、これから眠りに入ろうとしかけた時、反対側の隣で寝ていたカイルが、ぼそっと呟いたのだった。

「クレアを援護するたって、俺たちでさえ勝てる——つつうより、まともな戦いになるのかさえ保証はないんだぞ。事態は何も変わっちゃいないってのに、結局、同情しちまいやがって」

「うう、そう言われると、確かに、そうなんだけど……。でも、マリスもいることだし……あいつがいれば、なんとかなるような気はしないか？」

「けっ、そんな神頼みみてえなこと……！ 確かななあ、お前のご主人様は、いろんな意味で普通じゃねえから、なんとかなるかも？ ってアテにしたくなるのも、

わかるけどなー……」

『お前のご主人様』と言われた時、ケインは、ちよつとぞくつとしたのを覚えた。

「とにかく、俺は行かねーからな。訓練で命を落としたんじゃ、あまりにもつまんなすぎるぜ」

ケインは、カイルの顔をじつと見た。

「……カイル、お前の魔法剣が、そう言ってるのか？ 危ないから逃げろって……？」

カイルは目を反らし、しばらく黙っていたが……

「……別に、そんなんじゃないけどさ……」

聞き取れないくらいの小さな声で、そう言うと、ぷいっとケインに背を向けた。

（……素直じゃないなー。本当は、クレアのこと、助けてやりたい
と思ってるんだろ

う。変なことに意地張っちゃって）

ケインは、おかしくて、笑いをこらえるのに一苦労したのだった。

紅通りの魔道対決2

「じゃ、行ってくるわね」

マリスの声に、カイルが毛布から手だけを振って、答えてみせた。マリス、ケイン、クレア、ダミアスは朝早く、木の魔道士バヤジツドの家を後にした。

ヴァルドリューズと手分けをして、魔道士達の縄張りを整理することになっていた。何かあれば、助け合えるよう、お互い同じ地区にいるよう申し合わせておく。

魔道士の最も集中している地区である南と西は、制圧した(?)ということなので、

この日は東地区を回る予定であった。

「クレアを援護するんだったら、あなたが先手を打つことね。常に、彼女に呪文を

唱える時間を作ってあげるのよ」

マリスがケインの隣に行き、言った。昨夜の話は、彼女にも聞こえていたようだ。

「クレアは、呪文を唱えている間も、相手の動きをよく見て、スキを見つけて魔法を

放つのよ。ただやみくもに撃つのは魔力の無駄だからね」

「はい」

クレアは真剣な表情でマリスに頷く。

「チャンスは、なるべくクレアに作ってあげる。でも、無理そうだって思ったら、

すぐに引くのよ。あなたは練習のつもりでいいんだから。後は、あたしとケインが

なんとかする。本当にヤバイ時は、ダミアスさんに結界張ってもら

えばいいのよ。

ま、キラクにやりましょ、キラクに」

マリスは、にっこり微笑んでみせた。

一軒目に訪ねたところは、話の解る魔道士で、ダミアスが説明しただけで、快く

結界を解いた。外見も、ヴァルドリューズやダミアスのように、ただ黒いフード付き

のマントを羽織っただけの、ごく普通の老人であった。

彼は、昨日の木の魔道士バヤジッドのように、茶までご馳走してくれ、親切であった。

朝から気合いを入れて来た彼らは、なんとなく拍子抜けした感もあったが、穏やかに勧められるに越したことはなかった。

二軒目も、あっさり片付いてしまった。

なんだか、怪し気な動物たちを飼っていた中年の魔道士であったが、ただ召喚して楽しんでいただけのようだったので、あまり世間には害はなさそうである。

アオトカゲの大きいのを呼び出して、「ペットにどうだい？」と、クレアにプレゼントしようとして、例のごとく、彼女が大騒ぎしていたが、そのような程度だった。

「ダミアスさんが、話して回れば、済むんじゃないか？　ヴァルがわざわざ荒っぽいことしなくても」

「これで済む方が珍しいのだ」
ダミアスが微笑する。

ケインは、なんだか、アストーレにいる時より、彼がよく微笑むようになったような気がした。

よく言えばクールだが、悪く言えば陰気くさく見えてしまうところは、ヴァルド
リユーズ同様であつたので、それは上級の魔道士特有のものだと思つていたのが、
ここのところ、ダミアスはヴァルドリユーズよりも、ずっと人間らしい表情をする
ように、ケインには思えていた。

三軒目の家の前まで来た時であつた。

「こちらから、何かとても邪悪な波動が伝わってくる。皆、私の周りに集まってくれ」

ダミアスの静かな瞳には、真剣な色が浮かんていた。
彼らがダミアスの周りに集まると、見慣れた薄い膜が出来ていき――！

「誰じゃあ！？ 貴様らは！」

瞬時に、その家の中に入ると、ドウグの部屋のように、強い違和感を感じる空間の中に、彼らは飛び込んでいた！

もわーっとした空気の淀み。部屋の中全体が、はっきりとしないおかしい感覚に包まれている。

表向きは赤煉瓦の家であるのが、中は、薄汚れた灰色の石造りであつた。

そして、彼らが現れたのは、凝視するのもおぞましい、巨大なムシの前であつた！

「きゃああ！」

クレアが悲鳴を上げて、ケインにしがみついた。

身体全体が黒光りしており、いくつものでこぼこが背中に出来ている。赤く丸い

大きな目を持ち、これまた丸い頭には、長い触角が二本生えている。

長い胴体の両脇からは、何十本もの足が、せかせかと動き回り、その一本一本に、

気味の悪い黄色い毛が密集し、足の先は赤くなっている。

それだけでも、充分に不気味であるのだが、より一層不気味に見せているのは、

なんといっても腹だった！

そこには、ウジのように白い小さな——とはいっても、本体が一部屋分もあるので、

それ自体はヒトの腕くらいもあり——いくつもの節目のある幼虫が、何百匹と蠢いて

いるのだった！

彼女でなくとも、普通の女性であれば、まず直視は無理であっただろう。

ケインは、ちらっとマリスを見てみたが、彼女は、ちっとも驚いてはいないようだった。

（やっぱりな……）

心の中で微笑みながら、ケインは標的に視線を戻す。

「私はフェルディナンド宮廷魔道士の遣いの者です。失礼ですが、あなたのお名前な
どを教えてくださいのですが」

平然とした口振りで、ダミアスは尋ねる。

「ふん！ おぬしらなんぞに名乗る名前はないわい！」

声の様子からすると、相当な頑固爺だと、皆には想像がついた。

「あっそう。じゃあ、勝手に呼ばせていただくわ。『ムシじじい』

でいいわね？」

マリスが言った。

（……そのまんまだが、ケンカ売ってんのか、お前は！）
隣で、ケインはちらっと再びマリスを見た。

「なんじゃと！？ 小娘が！ ワシはれっきとした魔道士じゃぞ！

このムシは仮の

姿じゃ！」

ムシは、何十本もの足を、一斉にバタバタと上下する。
まるで、地団駄を踏んでいるようであった。

「じゃあ、もとの姿に戻れば？」

マリスの声に、ピタッと、ムシの足は止まった。

「……」

「……」

そこには、しゅんと、妙な『間』が出来ていた。

「まさか、こいつ……？」

ケインがマリスを見ると、マリスは視線をムシから反らさずに言った。

「ダミアスさん、こいつの結界を解いて」

ズウウン……！

ダミアスが掌を部屋の中に向かって翳すと、ちょっとした振動が伝わり、部屋の中

の違和感はなくなり、普通の煉瓦造りの部屋が、皆の目の前に広がった。

だが、ムシは相変わらず巨大ムシのままだった。
狭そうに、何十本もの足をバタつかせている。

「あんた、戻れないんじゃないの！？」

マリスの声を聞いて、余計にムシは激しく足を上下する。

「やっぱり……」

ケインが呟く。

「もしかしたら、もとに戻れる魔法が、この中に書いてあるかも知れないわ」

クレアが、ムシに背を向けたまま、震えの止まらない手で、ヴァルドリューズからもらった魔道書を取り出し、パラパラとめくった。

「ムシ男、もし、あたしたちが、あんたの姿を元通りに戻せたら、あたしたちの言う

ことをおとなしく聞いてもらおうわよ」

マリスが手を腰に当て、勝ち気な笑みを浮かべる。

「誰が、お前たちの言うことなんぞ——！」

ムシ男は、また足をバタバタさせ、地団駄を踏む。

「そう。じゃあ、あんたは一生そのままムシでいることね。もったも、魔力を根こそぎ

抜き取ってやれば、本当のムシになっちゃうかも知れないけどね」

「なんじゃと！？ 魔力を抜き取る！？ お前らごときに、そんなことが——！」

「出来るわよ。あたしたちにとっちゃあ、あんたをもとに戻すよりも、その方が簡単

なんだけどね。さあ、どっちにするの！？」

ケインには、それがマリスのハツタリであることはわかっていた。クレアが呪文を見つけるまでの間、ムシを元に戻すことを恩に着せておこうというつもりなのだろう、と。

「あ、あったわ……！」

クレアが、嬉しそうな声を上げた。

「なんじゃと！？ 本当か！？」

ムシ男は驚いていたが、それは、恐怖でも嫌悪でもなく、歓喜に

近い声だった。

「えーと……」

クレアは、呪文を繰り返し口の中で練習してから、顔を上げた。

「クレア、出来そうか？」

ケインの目を見て、彼女は頷く。

「やってみるわ……！」

ダミアスが結界を解く。

クレアは、ゆっくりと、ひとりで、ムシ男の前に進み出た。

巨大なムシの前に立ち、今こそ呪文を唱えようとした時――

「きゃあああ！」

突然、両手で顔を押さえて、へたへたと座り込んでしまった。

ケインが、クレアへ駆け寄った。

「どうしたんだ、クレア！？ 何かされたか！？」

「……こわい……！」

クレアは震えながら、ケインの胸に顔をうずめた。

（……確かに、こうして近くで見ると、不気味ではあるな）

「こりゃ、小娘！ 早くなんとかせんかあ！」

ムシは、再び足を一斉に動かす。

「きゃあああ！」

余計に怖がったクレアは、ますます深くケインの懷に埋まる。

「小娘が！ 元に戻せないのなら、貴様を食ってしまうぞ！」

ムシの足が、一斉に動き出す。

「来るか！？」

ケインが、マスター・ソードを抜きかけた、その時――

「来ないでー！」

クレアが、片方の掌をムシに向け、無意識のうちに短い呪文を唱えた！

ボツ！

「うぎゃあああああああ！」

彼女の掌からは、赤い炎が飛び出し、物凄い勢いでムシの腹に飛んでいったのだった！

（げっ！ 攻撃してる！？）

ケインは、クレアを抱えたそのままの体勢で、硬直していた。

見事に腹に炎の球を受けてしまったムシ男は、その場でのたうちまわり、ひっくり

返って足をバタバタさせていた。

その様子も、あまり気味のいいものではない。

「おのれ……！ 元に戻すと見せかけて攻撃してくるとは、なんと
いう極悪非道！

それが、お前達を一瞬でも信頼したこの誠実な年寄りに対する仕打ちか！？ これだ

から、若いモンは信用できんのじゃ！」

ムシ男は、白い腹をウジ虫ごと焼け焦げさせ、体勢を立て直すと、二本の触角を

ピクピク上下させ、人の頭以上に大きな丸く赤い目で、彼らを睨むように見下ろした。

「あんたの魔物化したその身体は、どうも治らないみたいだから、
いっそのこと安らかに葬ってあげるってことよ」

開き直ったマリスが、ケインとクレアの前に、ずいっと立ち、ロ
ング・ブレードを
手にした。

不適な笑みを浮かべて、剣を構える。

「『魔物はヒトにあらず』よ。ムシじじい、覚悟！」

（絶対、最初からそのつもりだったな！？）

ケインは、マリスの背を見上げる。

「キエーッ！」ムシ男は、雄叫びなのか、奇妙な声を発した。

ケインも立ち上がり、剣を抜き、構える！

「クレア、下がってろ」

クレアはダミアスの方へ走っていった。

「ケインは右へ！ あたしは、左をやるわ！」

「わかった！」

ケインとマリスは離れると、まずは気色の悪い足を斬り落とす。

ズバツ！ ずしゃあつ！

「うおぎゃあああああああ！」

ムシ男の叫び声が絶え間なく続く。

二人は、切り口から緑色の体液をまき散らすムシの足を避けながら、本体にも徐々に斬りつけていく！

「もとに戻す呪文を思い出したわ！ 今度こそ大丈夫よ！」

クレアが、進み出る。

「えっ！？ でも、今もとに戻したら……こんなにズバズバ切っちゃってるのに？」

そのままヒトの姿に戻ったら、一体どんなことに——ケインは、想像するのもおそろしかった。

「おい、マリス、クレアが、こいつをもとに戻すって！」

ムシを挟んで反対側にいるマリスに、ケインが呼びかけるが……ずばっ！ ざしゃあつ！

「聞こえないのか？ おーい、マリス！」

彼女は、ひたすらムシと格闘していた。

「……ぜったい聞こえてるはずなのに」

ケインは、左手の剣を降ろした。

今や、殆ど、ムシVSマリスの戦いとなってしまうていた。それには構わず、クレアも呪文を唱え始める。

「ああ、もうどうなっても、俺は知らないからな！」

そのクレアの呪文が唱え終わる時だった。

今まで、マリスとケインが斬ってきたムシの数十本もの足が、切り口から一斉に、
よきつと再生したのだった！

「きゃあああ！」

クレアが、またその場にへたりこんで、両手で顔を覆ってしまった。

「小娘がー！ また失敗しおってからにー！」

ムシ男は、怒って赤い目を点滅させ、クレアに方向転換し、襲いかかる。

ケインとマリスが援護に向かうが、

「いやあつ！ 来ないでー！」

ボツ！ ボツ！

彼女の両掌から、炎の球が次々と発射された！

「うわっ！」

ケインは、とっさに剣で回避したが、クレアは、目を瞑ったまま攻撃していたので、

以前の無差別攻撃と同じであった！

「あぢゃあああああああ！」

全身に火が回ったムシ男が、跳ね上がる。

その姿を見て、クレアが一層怯える。

「小娘……！ もう許さんぞ！」

黒焦げになっても、もともと黒かったので代わり映えはしないが、

ムシ男は、クレ

アに向かって、ぶすぶす^{くすぶ}燻りながら這って行った。

クレアの瞳が、恐怖のため大きく見開かれる！

どど〜ん！！

一瞬、何が起きたのか、ケインにはわからなかった。

爆発音がしたと同時に、彼の身体は、妙な感覚に包まれた。
そして、宙に浮いていた！

ヴウン……！

途端に彼は結界に包まれると、そこには、マリスとダミアスがいたのだった。

「クレアは！？」

ケインは、浮かび上がっている結界の中から、下を覗き込む。

今までいた家と思われるものは、もう存在しておらず、代わりに
赤い瓦礫^{がれき}

の山が築かれていた。

それは、ムシ男の家だったものであった。

「クレアが放ったのは大技だったみたい。ダミアスさんが、あたし
たちを宙に浮かせて、結界で守ってくれたのよ」

マリスが解説する。

結果ごと、彼らは、ゆるゆると下降していく。

「クレアは……！？」

ケインは、ダミアスを振り返る。ダミアスは、下を指差した。

下降していくうちに、瓦礫の中で、一部、円形に、そこだけは瓦
礫に埋もれていな

い箇所があり、そして、そこには――

両手を突き出した、攻撃したままの格好で立ち尽くし、肩で大き
く息をしている

クレアの姿があったのだった。

「クレア！」

地上に降り立ち、結界が解かれると、ケインとマリスは、クレア
のところへ駆け寄った。

クレアは、円形に張った防御結界を解き、声に気付いて振り返った。

「ケイン！ マリス！」

クレアは泣きながら、ケインの腕の中に飛び込んだ。

「こわかったの！ あのムシおじさん、『お前を食ってやる！』って、口から、

しゅーしゅー白い糸を吐いて……！ 私、とてもこわくなって――

ああ！ 思い出し

ただけでも、なんておそろしい！」

「わかった、わかった。もう、大丈夫だから」

ケインは、ぎこちなく笑うと、啜り泣いている彼女の背を軽く叩いて、安心させようとした。

彼には、怯えながら、そんなことをしでかしてしまう彼女の方が、よっぽどこわかった。

「……生命反応はない。どうやら、あの魔道士は、完全に消滅したらしい」

瓦礫の山に手を翳して、ダミアスが、ぼそつと言った。

「クレアの最後の『地割れ攻撃』が効いたみたいね。やるじゃないの！」

クレアは、そう言ったマリスを振り返った。

「えっ？ 地割れ……？ じゃあ、私、『地』の魔法を身に着けられたのかしら！？」

ダミアスもマリスも、微笑みながら頷いた。

クレアは、二人を見上げると、嬉しそうに飛び跳ねていた。

（これって、喜んでいいことなのか……？？）

ケインは、無意識に地割れの呪文を唱えたことに、恐ろしさを覚えていたのだった。

四軒目の魔道士も、先のムシほどではないが、ヒト離れしていた。今度は、獣人タイプのモンスターが登場したかと思うくらい、それは、上半身がウルフのミドル・モンスターにそっくりであった。

ダミアスの話に耳を傾けるどころか、いきなり槍を持ち、攻撃をしかけたのだった。

がしっ！

クレアに向かってきた槍を、ケインの剣が受け止める。その背後では、彼女の呪文を唱える声がある。

（よし、もう少し時間を稼いで……）

と、ケインが思っていると、

「あっ！ いけない！」

クレアの叫ぶ声と同時に起こったのは、巨大なストーム——竜巻だった！

「ごおおおおおおお——！」

「うわーっ！」

ぐるるるるるるるるるるる！

ストームは家の屋根をぶち抜き、ケインと獣人とを巻き上げていった！

目を回したケインと獣人は交わることなく、ぐるぐると竜巻の中で回っていた！

ヒュン——！

巨大ストームのに巻かれていたケインを、空間移動したダミアスが抱えて、戻る。

地面に横たわっていたケインが、うつすら目を開けた。

（し、死ぬかと思った……）

「ああ、ケイン、ごめんなさい！ ごめんなさい！」

わあっと、クレアが泣きながら、彼に両手を翳し、回復魔法をかける。

マリスも、上から彼の顔を覗き込んでいたが、心配しているというよりも、珍しいものでも見るような目で、見下ろしていた。

「……あのモンスター……じゃないや、魔道士は？」

まだボーッとしている頭で、ケインは半身起こし、誰にともなく尋ねた。

「どうやら、別の空間へ飛ばされてしまったようだ」

ダミアスが、静かな声で言う。

（……てことは、ダミアさんが俺を救い出すタイミングを間違えてたら、……俺も、

変な空間へ飛ばされてたのか……?? 魔道士や魔物ならまだしも、

普通の人間が

迷い込んだりしたら、一体どんなことに……!? 時空酔いはおろ

か、『外』への

出方だってわかんないのに……!)

ケインは、ぶるっと、思わず身震いした。

「ごめんなさい! 私が呪文を間違えたばかりに、ケインを危険な目に……!」

ごめんなさい!」

クレアは、ケインの伸ばした足の上に突っ伏して、わあわあ泣いていた。

「だ、大丈夫だってば」

引き攣りながら、彼女の背に手を置くケインであった。

（もう、頼むよ、クレアちゃん……）

「魔法って、本当に恐ろしい……!」

マリスが呟く。

それには、ケインは何か言いた気だったが、横目で見ただけであつた。

最強の魔道士

その後も、『取り締まり』は続く。

クレアは、ケインを危険に追い込んだことで、落ち込んでしまい、魔力を貯めてお

く意味でも戦いには参加せず、ダミアスと傍観していた。

ケインもマリスも、クレアには悪いが、この方が速く片付くと思っていた。

なにしろ、緑のカエル魔道士ドウグや、木の魔道士バヤジッドなどがまともに思え

てくるほど、その後出逢った魔道士たちは、魔物化しているものが多かったのだ。

始めのうちは、話し合おうとしていたダミアスも、次々お目にかかるのが、話しか

けるのもバカらしくなるほどの、知性のかけらも感じさせない化け物ばかりなので、

六軒目にマリスがいきなり斬りつけてからは、もう何も言わなくなっていた。

「そろそろお昼にしましょう」

十数軒制圧した後で、マリスが言った。

不気味なものばかり見た後で、よく食欲が湧くなあと考えたケインも、言われてみ

れば、腹が減っていることに気が付く。

彼らは、ダミアスに案内され、紅通りのメイン大通りへと向かった。

「よお！」

食堂に入ると、カイルがひとりで大人数用の丸テーブルについていた。

「食事は、いつもここで摂ってるって、ヴァルに聞いたからさ」

カイルは、昨夜のことなどなかったかのように、にこにこしていた。

食事が来ると、実はよほど腹が減っていたのか、ケインは、がついていた。

マリスも同じであったのか、二人は無言で食事をかつ込んでいた。「おお、いい食べっぷりだなあ！　よっぽど働いたんだな、お前ら

！　……クレアは？

腹減ってないのか？」

カイルは何気なく言ったに過ぎなかったのだが、クレアのスプーンを持つ手がピタッと止まり、その瞳は、みるみる瞳が潤んでいく。

「ん？　どうした？　……あ、わかった！　さては、魔法うまくいかなかったんだろ

う？　ケガする前にやめといった方がいいんじゃないの？

クレアは、かわいいんだからさ、何も、戦いの中に自分から飛び込んでいかなかった

って、好きな男と結婚して、幸せな家庭を築いていけばいいじゃないか。

いくら、ケインが援護するって言ったって、限度ってモンがあるんだからさ、危な

いことはあんまりしない方がいいんじゃないの？」

クレアの食事の手が、完全に止まる。

黒い、大きな瞳からは、大粒の涙が零れ始めると、両手で顔を覆い、いきなり席を立って走って行った。

「なっ、なんだ？　どうしたんだ？」

カイルが動揺して、ケインたちを見回す。

「カイル、お前って、時々カンが鋭いよな」　食べながらケインが言う。

「ケイン、追いかけて」マリスが、やはり食べながら、彼を見もせずと言った。

「えっ？」

「早く」

まだ食べている最中であつたケインは、仕方なく、名残惜しそうに、残りの食事を

見つめてから、店のドアに向かって駆け出した。

「クレア！」

彼女には、すぐに追いついた。

「放して、ケイン！」

クレアは、彼の掴んだ手を振り払おうとする。

「まあっ、痴話喧嘩だわ！」

出入り口付近の客たちが、二人の様子に、くすくす笑っていた。

「と、とにかく、落ち着けよ。ちゃんと話し合おう！」

動揺したケインのセリフは、ますます噂好きなオバちゃん客たちを喜ばせていた。

「みんな私が悪いの！」

クレアは再び出口に向かうが、入ってきた男にぶつかり、跳ね返った。

「……ヴァルドリュースさん……！」

「大丈夫か」

彼は、ちっとも心のこもっているようには聞こえない、抑揚のない声で言うと、

座り込んでいるクレアに手を差し伸べた。

途端に、クレアは、その場で泣き出してしまった。

食堂の裏の空き地では、クレアとケインは草の上に座り、目の前にはヴァルドリュースが立っていた。

慰めているのはケインばかりで、彼は、じっと、普段のように、

静観しているのみ。

クレアは両手で顔を覆ったまま、しくしくと泣くばかりで、ついにはケインも困り

果て、黙ってしまった時、ヴァルドリューズが、やっと口を開いた。

「お前たち二人とも、午後は私と一緒に来るか？」

クレアにもケインにも、意外な言葉に思えた。

彼女は泣くのをやめ、顔を上げた。

「失敗するのは当然だ。同じ過ちを二度と繰り替えさなければいいのだ。そして、

少しの失敗で、すべてを恐れてはいけない」

彼女は、ヴァルドリューズだけを見つめていた。

相変わらず抑揚のない、感情がこもっているようには聞こえないセリフであったが、

彼女にとって師匠である彼の言葉とは、神の神託に近いものがあつたのか。

「……そうですね。私なんか、まだ駆け出しの魔道士見習いなんですよもの。いきなり

失敗もせずに上達するわけなんて、ないんだわ。

……ケインも、ごめんなさいね。私がいつまでも気にしてたら、ケインだって気を

遣っちゃうわよね。午後は、絶対頑張るわ！　いいえ、これからも、ずっと頑張る！

一人前になるまでは、みんなに迷惑かけちゃうかも知れないけど、なるべく早く

上達するように、頑張るから！」

涙を拭きながら、彼女は少しだけ笑顔を見せた。

ケインは、やれやれと肩の荷が下りたような気持ちであったが、自分にまで声を

かけたヴァルドリューズの本当の意図はわからず、きつと、クレアの援護だろう、と

いうくらいにしか思わなかった。

午後は、マリスのいるダミアスサイドに、カイルが加わり（彼は、ケインたちの

様子を聞いて、大丈夫そうだと判断したのだった）、ケイン、クレアのヴァルドリュ

ーズサイドとそれぞれに、東地区の取り締まりを続けた。

ヴァルドリューズの肩には、いつの間にかミュミュが止まっていた、彼の頬にもた

れかかるようにして、頭をくっつけていた。

「ミュミュ、遊びに行くんじゃないんだから、どこか安全なところにいた方がいいん

じゃないの？ また捕まったりしたら……」

「ここが一番安全だもん」

クレアの忠告も最後まで聞かず、ミュミュは上機嫌で、ヴァルドリューズの頬に、

甘えるように頬を摺り寄せた。

「そこにいと、ヴァルドリューズさんのお仕事の邪魔になるのよ」

「だって、ミュミュ、か弱いもん。戦えないもん。それなのに、ヴァルのお兄ちゃん

と離れちゃったら、それこそバケモノに捕まって食べられちゃうよ
ー。」

だから、ずっとここにいろの。大丈夫！ ミュミュ、いい子だもん。お兄ちゃんの

お仕事邪魔しないで、ずっとここでおとなしくしてるから」

忠告も空しく、クレアは溜め息をついた。

ミュミュは、きやつきやいいながら、楽しそうにヴァルドリューズの首にしがみつ

き、彼の方は気にも留めていないようで、すたすたと進む。

赤煉瓦の平屋に着いた。

ダミアスのように、当然、結界を作って中に入るものとばかり思っていたケインと

クレアは、ヴァルドリ्यूズの側に寄るが――

どがっ！

彼は、いきなり手を翳すと、魔法で煉瓦の壁をブチ破ったのだっ
た！

「……！」

「……！」

ケインもクレアも、驚いて後退ったが、ヴァルドリ्यूズは何の
ためらいもなく、
さっさと中へ入っていく。

「誰じゃあ、貴様らは！？」

そこにいるものを見て、クレアとミュミュが悲鳴を上げた。

ごつごつと、茶色い大きな岩が合わさって出来た巨人が、頭をこ
ちらに向けて座
っていたのだ。

ところどころ緑色の苔にまみれ、伸び放題の雑草や、枯れた草な
ども生えている。

背には、大きな傘の形をした、紫色に黒い斑点のキノコのような
ものである。

先程のムシ男に比べれば、気持ちの悪さではましであったが、や
っていることは、

非人道的であった。

クレアやミュミュは、それに対して叫んだのだ。

岩巨人の座っている前では、大きな壺の中に、身体を半分を漬け

込まれた、明らか

にヒトの形をしたものだった。

そのヒトは、口まで、ぐるぐると縛られていたため、呻き声くらいしか上げられず、

彼らに助けを求めるように、恐怖に見開かれた目だけを、じっと向けていた。

「クレア、奴の足に攻撃魔法を。倒すことは考えなくていい。ケインは、奴の気が

反れている隙に、ヒトを救い出せ」

ヴァルドリューズが、彼らを振り返らずに、小声で指示した。

「いきなりってことは、……やっぱり、話し合いはないようね？」

「そういうことだな」

クレアとケインは肩をすくめると、クレアが呪文を唱え始め、ケインも身構える。

「勝手に人の結界に入ってきておって……！ お前らもついでに食ってやる！」

「ヒトを食うようなヤツに、まともな話はないか」

肩をすくめたケインに、準備の出来たクレアは微かに頷いてから、視線を岩の

怪物に向け、両手を翳した。

「あぎゃあああああああ！」

ヒトの頭ほどもある火の球が、怪物の足に直撃した！

それと同時に、ケインも走り出し、壺から、ぐるぐる巻きのヒトを、引き抜こうと

するが、抜けない。

仕方がないので、壺ごと引き摺るが、予想外に重さがあった。

それでも、ケインは、ずるずる引き摺っていく。

岩の巨人は、火球が当たったところから煙を出しながら、起き上がった。

「小僧、ヒトの食い物を盗もうとは、いい度胸だ！ 貴様も一緒に

食ってやる！」

ケインは壺を背に庇うと、剣を抜くと同時に、迫り来る大きな岩の手を斬りつけよ

うと、体勢を立て直す。

そこへ、瞬時に空間を移動してきたヴァルドリューズとクレアが、ケインの目の前に飛び込んだ。

ごおおん！

両手を正面に翳しているクレアの防御結界に、叩き込んだ岩人間の腕が、鉄の壁でも殴ったかのように、跳ね返った音であった。

「クレア……！」

クレアは、ちらっとケインを振り返って微笑み、また別の呪文を唱えていた。

岩人間は、どこが顔かわからず、その表情は読み取れないが、いまいましそうに、クレアの結界に、炎や水の攻撃を浴びせる。

一般的な魔法を使っているところを見ると、やはり、もとは人間の魔道士だったのだろう。

クレアの、長めの呪文が終わると、ケインたちの周りに出来ていた結界が、あっさりと消えた。

「ふふん、時間切れか。結界が解けたな！」

岩巨人は、手と思われるところから、バチバチと雷のような技を放電させ、その稲光は、徐々に規模を増していく。

それが、ヒト一人分にまで膨れ上がると、岩の手は、彼らに向け

られた。

その時、クレアが呪文を発動させた！

両手を押し出すようにして、見えない球を巨人にぶつけたのだった。

「おわあぎゃあああああ！」

岩巨人は絶叫と共に、白い煙に包まれ、完全にケインたちからは見えなくなる。

ただ、大きな石や岩が、高いところから落ちてくるような、ごんごんという音と、振動が伝わるだけであった。

絶叫も収まり、振動も終わり、白い煙も引いてきた頃、視界が開けた。

岩の破片があちこちに散らばっている。

あれほどの巨人を造っていた、すべての岩の塊とは思えないほど、少量であった。

中央には、小人くらいしかない小柄な人間が、裸でうつぶせに倒れている。

途端に、ケインが引き摺ってきた壺の中のヒトを縛っていた草のツルが解け、壺も

自然に割れた。ヒトは、どさっと倒れ出る。

「大丈夫ですか！？」

ケイン、クレアは、普通の町民のようなその男を抱え起こし、顔を覗き込む。

彼は、まだ恐怖から立ち直っていないようで、がたがた震え、彼らを見ても、ぱく

ぱく口を開くが、声にはなっていないかった。

「待って下さい。今、回復魔法をかけますから」

既に、彼女は男に両手を翳している。

「クレア、さっきの呪文は……？」

「ムシのおじさんにかけてようとした、元の身体に戻す呪文を、あの岩の魔道士にかけたの。今度は気持ち悪くなかったから、落ち着いて、唱えることができたわ」

彼女は、回復魔法をかけながら、ケインに説明した。

「技を放つタイミングは、ヴァルドリューズさんが『心話』で教えてくれたの」

アストーレでは、ケイン、カイルにも覚えのある、自分たちにだけ響いていた声と同じく、ヴァルドリューズは、クレアに聞こえるように伝えたのだった。

「今度は成功したな！ やったじゃないか、クレア！」

「ええ！ ありがとう！」

ケインは、嬉しそうにクレアの背を叩いた。クレアも、笑顔で応える。

一方、ヴァルドリューズはというと、素っ裸になって倒れている小人を見下ろし、

「遠くまで無駄に伸ばしている結界を解き、ヒトは食うな」と今更のように、淡々と
言い聞かせていた。

小人になってしまった、もと岩人間は、俯せのまま、頷くことすら出来なかった。

エサにされていた町民の男も、元気になり、町へ帰っていった。

ケインたちの取り締まりは続く。

クレアは、時々思った魔法と違うものを放ってしまったり、先のように、ケインに
当てはしなかったが、目標から外してしまったりしながらも、なんとか頑張っている

のだが――

どごおおおおおんんん！

「ああーん！ ごめんなさい！」

またしても、家一軒崩壊させていた――。

その家の魔道士も、気味の悪いクロオオダコのようなものだったため、一目見た

途端、悲鳴を上げ、大技を放ってしまったのだった。

明らかに、威力を増していたが、とっさにヴァルドリューズが周囲に結界を張った

ので守られた。そうでなければ、家五軒ほど崩れていただろう。

ケインは、クレアの魔力が、以前よりも増えたように思えた。

どしゃーん！ がらがら……！

彼らのいるところとは離れた方向からも、破壊音が聞こえてくる。
（あれは、多分、マリスたちだろう。あっちは、クレアみたいな魔法攻撃は出来ない
だろうから、きっと、マリスがぶっ壊してるんだろう。おそろしい
女どもだ！）

ケインは、密かに思った。

「あら……！」

何十軒目か向かって歩いていると、マリス、カイル、ダミアスのチームと出くわす。

夕方で、辺りは薄暗くなってきた。

「マリスたちもここへ……？ ――てことは、あの家が最後だな？」

ケインの言葉を聞いて、マリスが、にやーっと笑った。

「早いもん勝ちよ！」彼女は、ターツと走っていく。

「待てよ、マリス！」ケインも後から追いかける。

「たーっ！」

ばこおっ！

マリスの飛び蹴りを受けて、煉瓦の壁は崩れ去った。

「お前……、破壊がひどくなってない？」

横目でマリスを見る。

「そう？ そんなことよりも、さ、行くわよ」

彼女は、しれっとして、壁に出来た穴に、親指をくいと向けた。

「何だ！？ 貴様らは！？」

そのあいさつは、もう何十回と聞いていた。

だが、家の中にいたのは、意外にも、フードを被った、典型的な魔道士の老人だった。

しかも、知的さを感じさせ、学者のような雰囲気だ。

マリスもケインも、思わず呆然として立ち止まっていた。

「人の家に無断で、しかも壁を破って入ってくるとは、なんたる無礼な！」

「すいません、すいません！」

ケインが、ぺこぺこ頭を下げている隣で、マリスは部屋の中をきよろきよろ見回していた。

「ねえ、ケイン、ここは結界張ってないみたいよ。なんだか、普通だわ」

マリスの言う通りであった。そうでなければ、壁を破ったにしても、外部からそう

簡単に侵入出来るはずはなかった。

「結界が、どうかしたのかね？」

長い白髪の、青いフード付きマントに包まった老人の怪訝そうな

顔が、二人に向けられてる。

「あのう……、最近、紅通りにお住まいの魔道士の方々の結界が、広範囲に渡って張ってあるそうなので、それをやめて頂こうと、お願いに上がったのですが、……張っていらっしやらないというのなら、僕らは、これで帰りますので。……お邪魔しました」

ケインは取り繕うと、マリスを促し、もと来た壁から去ろうとしたのだが――

（壁が……崩れてない！？）

ケインは、目を疑った。

どこをどう見ても、赤い煉瓦の壁は、罅^{ひび}さえ見当たらないのだった。

「しまった！ ケイン、罨^うだわ！」

マリスの声と同時に、二人の足元が、ぐらっと揺れた！

或る晴れた日に吟遊詩人が見える

赤煉瓦の壁は、ぐにやりと歪む。

不安定な足場で、ケインとマリスは必死に体勢を立て直していた。

「ふははははは！ お前達がここに来ることなど、ワシの占いによって、先刻承知だ

わい！ 連れの魔道士どもが『ここ』へ着く前に、お前達を別々の空間へ飛ばしてやるわ！」

老魔道士は、両手を掲げる。

赤い部屋の中で、まるで、魔道士の身体全体を青い炎が包んでいくような、そこだ

けが青く、ゆらゆらと鈍い光を放っている。

とっさに、マリスが、ぎゅっと、ケインの手を握る。

（そうか、離れ離れにならないようにだな……！）

と、思っていると、いきなりマリスがそのまま走り出した！

ケインも、慌ててそれに習う。

ガキイイインンン！

マリスの振り上げたロング・ブレードを、魔道士が空中から取り出した杖で、受け止めた。

次々と、突き出す彼女の剣を、魔道士が簡単に防いでいく。

マリスが彼を斬りつけるというよりは、呪文を唱えさせまいと邪魔しているのだと、ケインにはわかった。

「さすが、噂通りの剣の達人ですな、マリス・アル・ティアナ嬢」

老魔道士が薄笑いを浮かべる。
マリスの目が、キツと光った。

「そうそう、あなたのことも、存じておりますよ。バスター・ブレードとマスター・

ソードを合わせ持つ、ケイン・ランドール殿」

二人は、改めて老魔道士をじっと見つめた。

「……なんで、俺のことまで……!？」

「あんた、……何者!？」

質問には応えず、老魔道士は彼を見たまま、続けた。

「バスター・ブレードはどうしたのじゃ? ……ああ、あの若造魔道士がどこかへ隠

したのだな。つくづく油断のならない奴じゃ! ……まあ、よい。

人質交換という手もある」

ケインの老魔道士を見る目が、驚きに変わる。

(こいつは、バスター・ブレードの姿形を知っている……!?)

それは、彼の師匠から受け継いだ、二年前の出来事を思い起こさせた。

(……まさか、……こいつは……!)

記憶を辿り、それが何かと結びついた時、マリスが言い放った。

「もしかして、あんた、……ゴールドナスと敵対する大魔道士じゃ……?」

彼女は、老魔道士に、にやりと笑った。

「『蒼い大魔道士』ビシャム・アジズ……! 初めてお目にかかりますわ」

マリスが剣を持った右手を大きく振り、腰を屈め、深々と騎士の礼をしてみせる。

(『蒼い大魔道士』……! こいつが、あの噂に聞く……!?)

ケインですら、その存在は知っていた。魔道士たちの更に上を行く大魔道士の存在

は、魔道士はおろか、それ以外の者たちにとっても、脅威である。
一介の剣士などは

太刀打ち出来るはずもない。

世の中に数人しかいないと言われている大魔道士たちは、ほとんどが己の研究に

没頭し、世捨て人のようにひっそりと暮らしており、表には滅多に現れることはない。

ゴールダヌスもそうであったが、アジズだけは、時折ふとどこかに出現していたため、

その姿を目にした者は少なくはなかった。

老魔道士は、かかかと笑った。

「これはこれは、ご丁寧なご挨拶じゃな。さすがは、ベアトリクス王国近衛兵を勤め

られていただけある、美しい騎士の礼じゃ。どうじゃの？ 主君王太子殿下のご機嫌

は、いかがですか？」

実に嫌味っぽく、その声は響く。

マリスの手が、わなわなと震えているのが、ケインの手にも直に伝わっていく。

「あんたたち、まさか、あの人に――セルフィスに、何かしたんじゃないでしょう

ね!？」

（セルフィス……!？ この間、マリスが寝言で呟いてた奴のことか？）

そのことで、ちらっと彼女をからかったら、なんだかただ事ではなさそうであった

のを、ケインは思い出す。

そして、やはり、それは、ただ事ではなかったのだろう。

マリスは、今にも魔道士に食いつきそうな、それをかろうじて抑

えているように、
ケインには見えた。

「ご安心ください、マリス姫。我々が、どうしてあのお方に、何か出来ると思います

のです？ 出来るわけなど、ありはしませぬよ。あの方は、大国ベアトリクス唯一

の王子殿下なのですから。お側付きの宮廷魔道士も、なかなか優秀な者のようで

すし、あの方ご自身も、結構な魔力をお持ちですからな。だいいち、ワシは、まだ、

ベアトリクスに行ってもしておらんのでな」

老魔道士は、「まだ」というところを強調して言い、かかかと再び笑う。

「……それは、そのうち、行くつもりでいるってこと？」

「それが、希望ではあるがの」

「……そんなこと……！」

マリスの鼓動が速くなるのが、まるでケインにまで伝わってくるようだった。

「マリス……！」

ケインは、静かに、だが強く、マリスの手を握り返した。

マリスは、痛そうに顔を歪め、はっとしたように彼を映す紫の瞳は、説明がつかない

ように、まだかすかに動揺していた。

ケインは、黙っている、というように、首を横に振ってから、老魔道士を睨み据えた。

「二年前に、俺のマスター・ソードを奪おうとした魔道士がいた。そいつをよこしたのは、お前か？ 一体何を企んでいる！？」

今度は、マリスが驚いたようにケインの横顔を見つめた。

「ケイン、あなたも、こいつのことを知って……？」

老魔道士は笑うのをやめ、視線をゆっくりとケインに移した。

「貴公は、魔力もない傭兵の分際で、今まで『魔の世界』に関わってき過ぎたのじゃ

よ。しかも、厄介な武器を二つも手に入れた。普通の人間の身で、同時期にあの二つ

を揃えるなど、有り得ないと我々は思っておった。

……が、そうでないのがわかった以上、放っておくわけには行かぬのだ。

知っておろう？ 『伝説の剣は、魔道士の野望を打ち砕く』と――

――！

蒼い大魔道士ビシャム・アジズの目が鋭く光ると同時に、彼らの周りが揺れ出した！

「別々の空間になんか、飛ばされてたまるか……！」

ケインは、マリスを庇うようにしっかりと抱きしめた！ マリス

も彼に回した腕を、

きつく締める。

その時――！

ぽんっ！

現れたのは、なんとミュミュだった！

「……！？」

「……！？」

ケインもマリスも、目が点になった。

「なんじゃ、このニンフは！ 一体、どこから入ってきおったのじゃ！？」

アジズの間の抜けた声が、その場に響く。

ミュミュがマリスの腕を引っ張ると、ケインが今まで抱きしめていた感触は、すかっとなくなっただけと同時に、マリスの身体が一瞬消え、またすぐ現れた時には、宙に浮かんでいたのだった。

「えっ……!?!」

マリスが、困惑した顔でケインを見下ろす。

「ごめーん、ケイン。ひとりずっしか運べないって、知ってるでしょ？」

ミュミュが、ベツと舌を出してみせた。

「ケイン……!」

心配そうなマリスの顔に向かって、ケインは頷いてみせた。

「マリス、安全なところへ」

「ダメよ！　あなただけここに残るなんて！　あいつは、じいちゃんちからの能力と匹敵する能力を持ってるのよ！」

「ミュミュ！　マリスを連れて行け！　急ぐんだ！」

マリスがケインを掴もうと手を伸ばすが、その姿は一瞬で消えた。「なんということじゃ！　あんなニンフがいようとは……!　どういうわけか、妖精

には、魔道士の結界などは関係ないのじゃあ！」

大魔道士が頭を抱えて、悔しがる。

（ミュミュは、結界の中も関係なく行き来は出来る。途中で迷わなければ……）

となると、自分のすべきことは、時間稼ぎ……と覚悟していたケインは、マスター・ソード構える。

大魔道士は気を持ち直し、薄笑いを浮かべ始めた。

「ほほう、このワシに刃向かおうというのか？　ワシが何者かわかっていての行動とは。」

その心意気は、たいしたものじゃ。だがな、貴様の剣、『そのまま』では、ワシは倒せぬぞ」

「……やっぱり、マスター・ソードのことも、ちゃんと知ってたか」
「なにしろ、その剣を手に入れると、貴様も知っている魔道士に命じたのは、このワシなのだからな。ワシの野望に邪魔なものは、排除しなくてはなう。それには、

不完全な今が——二年前とは違い、『その能力を失ってしまった今』が、最も適しておるのじゃ……！」

アジズが掌を向けた。

蒼い稲光が発せられる！

ケインは、マスター・ソードで遮った。

びりびりと、衝撃が剣を伝って走る！

（くっ……！　なんて威力だ！）

大魔道士にとっては、ほんの小手調べなのだろう。

薄笑いを浮かべたまま、もう片方の掌からも、稲妻がやってくる！

剣を通して、全身に受けているしびれが、ケインを苦しめる中で、剣に力を込める。

『剣に棲まいしダーク・ドラゴンよ！

今こそ目覚め、

偉大なるその力を、

貸し与えよ！』

マスター・ソードは、黒い影に覆われた！

黒い影は、いつかのように、剣全体を包み、巨大化していくと、黒い炎のように、

吹き荒れた。

「ほほう！ 見事な黒き竜じゃ！ 来るか！？ ワシと勝負してみるか！？ 黒魔法

の王者黒竜『ダーク・ドラゴン』よ！」

アジズの蒼い稲妻は放電しながら、西洋竜の姿をした黒い炎に向かっていった！

黒い炎の竜と、蒼い雷は、お互いを喰らおうとするかのように噛み付き、絡み合い、

衝突するたびに、地響きと、強い光を発する。

だが、雷はますます太く勢いを増し、竜の全身を駆け抜ける！

爆発と爆風が起こり、やがて、竜の姿は煙と化し、消えていった。

「はあっ……！ はあっ……！ くっ……！」

がくつと、ケインが、不安定な空間に、片膝を着いた。

蒼い稲光が、バチバチツと、彼の身体に巻き付き、蝕んでいく。

剣を包み込んでいた黒い影は、まるでどこかへ吹き飛んでいってしまったように、

剣は、元通りのロング・ソードのまま、左手にあった。

「やっぱ……、こ、これが、限界か……」

途切れ途切れに、ケインは呟いた。

相手が加減していたとわかっていても、受けたダメージは相当大きい。

鍛えられていた彼の身体でも、まだ立ち上がれずにいた。しびれが全身に残り、

思うように動かない。

「不完全とはいえ、そこまでの威力があるとは……。じゃが、今ので、貴様は、自分

の持つ精神力と、剣の魔力を使い果たしてしまったであろう？ 無

謀にも、このワシと勝負しただけ、褒めてやろう」

不気味な笑いを浮かべながら、老魔道士がゆっくりと近付く。

ケインは、荒く、肩で息をしながら、なんとか剣を鞘に収めた。

「ほほう、どうやら、貴様もワシの言った意味がわかり、抵抗しても無駄だと悟った

か。ならば、遠慮なく、貴様と共に、その剣を……！」

魔道士の、皺だらけの手が、ケインの頭のすぐ側まで伸びていく。

「そう……じゃない……！　お、お前は、もうひとつの、剣……の
ことを、……忘れている

……！」

苦しそうに片目をやっと開き、だが、ケインは笑ってみせた。

「なっ……、なんじゃと!?!？」

動揺した老魔道士は、何かを感じたのか、後退った。

ケインと大魔道士の間の空間が、僅かに歪む！

そして、彼の言う『もうひとつの剣』は、そこから産み落とされるようにして、

彼の頭上から徐々に降りて来たのだった！

「な、なんということじゃ！　……おお、あの若造魔道士め！　つ

いに、ワシの結界
にまで……！」

老魔道士の言葉を最後まで聞くこともなく、ケインは、『声』に
導かれるままに、

その空間を、切り裂いた！

妙な感覚に包まれる――

自由はきかない。どんなにもがいても、まるで、水の中にでもい
るような、緩慢な

動きにしかならず、彼を素通りしていく空気は、暖かいのか冷たい
のかもわからない。

目は閉じられている。

彼が、ただ最後に見たものは――

ヴァルドリユーズから受け取ったバスター・ブレードで空間を裂くと、ヴァルド

リユーズが彼を引き上げた。

ケインの足の先までが完全に裂け目の中に入ると、空間は塞がって、既に、例の

部屋の赤煉瓦は見えなくなっていたのだった。

「ここまで来れば、もう大丈夫だろう」

ヴァルドリユーズの声が、近くで聞こえる。だが、まだ止まる気配はない。

ミュミュが、あんな危険な結界の中にひとりで入るわけではない、ヴァルドリユーズ

が近くにいるからだと言っていたケインは、無謀は承知で、アジズの気を引き付けていたのだった。

「……マリスは……？」

横になった姿勢でいるらしいと感じながら、ケインは、一番の気がかりを、目を

閉じたまま確認した。

「ミュミュが、ダミアス殿のところへ連れていった。皆には、しばらくアストーレに戻ってもらう」

「それなら、良かった……！　それだけ、あの大魔道士は、……危険だからな」

「うっ！」と、身体を屈め、あちこちが痛むのを抑える。

「あそこでは、条件が不利だ」

ヴァルドリユーズは相変わらず表情のない声で返す。

「マリスが……、『ゴールドナスと敵対してる蒼い大魔道士』とか、なんとか……言っていたけど……」

「『ビシャム・アジズ』——『黒の大魔道士ゴルダヌス』殿に匹敵する力を持つと言われている」

「……だよな。ゴルダヌス自体が、とんでもない魔道士だって言われてるんだろ？」

「そんなものに匹敵するって言ったら……！」

「あくまでも、『自称』だ。気にするな」

「……気にするなって、……大魔道士つかまえて、お前も結構言うよな」

ケインは、痛む身体を庇いながら、苦笑いをした。

「ここだ」

唐突に強い風圧が起こった後は、ケインの背が地面に着いた。

「……!？」

うつすら目を開けてみると、そこは、緑の木々に囲まれた、ある森の中のようなであった。

知らない植物、草花、空の青さまでが、どこか違う。気候は、暖かだ。

なんとなく、彼が今まで見て来た国とは違うような、なんというか、少々現実離れしているようなところに思える。

その景色の中でアクセントとなっている、黒いフード付きマントに身を包んだヴァルドリューズが、屈んで、ケインの身体に手を近付け、回復魔法をかけた。

ケインは、ヴァルドリューズの顔を見て、やっと安心した。

身体の痛みも、徐々に薄れて行く。

「ここは……？ アストーレじゃないのか？」

「キシール国だ」

ケインの耳にしたことのない国名であった。

「キシルの民の国。我々の住む人間界の、裏側だ」

「裏側……？」

ケインには、マスター・ソードを手に入れた時のことを、彷彿とさせる。人間界で

はない、別の世界の存在を――！

ヴァルドリユーズが『治療』を終えると、ケインは、身体を起こした。

「サンキュー、ヴァル。助かったよ！」

もうどこにも痛みはなかった。腕をぐるぐる回してから、ヴァルドリユーズの
碧い瞳を見る。彼には、ヴァルドリユーズの真意は、全く見えて来なかった。

そして、またしても、予想外の言葉が、ヴァルドリユーズの口から発せられた。

「『或る晴れた日に吟遊詩人が見える』」

「？」

「マリスの暗号を使ったのは、まんざらウソではない」

「……ああ、何かの手掛かりを見つけたっていう、あの暗号のことか」

「ここに、『黒の魔石――ダーク・メテオ』がある」

「なんだって！？」

ケインは、しばらく彼をまじまじと見つめていた。それから、左手で、マスター・
ソードの柄を触る。

「……そうだな。あの大魔道士だって知ってたんだもん。……
ヴァルも知ってた
のか、マスター・ソードの秘密を」

ヴァルドリユーズは、ゆっくりと頷いた。

「マスター・ソード――お前の持つドラゴン・マスター・ソードは、

伝説の剣のうち

のひとつだと言われているが、具体的にどのような能力を持つのかは、はっきりとは

知られていない。その剣を手にした者にしか伝承されないからだ。

剣を手にする者は、純粋に正義を貫き、悪を倒すことを目的とする以外は認められ

ない――私が知り得ることは、そのくらいだ。おそらく、他の魔道士たちも」

ケインは、立ち上がった。

「確かに、そう聞くよな。だから、この剣を手に入れた時、俺は本当に正義の使者な

んだと、さすがに誇らしかった。

だけど、今は、このままでは、あまりに魔力の高いものには通用しない……」

ケインは、マスター・ソードを手に入れた後のことを、思い起す。彼としては、

ちよつとせつない思い出もまつわるため、普段はバスター・ブレードを使い、マスター

・ソードは予備として使うようになっていた。

最近では、アストーレで護衛の仕事をしていたのもあり、城の中では物騒に見られる

ため、バスター・ブレードはヴァルドリューズに預け、マスター・ソードの方を主に

使うようにはなったが、それは、実は、二年振りのことなのであった。

「それにしても、剣の本当の力を引き出す三つの魔石のうちのひとつ、黒の魔石

『ダーク・メテオ』が、こんなところに……!?　もしかして、あの暗号を使って、

ヴァルが呼び寄せたかったのは、マリスというよりも、……むしろ、

俺の方だったの

か……？ 俺のために……？」

ヴァルドリューズは、それには応えず、ずっと、前に進み出た。

「こちらだ」

その肩に、ぽつとミュミュが現れ、後ろ向きに座り、ケインと目が合った。

「ミュミュ、無事だったか……！」

ほっとした笑顔のケインに、ミュミュも笑ってみせた。

「マリスは無事だよ。ミュミュがダミアスのおじちゃんのところへ連れてって、アス

トーレでひなんしてるようになって、お兄ちゃんからの伝言伝えとい
たから」

ミュミュは、にっこり笑った。

「それにしても、マスター・ソードと魔石が合わさるところを見られるなんて、ミュ

ミュ、ツイてる〜！ ミュミュがケインと出会った時は、ケインが
力を使い切っちゃ

ってからだったんだもん」

「……あーっ、ミュミュだろ？ 魔石のことヴァルに教えたの」

ミュミュは、ぱたたと飛んで、ヴァルドリューズの反対側の肩
に移った。

「いーじゃん！ ヴァルのお兄ちゃんはいいい人なんだから！」

「なんだよ、それ？」

「心配するな。他言はしない。例え、マリスにも」

ケインは、意外な顔で、ヴァルドリューズの背を見つめた。

「むしろ、魔石の力を取り入れるところは、マリスに知られてはい
けない——厳密に

言えば、『マリスの守護神』には？？」

またしても、意外なことを耳にしたケインは、尋ねずにはいられ
なかった。

「……なんで、あの獣神に……？」

「奴だけではない。他の誰にも、その秘密を知られてはいけ
ないだろう？」

知っているのは、自然界の生き物と、それと渡り合える妖精……く
らいであろう」

「……」

ケインは、黙って付いていった。

ヴァルドリューズのことは、初めて見た時から、黒魔法の使い手
だとわかったが、

どうも他の魔道士とは違う波動のようなものも感じられる。

（ミュミュが、これだけ懐いているのも珍しい。黒魔法は、怖がっ
てあまり近付か
ないのに……）

魔道士との戦闘で見せた冷酷な面とは打って変わり、もしかする
と、自然の中に

いてこそ、本来の彼の素の部分の滲み出ているのではないかと、ケ
インは、そんな

気がしてならなかった。

或る晴れた日に吟遊詩人が見える2

ヴァルドリューズは、一本のある大きな木の前で立ち止まった。

「あそこだ」

彼の指した先には、彼らの身長の数倍ほどもある高さに出来た、トリの巣であった。

「えっ……、まさか、あの巣の中に、魔石が……!？」

拍子抜けしたケインは、呆然と、素を見つめる。

あの中に、二年前に分散してしまったマスター・ソードの力の一部があるというのだろうか？

そこへ、ばさっばさっとトリの羽ばたきが聞こえたと思うと、大きな羽を広げ、巣

に着地した、腹の下の方に灰色の縞の入った、目の鋭いトリであった！

「あれは、オオハヤブサじゃないか！」

「大丈夫！ ミュミュが取ってきてあげる」

「よせよ、危ないぞ！」

「大丈夫、大丈夫！ だって、妖精は何でも知ってるんだよー。ミュミュは、特に

妖精の中でも、よくものを知ってる方なんだから。だって、ミュミュ、いつもいい子

だもん。だから、ハヤブサと仲良くする方法も知ってるんだもん」

物知りといい子は別物であるが、日頃の旺盛な好奇心が功を奏していると言いたげな素振りであった。

「自然界の生き物は、みんな妖精と仲がいいんだよ」

そう笑ってみせると、ミュミュは、そのまま上昇していき、トリの巣から少し離れ

た枝の部分へ跨がって座った。

ハヤブサは、小さな木の枝や葉、泥などで固められた、自分より一回り大きな家の

外側に止まって、じっとミュミュを見ていた。

「ハロー、トリさん！ 美少女妖精のミュミュです！ ご機嫌いかが？」

ずっ……

ケインは、スベっていた……。

ハヤブサは、怖い目付きのまま、ミュミュを見ている。

明らかに、トリの方がミュミュよりも大きかったにもかかわらず、彼女は恐れ気もなく、にこやかに続けた。

「そこにある黒い石を、ミュミュに出来ないかしら？ 貸してくれるだけでもいいんだけど」

トリは、巢にとまったまま、黙ってミュミュを見下ろしている。

「あの男の子が持つてる剣は、あの『マスター・ソード』なのよ。マスター・ソード

は、『黒の魔石』ほか三点セットで、やっと使い物になることは、トリさんも知って

るでしょう？ そこにある黒い石が、その魔石のひとつなの。

ねっ？ お願い！ それを、こっちに渡してくれない？」

トリは、何も反応していない。

「そうなの！？ ありがとう！ うわー、嬉しい！」

ミュミュが途端に喜んで、ケインたちを見下ろし、手を振った。

「ケイン、ヴァルのお兄ちゃん！ 『こうしようせいりつ』したよー！」

トリさんが、石を持っていいって！」

ケインは、あんぐり口を開けてから、ヴァルドリューズを見た。

「あのハヤブサ、ホントに話通じてるのか？」

「……」

ケインに向けたヴァルドリューズの顔も、どこことなく不可解そうであった。

「じゃあ、お言葉に甘えて、さっそくもらっていくよー」

ミュミュが、そろそろと枝を伝って、巣まで這っていく。

トリは、黙ってそれを見つめる。

「あ、あった、あった！ よいしょっと」

ミュミュは、巣の中に手を伸ばして、掴んだものを持ち上げようとした。

「グギャーッ！」

突然、オオハヤブサは鳴き声を上げると、翼をばたばた羽ばたかせ、ミュミュの

身体を鋭いくちばしでつつ突き始めたのだった！

「きゃーっ！」

ミュミュが巣の中に落っこちた。

交渉決裂は、一目瞭然だった。

「やめてーっ！ なにすんのよー！ あんた、くれるって言ったじゃないのー！」

（俺には、とてもそうは見えなかったが……）

ミュミュは、ハヤブサにつつ突かれ、ぎゃあぎゃあ騒いだ。

「こらー！ ケイン！ あんたのために、ミュミュはこんなひどい目に合ってるんだ

からねー！ 早く助けてよー！」

ミュミュが巣から顔だけ出して叫ぶが、トリに顔を踏んづけられて、またぎゃあ

ぎゃあ罵りながら格闘する。

「まったく、しょうがないなー。ちょっと待ってろよ」

ケインは、さっさと木に登り始めた。

しかし、オオハヤブサは、自分よりも身体の大きいものをも襲う

習性がある。場合

によっては、ヒトにも襲いかかるとも聞く。

（かといって、剣で斬るってのは、ドーブツ愛護協会に怒られそうだし……）

ケインがハヤブサの巣に着いたのは、すぐであった。

目でも疲れたら大変だと、彼は頭を低くし、手探りで、巣の中を探った。

「ギエーッ！」

「いててて！」

トリは新たな侵入者をも容赦しなかった。

彼は、手を突かれながらもバタバタ振り、トリを追い払おうとしたが、トリは、

一旦羽ばたいて浮くと、彼の腕にワシッと鋭い足の爪をくい込ませて止まり、頭を

つんつん突き始める。

「グワッ！ グワッ！」

「いていていて！」

ケインは、それでも、懸命に巣の中を探る。

何か触れたものを夢中で掴むが、石にしては生温かく、柔らかい。

「キヤーッ！ ケインのエッチ！ 放してよー！」

「うわー！ ごめん！」

掴んだのがミュミュだとわかると、慌てて放り投げ、その下にあった、拳よりも

大きな固いものを掴んだ。

「あった……！」

トリに翼でさばさ殴られ、くちばしでつつ突かれ、顔を足の爪で引っ搔かれな

がらも、黒い石を確認すると、ケインは木から飛び降りた。

「クワッ！」

オオハヤブサは、一瞬バランスを崩したが、すぐに飛び立って巣

まで戻り、相変わ

らず鋭い目を人間と妖精に注いでいた。

「あーくん、いたいよー！」

ミュミュは、ヴァルドリューズの掌の上で、えんえん泣いていた。

（結局、お前は、ハヤブサを怒らせただけ……？）

ちらっとミュミュを、しょうもなさそうに見てから、ケインは、手にした石を見つめた。

黒曜石のように鋭く、きらきらと輝く尖った塊——間違いなく、

『黒の魔石——

ダーク・メテオ』である！

その形状は、人間界の石と似ているようで違う。以前、彼が見たものと、なんら変

わりはなかった！

嬉しさをこらえきれない表情で、ケインはヴァルドリューズを見上げた。

彼は、静かな目をケインに向けて返し、ゆっくり頷いた。

ケインが、魔石を地面に、そうっと置く。

初めてマスター・ソードを手にした時と、同じように、この石の力を、剣に吹き込むのだ。

ミュミュも、泣き声をとめ、じっと見入っていた。

ケインは、目を閉じ、精神を剣に集中させると、頭の中には、いつかの呪文が再び甦る。

彼の心臓は、その時と同じように、高く鳴っていた！

『この世のすべての闇の源^{もと}

ダーク・ドラゴンの意志よ。

我が偉大なる神の剣に、

共にすべてを解き放たん！
』

深く青い瞳をうつすらと開くと、黒い魔石は、ぼおつと黒い炎に包まれた！

まるで、マスター・ソードの戦いで現れる黒い竜と同じ形に、揺らめいている！

そこへ、ケインは手にした剣を打ち降ろした！

と同時に、強い風が、石から吹き荒れ、彼に向かう――

ギユウウウウンン――！

手に、彼の全身に伝わる感触は、やはり同じだと確信する！

だが、なんという凄まじい力か！

ケインは、自分の中に、何か邪な、邪悪な念が入り込んでくるのを感じた！

ここで負けると、彼の意識は闇の力に乗っ取られ、マスター・ソードも、ただの石

となり、次の正義の勇者が現れるまで、再び眠りについてしまう。

強靱な精神力で、ダーク・ドラゴンの力を抑えつけなければなら
ないのだった！

……！

かなり長い時間が経ったように思えた後、それまで沸き起こっていた暴風が止んだ。

黒の魔石も消えている。

ケインは、ゆっくりと、剣を翳してみた。

うつすらと刃が黒く光り、剣身の中央の平らな部分には、それまでにはなかった

文字が刻まれていた！

魔法の呪文で使われているルーナ文字とも違う、一見、装飾にも思える文字であった。

剣の中で、黒い竜がうねっているような、明らかに、『この剣は生きている！』と

いう感覚が、彼の全身に伝わっていく……！

そして、彼自身にも、何か大きな力が加わったような、腕に新たな力が漲みなぎ

ってくるような感覚があった！

（これだ……！ この感覚だ……！ ダーク・ドラゴンが、来てくれたんだ……！）

常に荒ぶったような、エネルギーを持て余しているような波動を直に感じながら、

ケインの剣を持つ手は、懐かしさに打ち震えていたのだった――！

「ぷっ！」

ミュミュが吹き出しかけ、慌てて口を押さえた。ケインが、横目で見る。

「おい、こんなカッコいい場面で、なんてことするんだ？」

「ごめ〜ん！ だあ〜って、ケインたら、頭ぼさぼさで、顔もキズだらけのまんま

キメてんだもーん！」

とうとうこらえ切れなくなった彼女は、腹を抱えてゲラゲラ笑い出した。

せっかく、感動を噛み締めていたケインは、完璧に気分をぶち壊されていた。

その様子に、ヴァルドリュースも、目元をほころばせていたが、誰も気付いてはいなかった。

その晩は、そのままキシールで野宿し、明け方から、空間を通ってフェルディナン

ドに戻った時、彼らは再び紅通りに現れた。

ギユウウウウウン……！

もう魔道士とは言えない魔物たちを、新たな力に任せて、切り裂いていく。

蒼い大魔道士は、いつの間にかいなくなっていた。

ケインとヴァルドリューズは、残った北地区を攻めていた。

ともかく、三つの魔石のうち、最初にダーク・メテオが見付かったのは、ケインにとっても皆にとても好都合だった。

そこに住む化け物じみた魔道士たちの使う炎の術、電光などの黒魔法は、すべて

マスター・ソードが吸収してしまい、その度に、まるで成長でもしているように、

剣はますます勢いを増し、ケインの意志と一体化し、振るい易く馴染んでいくのだった。

もともと黒魔法とは、ダーク・ドラゴンの力によるところが大きいので、所詮は、

ヒトの使う程度の力が本家本元に効くはずもなく、剣の中のドラゴンは、かえって生き生きとしてくるように、ケインには感じられた。

一旦制御してしまえば、抑えが効かなくなることもなく、ケインの方は、剣の

ダーク・ドラゴンにエサを与えてやるような感覚でいればいいのだった。

そこで、ふと、彼は思った。

（これって、マリスがサンダガーを餌付けしてるのと……違う！

それとは、絶対に
違うんだあ！」

「まあまあ、お疲れさまでした。どうぞ、こちらでお寛ぎ下さい」
北地区を三分の一ほど制圧し、夕方紅通りのヴァルの家に戻る。

「もうすぐお食事が出来ますからね」

木の魔道士バヤジッドは、いそいそとキッチンで動き回っていた。
「なんだか、いい匂いがするな。ああ、腹減ったー！」

ケインは、ドサツとソファにもたれた。

ミュミュも、さっそくローテーブルの真ん中に、ケインと同じよ
うに足を投げ出して座った。

ヴァルドリューズは、机に向かい、書き物をしている。

「お帰りでしたか」

ドアが開くと、ダミアスが現れた。

「ダミアスさん！」

ケインは、跳ね起きた。

一日二日であつたが、久しく会っていなかったかのように感じる。
ダミアスは、微笑みながら、部屋に入った。

「ダミアスさん、ここへ来る時は大丈夫でしたか!? 蒼い大魔道

士は、この通り

には、もういないみたいでしたが……?」

ダミアスは、微笑んだまま、頷いてみせた。

「私は、あの家から少し離れたところで、ヴァルドリューズ殿の指
示があるまで、

お待ちしていました。ミュミュから彼の伝言を聞き、マリス殿たち
をアストーレ

までお送りし、こちらが安全なのがわかって、今参ったのです」

「じゃあ、マリスも、クレア、カイルも、皆、無事なんですね?」

「ええ。皆、また元のお仕事に就いてらっしゃいます」

「それを聞いて、やっと安心したよ！」

ケインは嬉しそうに笑うと、ソファの隣を空け、ダミアスがそこへ腰掛けた。

「……あいつ、……あの大魔道士、ゴールドダヌスと敵対すると言っていた……。」

それに、『我々』と言っていたから、他にも仲間がいるようだった。……俺のことは、

単に邪魔だから消そうとしてるんだろうけど、……あいつらは、マリスをどうしようというんだ？」

ケインは、テーブルに視線を落とした。

「確かに、奴等は、マリスを手に入れたがっている。『サンダガー』を守護神に持つ

者の存在を知った時、さまざまな奴等が彼女に目を付け始めた。そうなることを予想

して、ゴールドダヌス殿は、内密に研究をしていたのだ。

お前が出逢ったグスタフなどは、単に彼の研究を邪魔しようとしていたに過ぎない

が、他の連中は、彼女を生かして捕え、なんとかして『サンダガー』を利用し、何かをしでかそうというつもりだろう。もちろん、己の欲望を究めるために」

見向きもせず、書き物を続けながらヴァルドリューズは淡々と語る。

「だから、あなた方二人が揃わないと出来ない召喚技に、ゴールドダヌス殿はお考えになったのでしょうか」

ダミアスが、口添えした。

「あのお嬢さんは、本当に珍しい守護神をお持ちですよ。私は、六二三年生きてお

りますが、『サンダガー』を守護神に持つお方とは、初めてお目にかりました。

しかも、女性の方とは。

ですが、蒼い大魔道士は、どうやら、『サンダガー』の他に、ベアトリクス王国に

も目を付けていらっしやるようで。……さあ、どうぞ。食事が出来ましたよ」

バヤジッドが、豪勢な食事や木の実酒を運ぶ。魔道士用にアルコール度の低いカリン酒もある。

「ああ、うまいっ！」

仔ウシの肉を煮込んだものを一口食べたケインは、思わず感動していた！

噛むまでもなく、肉が口の中で、ほろっとくずれ、見た目は色が悪いが、かかっていた黄色いソースが、コクがあって香りも高く、実に品のいい味だったのだ。

「お気に召されましたか？　これは、私の得意料理でもありまして、『仔ウシのカリー・ボルボルソース煮』というんです。お替わりもたくさんございますよ」

バヤジッドは、何重にも聞こえる声で、嬉しそうに言った。

「それ、ちようだい！」

ミュミュが、今までかじっていた野菜の漬け物を放り出し、テーブルの上で立ち上がって指を指す。

「こらー、ミュミュ、お行儀悪いぞ」

彼女はケインの言うことなど聞こえなかったかのように、トコトコ歩いていくと、

彼の器に、いきなり両手を突っ込んで、肉を取り出した。

そして、迷うことなく、そのまま頼張ったのだった！

「おいしい！　おいしい！」

「そ、そう……それは、良かったな……」

ミュミュは、喜んで、次々と肉をあさっていた。

（俺の肉……）

ケインは、皿の残りを食べる気がしなかった。

「そう言えば、ドウグ殿は、どうかされましたか？」

やさしいダミアスは、彼らがとうに忘れていたカエル魔道士のことを思い出し、

木の魔道士に尋ねた。

「ああ、オオタキバエを追っかけて、どっかにいっちゃいましたよ。あいつの好物

みたいでした。出て行った途端に、奴が入って来られないよう、特殊な結界を張っ

てやりましたから、きっとその辺でうろうろしているか、ハエを食べ終わったらすべ

てを忘れてしまい、自分の家にも戻ったかも知れませんね」

バヤジッドは、さらっと言うと、スロウ・ティーを一口啜った。

数日後、既に紅通りの一件は片が付き、後は、フェルディナンドの宮廷での報告と、

新たな法律、取り締まりなどの対策の話し合いが終わるのを待つばかりとなっていた。

ヴァルドリューズとダミアスは、毎日のように宮廷に通い、夕方になると、バヤジッドの家に戻ってきた。

ケインの方は、もうすることはなくなっていたが、二人の魔道士の用が済んでから

一緒に帰ることになっていたので、彼らのいない昼間のうちは、隣町まで行ってプラ

ブラしていたり、景色のいい山の上で、のんびりしていたりして、時間を潰していた。

宮廷での、傾向と対策の会議もやっと目処^{めど}がついたという時、その日はバヤ

ジッドの家で、晩酌が行われた。

彼の用意してくれた魔道士たちの好む酒の1つ、悪酔いしないという極上のカリン

酒を、ケインは杯に注がれ、口に含んだ。

カリン酒は、一口飲むと、スーツとした喉越しで、あまりアルコールを飲んでい

感じがしなかった。これでは、かえって飲み過ぎてしまうのではないかと思えるが、

ケインの経験する傭兵仲間との、わいわいがやがやした飲み会とは随分雰囲気の違い、シーンとした中で、しみじみと酒を酌み交わしているのが、がぶがぶ飲んで悪酔いする者はいなかった。

ケインは、魔道士たちの中で、ひとりでそわそわし、なんだか落ち着かず、思わず

ミュミュを見してみるが、いつも騒がしい彼女も、今日はおとなしい。

彼の杯から一口酒を啜っただけで、後はテーブルの上に座ったまま、じっとして

いた。

普段はよく喋るバヤジッドも、こんな時に限り、黙っている。

沈黙に耐えきれず、何か喋ろうとケインが思った瞬間、ヴァルドリューズが口火を

切った。

「明日の夜には、アストーレに帰れるだろう」

「そうかあ、やっとアストーレに戻れるのかあ。……といっても、俺は、まだ二週間

くらいしか、ここにいないんだっけ？」

ケインは、大袈裟に明るい声を出したのだが、それを受けて続いでくれる者はなく、

話はそこで途切れてしまった。

「アストーレに戻れたら、今度はどちらへ？」

しばらくの沈黙の後、ダミアスがヴァルドリューズに尋ねる。

「おそらく、西の方角へ行くだろう」

それだけ応えて、ヴァルドリューズは杯に口をつけた。

「……もう行っちゃうんですか。淋しくなりますね……」

ぽつんと、バヤジッドが呟く。

ケインは、この魔道士の口数が少なかったわけがわかった。

ふと思いついたように、ダミアスがケインに言った。

「そう言えば、先日、アストーレに戻った時に知ったのですが、アイリス王女殿下に

ご結婚を申し込まれた方がいらしたそうです。その噂を聞きつけて、デロスとマスカ

ーナの王子殿下方も、またご訪問にいらっしゃるのだとか。そのため、宮廷舞踏会が

開かれることになったのですが、それが、ちょうど明日の夜なので

す」

「へー、そうなんですか。……にしても、また舞踏会か……」

ダミアスは、続けた。

「ですが、当の王女殿下は、なんだかこのところお加減がよろしくないらしく、ふさ

ぎ込んでいらっしゃるようで。服飾デザイナーのお二方がいらした時だけ、お部屋か

ら出てこられるのだとか。クレア殿がフェルディナンドから戻られてからは、いくらかお元氣になられたようですが、相変わらず、他の者とは接することなく、お部屋に

こもっておられるので、陛下も大変ご心配なさっています」

「それは、どうなさったのでしょうか。王女殿下は、白い騎士に憧れていらしたから、

もしかしたら、その王子殿下方とのご婚約は、今は考えられないのかも知れませんね。

そのご様子じゃ、舞踏会にだって出られるかどうか……」

「陛下も、そうお考えになって、白い騎士にも、舞踏会に参加して欲しいと、お頼み

になっていらっしやいました」

「それで、マリスはなんて？ あいつ、長い間、城にいらるとアレルギーが出るなんて

言ってたくらいだから、ま、どうせ断ったに違いないんだろーけど」ケインがくすつと笑いをもらす。

「それが、快く、お引き受けしてらっしやいました」

「なっ、なんで！？ 引き受けたってことは、舞踏会で王女殿下と踊るってことだろ……？」

王女は、白い騎士マリユスが女だとは知らない。ますますマリユスにのめり込んで

いくことになるのでは……？ そう心配したケインには、異常な現象に思えた。

ダミアスは頷いてから、歯切れの悪い口調で続ける。

「……マリス殿がおっしゃるには、……殿下のことよりも、以前から、ご自分が、

どれだけ女性を惹き付けられるか……お試しになってみたかった、のだとか……」

「……なーに言ってるんだか、あいつは。やっぱり変わってるな。クレアは？ 止めな

かったのか？」

「殿下が塞いでおられるのを、クレア殿も気になさり、マリス殿が殿下と踊り、それ

によって、殿下のお気持ちが少しでも晴れるようならば、……その方がいいと」

「……マジかよ……」

ケインは、頭がくらくらするような気がした。

「カ、カイルは、なんて？」

なけなしの期待を込めて聞くが、ダミアスは、ますます困ったような表情になった。

「ご自分も……と、マリス殿と、どちらがより多く女性を寄せ付けられるかと、なんとなく、ライバル心を燃やしておられるようでした……」

沈黙が流れた。

（……みんな、どうかしてる！ 俺も、白い騎士が女だって最初にバラさなかったのは悪かったけど、マリスは所詮女なんだぞ！ 姫とくつつけるようなマネして、どーする！？ ……だいたい、なんでカイルまで張り切ってた？ オマエはただの警備兵だろーが）

ケインは、異常な事態の不毛な未来に、頭が痛くなった。

翌日の夕方、いよいよアストーレに戻る時がきた。

「これで、みなさん、帰られてしまうんですね。ああ、なんて淋しい！ 私のこと

は、忘れないで下さいね。またどこかでお会いできるといいですね」

「おじいちゃん！」

「おお、お嬢ちゃんも、元気だね」

ミュミュが、わあわあ泣いて、木の魔道士バヤジッドに飛びついた。

（おじいちゃん……？ ま、まあ、年齢からすると、そうか）
ケインは、バヤジッドとミュミュを見守る。

「あの、よかったら、これ、私からのお饞別なんですけど……」
帰りがけに、バヤジッドが木でできた丸い形のペンダントを、ケインに渡した。

それは、ロケットになっていて、中には、彼の肖像画が入っていた。

「これは……？」

「それを開けると、私といつでも交信できます」

「……は、はあ。それは、どうも……」

既に、魔道士たちの厄介な結界はなくなっている。

別れを惜しんだ後、バヤジッドの家から直で、ダミアスが彼らをアストーレ城へと運ぶ。

フェルディナンドの不思議な世界から、あっという間に去って行ったのだった。

王女と白い騎士と王子

ケインたちが、フェルデインランドでの仕事を終える少し前、カイルとクレアが、

マリスの宿を訪れた。

「マリス、宮廷にダミアスさんから手紙が届いたの！ ケインもミユミユも、ヴァルドリューズさんも皆無事だそうよ！」

マリスの部屋へ入るなり、クレアは紅潮した顔で、握りしめていた手紙を見せた。

白い甲冑姿のマリスは、皺になった羊皮紙を広げ、文字を目で追った。

（……ケインも、ヴァルも、無事だった……！）

はーっと全身の力が抜けたのか、ベッドに座り込む。

「……良かった……！ あの蒼い大魔道士を前にして、……よく無事で……！」

マリスは、放心したように呟いた。

「それと、インカの香、安く売ってたところ見つけたから、買って置いてやったぜ」

カイルが、茶色い布袋を取り出し、マリスに渡す。

「カイル……いつもケチなあなたが、こんなにたくさん……！」

「おっと！ タダでやるとは言っていないぜ？ 五〇〇〇リブルだ。半額なんだぜ？」

カイルが、ちゅちゅちゅと舌を鳴らすと、マリスが、にっと笑った。

「それじゃあ、あたしの知ってる店の方が安いから、そっちで買うことにするわ」

カイルは、ピタッと笑いを止めると、すぐににやっとした笑いに変わった。

「さすが、マリスは騙せねえな。冗談だよ、ホントは二五〇〇リブルだったんだ」

「まあ！ 仲間相手にぼったくるなんて……！」

クレアが、手を腰に当てて怒った。カイルは、ヘラヘラと逃げ腰であった。

マリスは、カイルに代金を払い、しばらく三人で話した後、二人は退散した。

帰り際に、クレアが言っていた。

「マリス、こんなことあなたに頼むのは、おかしいってわかってるんだけど……王女

様のお話し相手にでも、来てくれないかしら？ たまにでいいのよ。

私には、心の内

を、お話していただけないの」

「どういうこと？」

「……あの、……私が、思うには……ここところ、アイリス様が塞いでいらっしや

るのは、……もしかしたら、……恋の病……なのかも知れない、と思っ……」

マリスは、目を丸くした。

クレアは、カイルに聞こえなかったかと振り返るが、彼は、階段を降りているところ

ろで、クレアは、ほっとしたように、マリスの顔を見直した。

「姫様は、白い騎士、つまり、男性だと思っ……あなたに憧れるから、あなたと

お話し出来たら、悩みが解決するんじゃないかと思うの。ヴァルドリューズさんと

ケインが戻ってくるまででいいから、このまま男性の振りをして、

姫様のご機嫌を

取って欲しいの。でないと、……あの新しく婚約者候補として現れた、あの方が、

早く姫様に会わせろ、自分が慰めるからって、うるさいのよ」

「ああ、なんだか、強引な王子が登場したんですってね」

クレアは、真面目な表情で、マリスの手を握った。

「ねえ、マリス、お願いよ。あの王子様が姫様を慰めることになったら、余計に姫様

は塞いでしまうと思うの。彼には、舞踏会が開かれるまでは、お会い出来ないって、

お伝えしてるんだけど。……それに、私から見ても、こう言っただけ、あの

王子殿下よりは、マリスの方が、……アイリス様は好きだと思っの。……こんな

お願い、異常だとわかってるけど……アイリス様が痛ましくて……」マリスは、どうしたものかと、考えていたが、

「わかったわ。明日にでも、あなたたちのところへ行くわ」

そうして、安心したクレアは、宿を後にし、城の女官室へと戻っていったのだった。

マリスは、インカの香の炊かれた部屋の、ベッドの中で、なかなか眠りにつけないでいた。

ヴァルドリューズとケインが無事であったのが、何よりも嬉しかった。

それは、ヴァルドリューズが、あの大魔道士を撒くことの出来る實力を身に付け、ケインも、あのような強大な敵を前にして、恐れず向かう勇気があるという証明でもあるのだった。

旅をしていく上で、この上なく頼りになることが、実感として湧いていた。

（ケインは、やっぱり思った通り、伝説の戦士に成り得る人なんだ

わ。あの大魔道士

ですら、その存在を知って、敵と見なしたということは、それほどの実力だと認めて

いるということ。……彼なら、もしかしたら、あたしがベアトリク

スに戻った時も、

力を貸してくれて……)

マリスは、寝返りを打った。

(……いいえ、それは、あまりにも都合が良過ぎるわ。それにしても、あんなに、

あたしのことを親身になって、守ろうとしてくれた人なんて、滅多にいなかった。

蒼い大魔道士にまで、ひるまずに……！ 普段は、そんなに凄い人には見えないのにね……)

マリスは、ケインの実年齢よりも幼い顔立ちを思い起こし、くすっと笑いを漏らした。

「まあ……！ マリユス様……！」

翌日、アイリスの部屋に、マリユスは招かれていた。白い甲冑姿である。

アイリスは呆然と立ち尽くし、次第に頬を染め、か細い手は、かすかに震え出した。

マリス扮するマリユスは、入室すると、ソファへ促され、広いソファの端と端に、アイリスと座った。

気を利かせたのか、クレアが扉のない隣の部屋へと移った。侍女の控えの間である。

アイリスは、震える手で、紅茶のカップを口へ運び、ちらちらと

マリユスを気にしていた。

(……やはり、なんてお綺麗な方……！)

見られていることを気にも留めていないマリユスは、一口紅茶を啜り、カップを

置いてから、アイリスに向き直った。

アイリスは、びっくりしたように見つめたまま、硬直した。

「最近、お加減がすぐれないようですね」

マリスは、普段よりも低いトーンを心掛け、アイリスを気遣うような、優しい気な

視線を送る。

「あっ、はいっ、いえ、あのっ……」

ドギマギしている王女に、マリスは、再び、やさしく語りかける。

「もし、私でよろしければ、姫の悩みをお聞かせください」

「ええっ！？ わたくしの……悩みを……！？」

余計に、慌てふためいていた王女であったが、いくらか冷静さを取り戻すと、もう

一度紅茶を一口飲んでから、切り出した。

「……そうですね。マリユス様になら、わたくし……お話し出来ますわ……！」

実は、……あの例のモンスコール王国の王子殿下が、結婚の申し込みに見えた時から、……いいえ、見えると聞いて、初めて気付いたのかも知れません。……わたくし、

……本当は、……結婚など、まだ、したくはないのだと」

マリスは、暖かい眼差しのまま、頷いた。

それを見て、安心したように、王女は続けた。

話し始めてしまえば、あとは楽に言葉が出て来るものだった。

「その王子殿下も、レイピアの名手と有名でらして、……デロスのカール王子も再び

いらして、マスカーナのサンスエラ王子も……。わたくし、以前、

頼もしいお方が

良いと、お姉様やお父様には打ち明けましたが……、それは、あのように、剣の強さ

を自慢なさっている方とは違うと、……わかりましたの。

もちろん、ケイン様や、マリユス様には、危ないところを助けて頂いて、悪者たち

を倒すお力があったからこそ、わたくしはケガもなく、守られ、今日もこうして無事

で暮らすことが出来るのですわ。

武力も必要だと、頭ではわかっています。ですが、……わたくしは……」

「剣を振り翳して強さを自慢する輩よりも、側でじっと見守ってくれるような……」

ケインのような男を、頼もしいと思われたのでしょうか？」

アイリスは、そのマリユスの言葉に驚いて、顔を上げた。

みるみる、その茶色の瞳はぬれたように輝き出し、頬を淡いピンク色に染めた。

（あらら、これは当たりだったわね……）

マリスは、心の中で苦笑するが、それを面には出さなかった。

「あ、あのっ、わたくし……、実を言うと、……あなた様にも……憧れておりました……！ ……男の方なのに、信じられないほどお美しくて、お強くて……！」

わたくし、ケイン様とマリユス様が、お友達と知って、こんなに嬉しいことはなくて

……あなた方お二人に守って頂けたら……と、夢見ていたくらいなのです。

でも、現実には、それは、わたくしのワガママでしかなくて……。

そして、気付いてしまったのです。

わたくしが、本当に、心から頼りにしているのは……いつも側にいて欲しいと、

思っているのは……」

アイリス王女は、祈るように手を組み、潤んだ瞳でマリユスを見ると、目を伏せた。

（この子は、彼を必要としているのね……）

マリスは、マリユスとして、アイリスの手を、外側から包み込むようにして握った。

アイリスは、ハッとしたが、嫌がらなかった。

「私があなたを守りましょう。少なくとも、ケインが戻る時まで」

「……すみません。……わたくし、本当に……自分でも、なんて図々しいと、わかつ

ていながら……このような気持ちは、初めてで……自分でも……どうしたらいいか、

わからなくて……！」

王女は、啜り泣いていた。

その震える小さな肩を、マリユスは抱き寄せた。

その夜、舞踏会が開催された。マリユスが王女の部屋を訪れてからずっと、『彼は護衛を努めていた。

以前、五人の王子たちが訪れた舞踏会で、アイリスの誘拐事件があったことで、

今度もまた何か起きるのではないかと、トラウマにもなっていた王女には、この上な

く安心出来る護衛であった。

そして、もう一人の、接触を避けたい相手のガードにもなっている。

だが、今夜こそは、モンスコール王子の婚約の申し込みがなされる予定であった。

それは、一曲、ダンスを踊り終わった時に、という筋書きであった。

「おお、ダミアス、ヴァルドリューズ殿、ランドール……！ 大変、ご苦労であった！」

魔道士との対決を終えたフェルディナンド皇国から一変して、きらびやかな宮廷舞

踏会の場合へと、変貌したように思えたケインは、少々面食らっていた。

用意されていた警備服の正装である、紺色に金色の糸の模様の詰め襟の服に着替え

たケインと、いつもの黒いフード付きマントを羽織ったヴァルドリューズとダミアス

が、舞踏会場に出向き、アストーレ王に挨拶を終えたところである。広間には、人が大勢いて、ケインには、誰が誰だかさっぱり区別

がつかなかった。

「遅れましたが、すぐに警備につきますので」

ケインが、急いで職務につこうとすると、国王は笑った。

「まあまあ、今夜くらいはよいぞ。警備の人数は足りておるのだし。そなたは、フェルディナンドで、アリッサの手伝いをしてくれたのじゃから。それに、もうすぐ旅立って

しまうのじゃろう？ 今日、任務などは忘れてくれてよいのだぞ。

ほれ、アズウェル

などは、貴婦人たちから引っぱりだこじやよ」

国王が指差した方では、カイルがケインと同じく正装の警備服に身を包み、長い金髪

を後ろで束ね、貴族の娘たちを侍らせ、杯を持ってペラペラ喋っていた。

（あ、あいつ、ちゃっかり……）

ケインは、苦笑する。

「よう！ ケイン！」

ケインに気が付いたカイルが、人混みをかき分けてやってきた。

長い金髪を後ろ手束ね、いつも巻いている黒いバンダナは外し、豪華な金色の装飾

品のついた紺色の制服姿は、普段軟弱なカイルを多少はキリツとして見せ、他の貴族

の男たちの中でも、目立っていた。

「いいのかよ？ 女の子たち放っておいて。早く済ませろって、俺が睨まれちゃうだろ？」

ケインが、からかうようにカイルを突くと、彼は、まんざらでもなさそうな笑みを浮かべた。

「そうなんだけどさ、ああ、腹減ったー！ なんか食おうぜ！」

カイルは、人混みをいいことに、女たちからますます離れ、今度は食い気に走る。

ケインは、杯に注がれた酒を啜って、チーズをかじった。

「やっぱさあ、俺とお前はカッコいいんだぜ？ ひ弱な貴族の男どもばっか見慣れて

るお姫さんたちから見ればさあ、俺たちなんて身体つきだってがっしりしてるし、顔

だって生き生きしてるわけだしさあ。

だから、ここでも、町娘みたいな発想の姫^こなんかも、出て来るかもよ？ 現に、

俺が、もうすぐアストーレを立つって言ったら、皆残念そうな顔してんだよ。

それから、踊ろう、踊ろうって、引っ張りだこにはされるわ、女同士でバチバチ

火花散らしてんのも出てくるわ、もうめんどくさいったら、ありやしないぜー！」

カイルは、相変わらず、お下品に骨付き肉に噛み付いて、むしり取りムシャムシャ食べていた。

『また戻って来た』——そんな嬉しい感覚が、カイルと語り合うケインに、沸き上がっていったのだった。

いきなり、広間の中心から、女性たちの騒ぎ立てる声が起こった。白い騎士が、ある姫君と踊っていたのだった。

マリユスは、薄いピンク色の広がったドレスの小柄な姫の、か細く白い腕をやさしく取ると、目一杯優しい瞳で見つめ、微笑みかけながら踊っていた。白い男性用の騎士の正装であった。

その姫に嫉妬した女たちが上げた声であった。

それには構わず、マリユスは、時々彼女の耳元に口を寄せて何かを囁いたり、彼女を引き寄せたりすると、ギャラリーの女たちは、ますます騒ぐのだった。

ケインとカイルは目配せして、「よくやるぜ」と、くすくす笑っていた。

（よかった！ マリスも無事だし、普段と変わらないみたいだ）
蒼い大魔道士の登場でも、怯えているようでもなさそうである。実際、自分の目で

確かめて初めて、ケインは、やっと安心出来た気がしたのだった。

早く、自分の無事な姿を見せ、話をしたいと思うのだが、人混みで、マリスには、

なかなか近付けそうにない。

「ああ、ケイン！ お帰りなさい！」

振り向くと、これまた正装の女官服のクレアが、瞳を輝かせていた。

いつかの水色のスリムな、神官服に似た、詰め襟のドレス姿だった。長い黒髪は

アップにしている、耳には小さな真珠をつけている。

ケインには、ごてごてと飾り付けたお椀ドレスの女たちよりも、断然好印象であった。

「クレア……！ よく似合うよ！」

「な？ ケイン、クレアは、やっぱりかわいいよな？ さくで、俺もそろそろ、マリ
スと勝負してこようかな」

カイルは口を拭いて、今度は、別の貴婦人たちの方へ行ってしまった。

「マリスから話を聞いて、心配してたのよ。よかったわ、無事で……！」

「ああ、なんとかな」

クレアは、心からの安堵の表情を見せ、ケインは、笑いながら、片手でガッツポーズをしてみせた。

「ねえ、ケインは踊らないの？ さっきから、あなたのこと見てる姫様たちがいらっしやるわよ」

クレアの言う方を見ると、お椀ドレスの女たちが数人、「キヤーツ」と騒ぎ出す。

ケインはクレアに向き直ると、苦笑した。

「俺は、ダンスは出来ないんだよ。クレアこそ、踊ってくれば？
そう言や、カイル
とは踊ってないの？」

彼女は、首を横に振った。

「あの人は、人のこと、かわいいとかなんとか言ってるけど、そんなの口だけなのよ。」

さっき、他の人にも、すっごく齒の浮いたセリフ言ってたのに、そ

の人とは踊ろうと

しなかったし……適当に遊んでるだけなんだから」

と、呆れたように笑ってから、ふいに真面目な表情になった。

「それより、ケイン、アイリス様が、やっぱりお元気がないのよ。私たちのいない

間に、食事もあり召し上がらなくなってしまったし。私も何度もお話を聞こうと

したのだけど、肝心なことは、いまいちお話してくださらずに……だから、マリス

にも頼んで、聞いてもらったの。唯一、マリウスにだけは、心を開いているみたいで。

ねえ、ケインも話してみてくれない？」

「ああ、わかった。そのマリウスと姫は、まだ踊ってないのか？」

クレアは、首を横に振った。

「あそこのバルコニーで、モンスコールの王子殿下とご一緒にいらっしゃるのだけど、

あの方が、なかなかアイリス様を離そうとなさらずに。あの方が、今回、アイリス

様とのご婚約を希望して、いらした方なのよ」

婚約者候補と一緒になら、自分がわざわざ割り込んで話を聞くことはないじゃないか、

と思う反面、姫の方は、早くマリウスと踊りたいだろうし……などと考えていると、

「お嬢さん、よろしかったら、お相手願えませんか？」

貴族の男が、クレアにダンスを申し込んできた。

クレアは、それどころじゃないような顔を、その男に向けるが、通じない。

「女官とはいえ、あなたはお美しいのですから、どうか他の男性との取り合いにならないうちに、是非、私と踊って頂けませんか？」

微笑みながら、その男は強引にクレアの腕を引っ張った。

クレアは、しぶしぶ付き合うことにして、男と一緒にダンスフロアに歩きかけたが、

ふと、ケインを振り向いた。

「ケイン、姫様をお願い」

ケインもクレアに頷く。

だが、クレアがその男と踊る直前に、ずっと白い影が割り込んだ。マリユスだった。彼は、男と一言二言交わすと、クレアの手を取って踊り始めたのだった。

クレアの方も、気の進まない男から解放されてほっとしたのか、嬉しそうにマリユスを見上げる。

マリスとも、一言でも言葉を交わしたかったケインであったが、クレアに言われた通り、王女のもとへと向かった。

「あの、……わたくし、気分がすぐれないので、お部屋に戻ります」
聞き覚えのある、か細く高い声がした。

「では、私がお部屋まで、お送り致しましょう」
知らない声もする。

「いいえ、結構です」

少しきつい口調で、高い声が答えると、バルコニーから、淡いピンク色のふわふわしたものが、いきなりケインの目の中に飛び込んできた！

「きゃっ！」

ピンク色のドレスに包まれたものは、バルコニーからの数段の段差で躓き

かけた。

倒れる前に駆け出したケインの腕が、受け止める。

その手応えは、以前よりもますます儂く、か弱くなってしまうようだった。

ピンク色のふわりとしたドレスは、彼の足に絡み付いた。

そのドレスと同じ色の唇が、小さく「あっ」と開いた。大きく見開かれたブラウン

の瞳は、驚いたように、じっと、ケインの顔を見つめた。盾に巻かれた栗色の髪も、

彼の記憶の通りであった。

「ただいま戻りました。アイリス王女殿下」

ケインは、慌てて微笑むことを思い出した。王女は、驚いて声も出ず、両手を口に

当て、今にも泣き出しそうな大きな瞳を、彼からしばらく反らさなかった。

「なんだね、きみは？」

明らかに、不機嫌な声を発して、バルコニーから降りてきた者がいた。

その姿を見て、ケインは思わず声を上げそうになったが、なんとか取り繕う。

「アイリス殿下の護衛の者で、ケイン・ランドールと申します」

「ふーん」

彼は、ケインを頭のとっぺんから（といっても、背はケインの方が高かったので、

彼は下から見上げた形ではあるが）足の先までじろじろと眺め回す。

男はちよつと大柄で、顔もぷくつとしていて、中はそれほど整ってはいない。不機

嫌そうな顔は、何も今に始まったことではないようだった。

首の周りに、伸縮自在の、大きな蛇腹の白い襟をつけていて、縞模様のちようちん

袖、腰回りもちようちんかカボチャのようなパンツを履いていて、きらびやかな、

いかにも飾り物の剣を腰に差し、脂肪のついた緩んだ足は、白いタイツで覆われ、

奇妙な先の尖った靴を履いている。

色白で金髪ではあったが、ケインには、『おかしなシロブタ』にしか見えなかったのだった！

「私は、モンスコール王子タペス。アイリス様の婚約者候補である！」

王子は勝ち誇ったように、威張ってみせた。

（これが、噂に聞く、強引な王子……！？）

ケインは、しばらく口がきけなかった。

（こ、こんなみょうちきりんなカッコしたシロブタが、この可愛らしいアイリス様

と……！？ ……他にいなかったんかい！）

王女と王子と傭兵

「私がモンスコール第一王子タペスだとわかったのなら、キミ、アイリス殿を離したま

え。私は、彼女の婚約者候補なのだぞ？ 私の未来の花嫁となる姫の身体に、たかが

警備兵ごときが触れるなど、無礼じゃないかね！？」

ケインは、アイリスから離れようとするが、彼女は余計にしがみつく。

タペスを受け入れる気がないのは、誰から見ても一目瞭然である。タペス自身は、気が付かないようであったが。

ケインは、震えているアイリスに視線を落としてから、顔を上げた。

「殿下は、お身体の調子が、このところ万全ではないとお聞きします。差し出がまし

いようですが、少しお休みになられてから、またお話の続きをされる方がよいかと思

います」

タペスは、じろじろとケインを見ていたが、そこへ、いつの間にか現れたマスカ

ナのサンスエラ王子が口を挟んできた。

「お加減が、あまりよくないことは、わたくしも聞いておりました。タペス殿、アイ

リス様を独り占めなさりたいお気持ちはわかりますが、少し休ませて差し上げては如

いかが
何ですか？」

王女を気遣うついでに、タペスにも穏やかな笑顔で微笑みかけ、彼の機嫌を損ねな

いように心がけているのが、彼の気持ちのやさしいところである。

「タペス殿は細剣レイピアの名手だとお聞き致しました。私も武道には少々心得が

あるので、いつかお手合わせ願えませんか？」

武人らしい、いかついデロスのカール王子も、後ろ手から現れる。

「いつまでご滞在なさるのですか？ タペス殿、滞在期間中に、一度くらいどうです？」

デロスの王子に肩をぽんと叩かれ、モンスコール王子は顔をこわばらせた。

「さ、ケイン殿。今のうちに、姫をお連れして」

マスカーナ王子はケインに近寄り、小声で言った。

姫の自室に戻り、ケインは、王女に紅茶を注いだ。

アイリスは、ソファに座り、紅茶を啜る。

「宮廷医師には診てもらったのですか？」

「……別に異常はないそうです」

王女は、小さい声で答えた。

「……では、何か悩み事でも、おありなのですか？ クレアも心配していましたよ」

アイリスは、ちらっとケインを見るが、沈んだ顔で、すぐにうつむいてしまった。

「失礼ですが、今回、花婿に立候補なさったというあの方とのことが、気になってい

らっしゃるのでは……？」

アイリスは、微かに頷く。

「……わたくし、……あの方、苦手です」

（……だよな……）

ケインも、心の中で、同情していた。

「では、少しお休みになったら、サロンに戻りましょう。私があ

王子殿下をガード

しておきますから、アイリス様は、ご安心して、マリユスとお踊り下さい」

やさしく微笑んでみせるケインを尻目に、アイリスは、ずっと俯いたままだ。

「……なぜ、皆、わたくしを放っておいて下さらないの？ お父様だって『いそいで

結婚しなくていい』って言われる割には、あのように王子殿下方を招いてしまうし、

マリユス様にはその気はないのに、アストーレの騎士にならないかと勧めてみたり

……」

王女は、顔を手で覆った。

「サンスエラ様もカール様も、いつもわたくしのことを気に掛けて下さるけど、わたくしは、今はどなたともお話したくないのです。今は、とても舞踏会でダンスをする

気分ではないのに……！」

一体、何をそれほどまでに悩んでいるのか、ケインにはまったく見当もつかない。

「皆は、殿下のことを心配しておられるのですよ。殿下に早く今までのように、お元氣になって頂きたいから、どうすれば氣が晴れるのかと、あれこれ考えておいでなのです。少々うっとおしくても、それだけは、わかっておあげにならないと……」

「ケイン様には、わたくしの気持ちなんかわからないわ！」

突然の、アイリスの強い口調に、ケインは驚いて彼女を見た。

王女の瞳からは、大粒の涙が零れ落ちた。

「わたくしの知らない間に、勝手にお姉様の国に行ってしまうし、

わたくしには冷た

いし……どうせ、わたくしは、あなたから見れば、世間知らずの、甘やかされた、

わがままな王女なんだわ！」

「何を言われるんです？ 私がフェルディナンドへ行ったのは、仕事でして……」

「わたくしの護衛は、違うのですか！？」

アイリスは顔を上げて、睨むように彼を見ていた。

ちよつとムツと来たケインは、それを隠せるほど、大人にはなり切れなかった。

「今回のことは、私の連れの一大事だと聞かされて、やむを得ず、直ちにフェルディナンドへ向かったのです。それが、お気に召さなかったというのですか？」

アイリスは、いやいやをするように、首を振った。

「わかっています！ ……どのような事情であれ、あなたがお姉様の国に行って、

お姉様がどれだけ助かったのかも、わかっています。……でも、わたくしは、どう

なるのです？ クレアも行ってしまったって、わたくしは、ずっと、ひとりで淋しかった」

たかが二週間ほどで、いちいち淋しがられても、自分にはどうすることも出来ない、とケインは思った。

「外でお待ちしておりますから、お加減がよくなったら、サロンに戻りましょう」

あまり感情のこもっていない言い方で伝えると、ケインは、扉へ向かった。

これ以上、王女の、わけのわからないわがままには、付き合いきれなかった。

突然、か細い腕が、後ろから巻き付く。

彼の足は、ピタッとその場に止まった。

「……いけないで……」

確かに、そうケインには聞こえた。

「いけないで。……もう、わたくしをひとりにしないで」

ケインは、その場に固まっていた。

王女は、ぎゅっと彼の身体を締め付けた。

「あなたがわからない……。わたくしのことを嫌いではないとおっしゃって、あんな

にやさしく微笑んで下さったかと思えば、……わたくしが白い騎士に憧れても何も動

じず、彼とダンスまでお勧めになるわ。わたくしの結婚の話が出ても、常に冷静に振

る舞っておられる……。

何も言わずにフェルディナンドに行ってしまった時は、あなたが、なんだか、もう

ここには帰ってこない気がして、……ずっと、ずっと気が気でなかった……」

王女の鼓動が、彼の背から伝わってくるような気がする。

「……あなたのお気持ちだけを……それだけを知りたくて……わたくしは、いつも眠

れなかった。クレアが、あなたと旅を続けていたのを知って、あのような綺麗な人が、

ずっと側にいるのだったら、もしかしたら、あなたは彼女を好きなのではないかと、

勝手に気を揉んだり……。

……あなたが、せめて貴族だったら……それか、わたくしが平凡な町娘でもあつ

たならと……いいえ、それよりも、私をもっと美人で、しっかりと
していて、物怖じ

しない性格だったら……身分など気にせず、……あなたに……」

アイリスは、ケインの背に顔を埋めたまま、啜り泣いていた。

「ごめんなさい……わたくしは……」

それ以上は、声にならなかった。

ケインは振り向き、アイリスを、そっと抱きしめた。

(……いつの間にか大変な展開に……? ……どうしょ? でも、俺は……)

ケインの青い瞳は、一瞬、過去に飛ぶ。

王女には、どう声をかけていいかわからず、黙ったままであった。

「……ずっと、こうしていたい……。もう、舞踏会など、どうでもいい……」

アイリスは、今まで凭れかけていた頭を起こし、涙にぬれたその大きな栗色の瞳に、ケインを映した。

「殿下……。俺は……」

「今夜だけは……!」

ケインが何かを告げるのを恐れるかのように、アイリスは打ち消した。

「……今夜だけは、わたくしの身分を、お忘れください。……どうか、お願い……」

アイリスは、涙にぬれた瞳を、静かに閉じていった。

ピンク色に彩られた唇は引き結び、上を向く。

ケインの頬に、カッと赤みが差した。

部屋には、他に誰もいない。例え、ここで一瞬触れ合ったとしても、誰にも気付かれ

れないだろう。ましてや、王女は、それを望んでいる。

誰にもわかりはしない。

なのに、ケインの心は、何かに引っかかっている。

それは、刑罰を恐れてのことなのか、過去の恋愛を思い起こさせるせいであるのか、

今後の戦いを予測して、うつつを抜かしている場合ではないと、自分に警告を発して

いるのか、……はたまた別の何かであるのか、今の彼には、わからなかった。

「……アイリス様、……俺は……」

その時、ケインの耳は、扉の外の、近付いてくる足音をとらえた。「アイリスや、具合はどうかね？」

扉が開くと、アトレキア国王が護衛を連れて現れたのだった。

「ま、まあ、お父様！ ど、どうかなさったの？」

王女は、声をうわずらせて、父親に駆け寄った。

気配を察していたケインは、素早く離れたところに移動し、何食わぬ顔で、紅茶のカップを片付けていた。

（……よかった……！ 見られてない！ 聞かれてない……！）

王女に迫られた時よりも、よほど動揺していて、心臓がバクバク鳴っている。

「そなた、具合の方はどうなのかね？ まだ一度もダンスをしておらんだろう？」

タペス殿もマリユス殿も、皆お待ちじゃぞ」

「えっ？ そ、そうですか？ ……でも、わたくし……」

王女がもじもじして、ケインの方をちらっと見る。ケインは、何気ない顔で、その

まま食器を片付けに、奥の部屋へ引っ込んでいった。

「おお、なんだか顔色も良くなったようじゃな。やはり、少し休んでおいたのが良かったと見える。さあさあ、舞踏会の主役がいなくてどうする。いよ

いよ、これからがメインイベントじゃ。はっはっはっ」

王は笑いながら、王女の背中を押して、部屋から連れ出した。

王女は、父親に強く出られずに、後ろ髪を引かれながらも、連れ

ていかれてしまった。

『身分を忘れて……』とは言われても、結局は、身分をわきまえさせられてしまった気のしたケインであつた。

ケインも後から舞踏会場へ戻ると、王女は、中央でタペス王子と踊っていた。

王女は、彼から顔を背けているのだが、王子の方は気付かずに、ベラベラと話しかけている。

そこへ、デロス国のカール王子が割り込み、王女は、今度は彼と踊る。

マリウスは、相変わらず、他の姫君と和やかに踊っていて、王女にまでは手が回らないようだった。

「先程は、どうも」

ケインの横には、マスカーナ王国王子サンスエラが、やってきていた。ケインが、慌てて挨拶をする。

「殿下は、アイリス様と踊られないのですか？」

王子は力なく笑って答えた。

「あの押しの強いお二人がお相手では、僕など入り込むスキはありませんよ。しかも、どこかの国の騎士もいらっしゃるようで、アイリス殿下のお気に入りだとか。随分、美しい方ですね。あの方も、アイリス様が神殿で襲われた時に、悪者を倒したそうではありませんか。そんな方まで来られたら、一層、僕の居場所なんてありません」

よ」

王子は、少し淋しそうに微笑んだ。

「デロス王国とは隣国ということもあり、彼とも気は合うのですが、いざという時は、

いつも彼に譲ってしまつて……押しが弱いんですよ。それに、僕は武術はあまり得意

ではありませんが、タペス殿にしろ、マリユス殿にしろ、皆さん、武道を極めていらつ

しゃる。アイリス殿下も、どうやら武道の出来る逞しいお方が好きのようだという

お話ですしね……」

王子は言葉を区切り、微笑みながらではあったが、慎重に切り出した。

「ここだけの話ですが……、アイリス殿下は……あなたのことが、好きなのではないですか？」

サンスエラ王子は、ケインの瞳をじっと覗き込んだ。

ケインは、思わずたじろいだが、トボけてみせた。

「そんな……、殿下、おからかいにならないでくださいよ」

王子は、ふっと笑った。

「あなたも姫のことは、可愛いと思われる……そうなのでしよう？」

「……そ、それは……」

どう答えていいものか困惑しているケインに、助け舟を出すかのように、マスカー

ナ王子は続けた。

「もちろん、僕の想像です。誰かに……アトレキア陛下になどほの仄めかしたりは

しませんから、安心して下さい」

王子は、視線を広間の中央へ映した。

フロアでは、またタペスとアイリスが踊っている。

「ケイン殿も姫と踊ってくればいいのに」

「またまた！　からかわないでくださいよ。だいたい、私はこのような宮廷のダンス

などは、したことはありませんし……」

「じゃあ、僕が教えてあげるよ」

「は！？　」

王子は、イヤミでもなんでもなく、本当に親切で言っているらしかった。

「おっと、勘違いしないでくれよ。僕がきみにダンスを教えるって言ったのは、姫のためだよ」

彼は、にこにこ続けた。

「気を悪くしないで欲しいんだけど、きみたちが一緒になるのは非常に難しいと思うよ。もちろん、アイリス様が、きみとのことを陛下に頼めば、陛下は許してくださる

かも知れない。だけど、周りは、きみをどう見るだろうか。

よその国から現れたダミアス殿が参謀になられた時、かなりの反対があり、この間、

僕たちが訪問した時だって、それを利用して、濡れ衣を着せられたりしていたくらいだし。

きみの場合は、きっとそれ以上に風当たりが強くなることだろうね。旅の傭兵がみ

るみる出世し、將軍ならまだしも、王女の婿になることを――後に、一国の王となる

地位を、この宮廷の誰もが簡単に約束させてくれるだろうか」

それは、ケインも同感であった。

「城では、常に陰謀がつきまとう。このような舞踏会など、華やか

な場はほんの一部分

に過ぎない。誰が王に認めてもらい、出世するか……そのために、水面下では、誰か

を蹴落とすための、時には王でさえその対象になってしまうような、おぞましい陰謀

が企てられることだってある世界なんだ。

それは、ここアストーレだって例外ではなかっただろう。ダミアス殿が、それを王

の耳には入れないように、なんとか対処していたのだと思うよ。

……そのような陰険な場所に、きみのような健全な傭兵が入り込めるだろうか。

そのような排他的な人々の中で、一生、明るく元気に過ごすことなど、よその者に

出来ることなのだろうか」

王子は、何とも言えない瞳を、ケインに向けていた。

ケインに対して意地悪をいつているのではない、と彼はわかった。た。

サンスエラ王子自身も、そのような世界で生きなくてはならないことに、遣る瀬な

さを感じているように、ケインには、そう取れた。

王子は、ふっと力が抜けたように、息をついた。

「僕は、多分、彼女とは結婚出来ないだろう。花婿は彼らのうちの誰かに決まるだろ

うね。当の彼女の想うところではない誰かに……。だけど、それなら、ささやかだけ

ど、僕の出来ることは、彼女がもっとも踊りたい相手——つまり、きみと、せめて

踊れるように協力することなんだと思ったのさ。……どうかな？」

身を引き、静かに見守る愛もあるということだった。

この男は、自分のことよりも相手のことを思い遣れる男なんだと、

顔はまあ

まあ整っているが、ちょっと頼りなさそうに見えたマスカーナ王子
サンスエラは、

ただの優男やさおやうしではなく、根っからの気持ちのやさしい人なのだと、ケ
イン

にはわかったのだった。

「貴様、決闘だ！」

「おお、望むところだ！」

サンスエラとケインが再びサロンに顔を出すと、モンスコールと
デロスの王子が、

今にも剣を抜かんばかりの剣幕で、怒鳴り合っていた。貴婦人たちが
悲鳴を上げて
いる。

「勝った方が姫の婚約者だ！」

「おお、上等だ！」

王女がおろおろしながら、二人の王子の前に行く。

「やめてください……！ わたくし、そのようなことは、困ります
！」

さすがの王女も、今までになく、強い口調である。

「負けた方は、今後、一切、姫に近付くことはまかりならんと思え
！」

タペス王子が、カール王子に人差し指を突き立てた。

「その言葉に、偽りはないでしょうね」

そう返したのは、カール王子ではなかった。

誰もが驚いて、声のする方を探す。

つかつかと二人に歩み寄っていったのは、……マリユスだった！

「マリユス様……？」

不適な笑みを浮かべたマリユスは、両手を揉み絞って驚いたよう
に見ている王女を、

庇うように、自分の後ろに下がらせた。

「なんだ、おぬしは!？」

タペスが、マリユスを、うさん臭そうにじろじろ見る。

「白い騎士マリユス・ミラーと申します。モンスコール王子タペス殿下、ただ今の

『負けた方は、姫との婚約権を放棄する』というお約束、本当でしょうか？」

「当たり前だ！」

タペスは、忌々しそうに、カールを見る。カールも、タペスを睨み返す。

「その決闘に、私も入れてもらえないでしょうか？」

「なんだと!？」

場内にも、来賓の悲鳴や、驚きの声が湧いた。

「貴様……! 流れ者の騎士のくせに、我々と対等に勝負するだけでなく、その上、

アイリス殿下までも手に入れようというのか!？」

タペスは牙を剥くような形相であった。

そうしていると、一層ブタみたいだ、とケインは密かに思った。

「滅相もございません。私はただの流浪の騎士。そのような恐れ多いことは望んでお

りません。その代わり、私に負けた方は、姫との婚約権を放棄して頂きたい、と」

「なっ、なんだとう!？」

ギャラリーの叫び声と、二人の王子の声は同時であった。

「姫の婚約者の地位を望んでいないのならば、なぜそのような約束をするのだ!？」

タペスが、一層興奮して叫ぶ。

「私が参加しなくても、負けた者は婚約権を放棄するのですしたら、同じことでしょう」

白い騎士は、横目で見ながら、冷たく言い放った。それに、余計

に腹を立てた

タペスが何か言い出す前に、少し冷静になったカール王子が割り込んだ。

「……して、決闘のやり方は？ 三人では、組み合わせや順番を決めなくてはなるまい」

「その必要はございません。三人同時、または、お二人対私ということで、いかがです？」

「またしても、場内全体がどよめく。

「なんと！？ 私とタペス殿二人を同時に、しかも、勝つおつもりか！？」

カール王子が驚いてマリユスを見つめる。それへ、『彼』は、不適にもにつきり頷いてみせた。

「ナメおって……！ いいだろう！ チャラチャラと女たちを周りにハベらし、いい気になっている貴様は、もともと気に食わなかった！ まずは貴様を倒し、

その後でデロス王子と改めて決闘し直してやるわ！」

タペスはいきり立っていた。

「明日の正午に北の山で決闘だ。貴様ら、遅れるなよ！」

彼はそう言うのと、すたすたと室内から出て行った。

途端に、「きゃー！」と黄色い声上がり、マリユスの周りに姫君たちが駆け寄っていく。

「マリユス様、素敵！」

「あのお二人を同時にお相手なさるなんて！ 明日の決闘は、是非拝見したいものですわ！」

マリユスは、その貴婦人たちに惜しめない笑みを送っていた。

「……いやあ、まさかこんな展開になるなんて……。せっかくダンスを教えて差し

上げたけど、なんだか無駄になっちゃったみたいで……」

マスカーナ王子は、自分のせいではないのに、悪そうにケインに謝る。

（マリスのヤツ、決闘なんかして何になるというんだ……？）

ケインには、その方が不可解で、気がかりであった。

決闘

貴族の決闘というものは、命を賭けた本当の決闘とは違う、というのは有名な話である。

偽の剣を使い、誓いの言葉——この場合、負けた方は、アイリス王女との婚約者候

補となることを断念すること——を、決闘の発案者であるモンスコール王国王子が述べ、次に、負けの判定となる要項があげられる。

『まいった』と言えば負け。戦闘不能も、当然負けである。

その他、泣いたら負け、逃げ回っているだけでも負け。

注意事項としては、木に登ってはいけななどが挙げられた。

要するに、制限時間のない武道大会のようなものであった。

ただし、厄介なのは、ごくたまに、決闘の結果が気に入らず、国同士がその後戦争になることもあることだった。

武道大会などでは、その時の禍根を残してはいけないうことになっているが、決闘の場合、その辺は、曖昧にされている。

モンスコールもデロスも、武力に力を入れている国として知られている。屈強の

騎士たちが揃っているのはもちろんのこと、歴代の王子たちも、軍を率いて戦って

きたことは、中原では有名な話であり、彼ら二人も例外ではない。

更に、モンスコールは、中原から東方を縦断する、とてつもない大山脈の並びに

位置していることをいいことに、東側の情報を一切ストップしてし

まっていた。

東方の文化も取り入れた、独自の文化を築いていたために、服装でも甲冑でも、東洋がベースではあっても、他国からすれば、どこか奇妙で共感しにくい部分がある。

そして、現在の中原において、もっとも好戦的という、一番危険度の高い国であっ

た。勝つためならば手段を選ばずというのも、実にモンスコールらしいと言えた。

純粹に、武道を伝統とするデロス王国とは、タイプが全く違うのだった。

その点でも、両国は、長年、表立ってはいなくとも、対立していた。

北の山は、呑気にも、見物客たちで賑わっている。

一番見晴らしの良い場所にはテントが張っており、アトレキア国王とアイリス王女

が、豪華な椅子に腰掛け、その後ろに立っているのが護衛のケインと、王女の侍女

代行を勤めるクレアであった。国王のもう片方の隣には、マスカーナ王子がいる。

警備兵は、その後ろを円形に囲むよう並び、ロープを張っていて、観客たちを、

それ以上入らせないよう監視している。そこに、カイルの姿があったが、ダミアスとヴァルドリューズの姿はない。

いよいよ決闘が始まろうとしていた。

王子たちは、顔に怪我をしないよう軽めに作られた決闘用の兜を抱え、軽装に、

部分的に甲冑を着けている。

デロスのカール王子は、厳いかつく、頑丈そうな鉄の甲冑、タペス王子は、動物

の角のような突起の多い、黒い奇妙な甲冑で、それぞれの国の特徴が現れていると言えた。

白い騎士は、マリスお気に入り、例の甲冑である。

手にはリストバンドとレザーナックルのみで、脚も肌を出し、革のロングブーツ

という、普段よりも軽装になっていた。兜などはない。

甲冑のデザインも、二人に比べれば、ずっとスマートで洗練された印象を与え、

白地に金色の模様が日の光に照らされ、きらきらと眩まばゆく輝いていたものだ

から、『彼』は何もしなくとも、そこに、そうして立っているだけで、またしても

ギャラリーの女たちの心を捕えていた。

モンスコール王子、デロス王子は、それぞれ用意された剣を取り出すが、白い騎士

は何も持たない。いつも腰に下げているロング・ブレードは、持ってきていなかった。

「どうしたのだ？」

カール王子が不審そうにマリユスを見る。『彼』は、にっこり笑ってみせた。

「剣はいりません。素手で向かわせて頂きます」

「素手で、私たち二人をお相手になさるというのか!？」

またしても、ギャラリーから悲鳴のような歓声が沸いた。二人の王子の立場は、

まったくといっていいほど、なかった。

カールも、さすがにプライドが傷付いたらしく、その表情は怒り

で引き攣っている。

タペスは最初から、ぶすっとしていたが、ケインには、それは生まれつきに見えた。

王子たちは兜を被り、鞘から剣を抜き取り、構えた。

それに応えて、マリユスも素手で構える。

決戦の火蓋は、一気に切って落とされた！

「やーっ！」

「でやーっ！」

二人の王子の同時に繰り出す剣を、白い騎士はひらりと飛んで躲かわす。二人は、

すぐに向きを変え、後ろから襲いかかっていく。

マリユスは、両手を地面に着き、逆立ちをするようにして、カル王子の顎を蹴り

上げた！

そのフォームの美しさと、鮮やかな技を見事に決めた『彼』に、「おおっ！」と、

観客の声が上がった。

よめいているカールを尻目に、タペスが剣を突き出したまま、突進していく。

脚を降ろし、立ち上がると同時に、マリユスが、振り下ろされた剣を腕で防御する。

が——！

手首のリストバンドが受けたところからは、鮮血が吹き出した！

（タペスのヤツ、真剣を——！？）

ケインを始め、観客たちも身を乗り出す。

マリユスの左腕からは、ぼたぼたと血がしたたり落ちて行く。傷が浅くはないこと

は、そこにいる者すべてに伝わった。途端に、観客から悲鳴が起り、中には、卒倒している貴婦人たちもいた。

「あいつ……!!」

「……なんてことを……!!」

ケインもクレアも、今にも駆け出したい衝動を、やっとのことで抑えた。

「タペス殿！ それは、真剣だったのか!?」

体勢を立て直したカール王子が驚き、不適な笑いを浮かべているであろうタペスを、

兜の間から、咎めるように睨む。

それを、マリユスは、無事な方の手で制した。

「やはり、真剣だったか」

マリユスは、タペスに向かって、嘲笑するように、ふっと笑う。

「手当しなくては……!」

「大丈夫です、殿下。出血多量で倒れる前に、勝負を決めてご覧に入れますよ」

その言葉で、観客もカールも、動きが静止した。

言葉の内容よりも、その時のマリユスの微笑みが、妖しいほど美しかったせいだろう。

「でやーっ!」

ただひとり、美とは無縁な者が、剣を振り翳し、マリユス目がけて突進するが、ひらりと躲す。

（なんでもいいから、早く勝負を決めてくれ！ それに、手当くらいしろ!）

ケインは、心の中で叫ばずにいられなかった。

ショックだった。

マリスが――わざとにしろ、あのマリスが戦闘で傷付くところを見たのは、初めてであった。

ケインから見たタペスは野盗などよりはよほど訓練され、それなりの実力である
のも認めるが、マリスに怪我を負わせるなどとは、予想もしなかった。

まだ自分も本気で手合わせをしたことのない、いずれしてみたいと思ったほどの
戦士など、それまで出会ったこともない。

それが、出会えたのだ！

しかも、それは、自分よりも年下の少女であり、エルフのように、人間離れした
美しい外見という、思いがけない人物だった。

彼は、自分よりも実力は上だと認めていたマリスを傷付けたのが、
最大級のモンス
ターや魔道士ではなく、よりによって、タペスであったのが、神聖
なものを汚された
ように思えてならなかったのだった。

決闘はさらに続く。ただし、武道家としての誇りからか、カール
は一旦引き、ほと
んどタペスとマリユスの一騎打ちとなっていた。

タペスの外見と性質と、しなやかでスマートなレイピアとは、不
釣り合いも甚だし
いが、なかなかの使い手と言えた。

「ケイン、マリスは、……まさか、苦戦してるんじゃないでしょう
ね？」

クレアが、小声で尋ねる。

「そんなことはないと思うけど……」

華麗に飛び回っているマリスだが、一向に決めようとしていない
のは、ケインは
もちろん、クレアにさえもわかる。

「おのれ、ちよろちよろと動き回って、小賢しいマネを……！」
レイピアを振り回すタペスの顔は、兜の中で、どす黒くなっていた。

シュツ！

タペスの薙いだ剣は、よけたマリユスの頬を掠め、オレンジに輝く髪の毛先が、僅かに、はらりと風に舞う。

女性たちの悲鳴がまたしても起こったと同時に、タペスは、足を引っかけて、『彼』
を転ばせた。その上を、跨いで立ち塞がり、『彼』の顔にレイピアを向けると、

女たちの悲鳴はますます大きくなっていった。

「フッフッフ……」

勝ち誇ったような笑いが、タペスの兜から漏れる。

「どうやら、勝負はついたみたいだな。素手にしては、よくやったと言えるが、所詮、

この俺様には敵わなかったのだ。どうだ？ 負けを認めるか？ この期に及ん

で、なおも認めないのなら、ここで、貴様のその綺麗な顔を、ギタギタに切り裂いて

やってもいいんだぜ？」

タペスが、笑い声を上げた。

「お父様！ お願いです！ もうやめさせて下さい！ このままでは、マリユス様は殺されてしまうわ！」

アイリス王女が、半分泣きながら、王に訴えるが、王は、悲しそうに首を振った。

「アイリスや、決闘とは、どんなことがあっても、第三者は介入出

来ないものなのだ
よ」

「でも、でも……！ タペス様は、本物のレイピアをお使いだわ！
反則なのでしょ
う！？」

王は、またしても悲しそうな瞳を、娘に向ける。

「マリユス殿が、『それでも構わない』と言ったのじゃ。これは、
彼ら男同士の尊い
戦いじゃ。余たちには、どうすることも出来ぬ」

「……そんな……！」

アイリスは、崩れるようにして伏せてむせび泣いた。後ろから、
クレアが抱えるよ
うに、王女を慰めながら、背に手を当て、緊張しながら戦況を見守
る。

ケインは、拳を固く握り締めて、ぐっと堪^{こら}えていた。
「どうだ？ 負けを認めるか？」

タペスが勝ち誇ったように、再びマリユスに問う。

マリユスは、ふんと挑発するように笑った。

「おのれ！ 貴様、まだこの俺様を、愚弄^{ぐろう}するか！？」

タペスがレイピアを突き刺そうという時、いきなり絶叫しながら
宙に舞い上がっ
た！

どさん！

彼が地面に叩き付けられた時には、マリユスは、既に立ち上がっ
ていた。

「……お、おのれ……！ 貴様、……この俺に、……なんてことを
……！」

伏せた体勢で、タペスは股間を抑えながら、ぜえぜえ息をしてい
る。

（ムゴい……、なんてムゴいことを……！）

何が起こったのか、見えていたケインとカイルは、途端にタペスに同情した。

「これは、決闘だ。先程のルールの中にも、なかったしな」

マリユスが、にやっと笑い、タペスの丸まった背中に、片足をかけ、兜の中を覗き込む。

タペスは、唸り声しか上げられず、何も言えずにいた。

「ふふん、痛いかな？ これで、おあいこだな、ぼうや」

『彼』は、もはや、王子に向ける上品な言葉遣いは、していない。（もしかして、野盗をイビっている時のような快感を得ているのでは……！？ だと

したら、いけない！ 逃げるんだ、タペス王子！ 身ぐるみ剥がされて、大衆の面前で大恥をかかされる前に……！）

つい先程までマリスを心配していたケインは、今度は、完全にブタ王子の身を案じていた。

「どうだ？ まいったか？ ああん？」

マリユスは、タペスの兜の角を掴んで、上に向かせた。タペスは、返事もろくに出来ず、唸っているだけである。

「ふん、まだやるってのか？ いいだろう」

『彼』は、ガッツと片足で、丸まった王子をひっくり返すと、傷付いていない右手

を、彼の仰向けの腹に、くい込ませたのだった！

「ぐわーっ！！」

タペスが悲鳴を上げ、腹を抱えてのたうち回る。それを、マリユスが見下したよう

に笑い、もう一度、レザーナックルを振り下ろそうとした時――！

「よせ！」

ケインは、自分でも無意識のうちに駆け出し、『彼』の腕を掴んでいた！

「もうよせ！ 戦闘不能だ！」

紫色の瞳が、彼を睨む。

近くで見るマリユスの頬に滲んだ赤い線は、痛々しく、ケインには映った。

「隊長、タペス殿下にお手当を……！」

呆気にと取られていたアストーレの警備隊も、ケインの声で我に返り、タペスを城へ運ぶ準備を急いだ。

小声で、マリスが言う。

「なにすんのよ、ケイン。邪魔するなんて、最低よ！ あのブタ男、あたしの大事な

髪を切りやがって……！ 落とし前つけてやんなきゃ、気が済まないんだから！」

「オマエはヤクザかー！？ しかも、顔じゃなくて、髪かよ！？」

ケインは真面目な顔になると、声のトーンを落とした。

「タペスに何かあったら、アストーレにとぼっちりが行くんだぞ？ モンスコールが

どういう国か、お前だってわかってるだろ？ 逆恨みして、アスト

ーレを攻めたりし

たらどうするんだ！？ ただ立ち寄っただけの国に、いくさの火種

を蒔いていく気

か！？」

マリユスは黙って目を反らし、ケインの手を振り解くと、気を取り直して、カール王子の方に向いた。

「それでは、第二ラウンドを始めましょうか？」

カールは、はっとしたように顔を上げた。

「……その前に、マリユス殿、そのキズ、手当された方がよろしい

のでは……？」

マリユスの左腕からは、流れたまま固まってしまった血の跡も生々しくも、新しい血も出続けている。

「これくらい、平気だ」キツと睨むようにカールに答える。

「せめて、止血くらいしろ」

ケインは、警備の制服である、詰め襟の中に巻いている白いスカ―フを取り出し、

マリユスの腕をきつく縛った。

「……おい、お前、やっぱり傷口深いじゃないか」

「平気だって言ってるだろ」

『彼』は、乱暴にケインの手を払うと、カールに向かって構えた。カールも剣を捨て、後半戦は、まともな武道大会のような決闘に終わった。

結果は、ケインたちの最初の予想通り、マリユスの勝ちに終わったが、カールは、負傷した相手に全力で向かうというのは彼の武士道に反したらしく、はたから見ても、本気でないことはわかった。

マリユスの勝利で、ギャラリーの貴婦人たちは、キヤーキヤー歓声を上げた。

「ケガ、もう大丈夫か？」

決闘が行われていた北の山では、今はもう片付けが終わり、モンスターを倒した後と同じ景色に戻っていた。

そこには、ケインとマリス、ヴァルドリューズのみが残っている。「ええ。ヴァルに『治療』してもらったから、この通り。キズも何も残ってないでしょ？ 魔法って便利ね」

マリスが、さっきまで負傷していた腕を、ケインに見せる。
頬の傷も、完全に消えていた。

「俺に用って……？」

「これ、遅くなっちゃったけど、……報酬」

それは、マリスがケインに支払う、最初の報酬であった。

ケインは、なぜ今なのか、不思議に思いながら、マリスから受け取った布袋の中身を確かめる。

「ちよっと多いんじゃないか？」

「退職金も兼ねてるから。……あなたを解雇するわ。短い間だったけど、ありがとう」

「えっ！？ ……ちよ、ちよっと待てよ。どういことだよ！？」

マリスは、さわやかな笑顔だった。

「ケイン、自由にしていいのよ。私たちは、旅を続けるけど、あなたは、ここに残ることも可能だわ」

ケインは、信じられない思いで、しばらく彼女を見つめていた。

マリスは、近くの岩を見つけると、足を組んで座る。

「以前ね、……とても印象的な男がいたの」^{ひと}

彼女にしてみれば、もってまわった言い方だと、ケインは思う。

「男のくせに、ひ弱で、か弱くて、儂くてね……。まったく、ガラス細工のようだったの。だけど、あたしは、一目見た時から、その男が忘れられなく

て、……

好きだとか、そういう感情より先に、……変かも知れないけど、『守ってあげなく

ちゃ』っていう気になっていたの」

ヴァルドリユーズはもとより、ケインも黙って彼女の話に耳を傾けていた。

「ずっと一緒にいようって、……ずっとあたしが守っていくんだっ

て、思っていたのに……」

山肌を、やさしく、風が撫でていった。

マリスの、オレンジに輝いた髪がなびく。

「ゴールドナスの運命に導かれるままに、あたしは、国を出たわ。

そのことは、悔や

んではないけれど、彼のことは……正直言うと、今でも時々、引っかかっているの。

ちゃんとした説明が出来なかったこともそうだけど、側を離れてしまったことを……。

彼は、きつと、あたしが裏切って、見捨てていったと思っているでしょう。そう考え

るだけで、居たたまれない気持ちになって……」

マリスは、自分の身体を抱え込んだ。

「……もう、守ってあげることが、出来なくなってしまったわ……」
彼が今まで見た中にはない、悲哀に満ちた、アメジストの瞳であった。

口に出すのを躊躇いながらも、ケインは、思い切って、切り出してみた。

「……それが、……セルフイス王子——ベアトリクス王太子、セルフイス王子のこと
だったのか？」

マリスはピクツと身体を震わせたが、彼の方は見ずに、静かに頷いた。

「アイリス王女を見て、そんな彼の姿と重なったの。彼女もまた、
彼のように、純粹

で、夢くて、……誰かが側についていないと、壊れてしまいそうなの……」

目を伏せてから、マリスは、顔を上げた。

「ケイン、お願い。あの娘を守ってあげて。彼女は、あなたを求め

てる。王女な

んで、何でも手に入る身分にしながら、自由は許されない、自由に恋愛することさえ、

許されないの。あの娘には、アストーレの期待を背負っていくなんて、押しつぶされ

るほどの、かなりの重圧だわ。汚れを知らない、純真無垢な人間なんて、貴族の中

??ましてや、王族の中にだって、そうはいないのよ。だからこそ、守ってあげなく

ちゃ……!」

紫水晶――アメジストの瞳には、強い光が照らされたように、強く輝き出す。

「城の中って、陰謀が渦巻いていて、本当にイヤなところだけど、……ケインなら、

そんなものには負けないと思うわ。王女にまわりつく、うるさいハエは、さっき

あたしが餞別代わりに追い払っておいたし、ダミアスさんも、ケインのことは信頼

しているから、後ろ盾になってくれるだろうし、……あなたなら、世にも珍しい、

傭兵上がりの王にだって、なれるんじゃないかしら?」

「な、何言ってるんだ」

冗談を……と言いつつも、ケインはそれ以上は、言えずにいた。彼女の表情

は、からかっている時の様ではなかったからだ。

「ほんとよ。でなきゃ、せっかく出会った仲間だもの、簡単に解雇なんてしないわ。

ね、だから、アイリス王女の側にいてあげて。あの娘は、ただただ、あなただけを求

めているのよ。……それに応えてあげて……」

真剣な眼差しに、ケインは、じっと見入っていた。アメジストの瞳には、熱い物が込められていた。

「マリス……」

揺るぎない瞳を向けていたマリスは、しばらくすると、照れたように微笑んでから、岩から、元気に飛び降りた。

「あたしが言いたかったのは、それだけ。三日後、旅立つわ。……じゃ、……元気で」

手を振ってから、踵^{きびす}を返し、彼女は、山を下っていく。

もう会うことは、ないのだろうか……？

そう思った時、ケインは思わず一歩踏み出していた。

「マリス……！ ……フルネームは？」

聞きたいこと、話したいことは、もっと他にあったはずだった。しかし、自分でも、なぜだかわからなかったが、ケインは、そんなことを口走っていた。

マリスはゆっくりと振り向き、何かを吹っ切ったような素直な表情を見せると、そのうち、彼から瞳を反らし、前方を——そこに見える景色を通り越した、さらに遠くを見据えて、口を開いた。

「……マリス・アル・ティアナ……ベアトリクス」

強い風が山間から吹き込み、彼女の髪を掬い上げる。

マリスは、それからは、振り向きもせず、まっすぐに進んでいっ

た。

ケインは、追いかけなかった。

正確には、動くことが出来ず、追いかけれなかったのだ。

「……本当に……!？」

衝撃は、しばらく彼の身体をがんじがらめにした。

「……まさか、マリスが、……ベアトリクス王国……王女だったなんて……!？」

決闘（後書き）

次回、最終話です。

人生最大の決断

マリスの姿が完全に見えなくなった時、後ろにいたヴァルドリューズに、顔だけ、ケインは振り返った。

「……ヴァルは、当然知ってたんだよな？ マリスが、ベアトリクス王女だってこと

……」

ヴァルドリューズは、いつもと変わらない、静かな瞳で頷いてから応えた。

「現在のベアトリクスにおいて、セルフイス王子に継ぐ、王位継承権を持っている」

彼の淡々とした声は、ケインの中に響いていた。

「ホントだったんだな……。じゃあ、セルフイス王子とは、兄妹！？ ……でもなさ

そうだったけど……。王女なのに、何で王子の護衛なんてやってたんだ？」

「私と出会う以前のことは、わからない。出会った時は近衛兵ではなく、軍隊を率いたり、辺境の警備にも就いていたようだ」

「それで、あのヤミ魔道士グスタフが、マリスのことを『隊長』つて……」

一国の王女が軍隊を率いる、ましてや、護衛や、警備隊に属するということとは、

ケインの知る限り、見たことも、噂ですら聞いたこともない。

ベアトリクスでは、戦士の育成に力を注いでいたことから、彼女の戦士としての才覚も認められ、彼女の意志もあり、例外的にそのようなことになったのか。

今までの彼女の話も辿って、今のケインには、そう考えるしかなかった。

「マリスから詳しいことは聞いていないが、ゴールダヌス殿によると、マリスと王子（いんぎす）

「いいなすけ許嫁であつたようだ」とは、

「……マリスが、王子の……婚約者……！」

マリスの様子から、王子には、ただならぬ感情を持っているように思えたケインだ

「そ、そっか、王女だもん……。アイリス様がそうだったように、

マリスも王女なん

だったら、婚約者は早くから決まってしまうのは、当然……なんだよな……」

それを肯定するよう努めている間にも、ヴァルドリューズの話は続く。

「マリスは前国王の血統、セルフィス王子は、現ベアトリクス女王の息子で、許嫁と

は、前国王が決めたという。現在は、前国王は行方不明となり、それに代わって政權

を執っているのが、国王の妹である現女王なのだ」

ケインは目を丸くした。既に、身体もヴァルドリューズに向いて
いる。

「……それだけ聞いても、なんだか複雑そうな……。国王が行方不明っていうのも、

普通じゃないし……、それこそ、陰謀のようなものもあつたんじやないかって、気が

してくるな」

ヴァルドリューズは、何も変わらない瞳を、ケインに向けたまま、微かに頷いた。

「まさに、彼女が私と旅をしているのは、モンスター退治という目

的が大きいが、

もう一つ——城からの追手から逃れるためということもある」

ケインは、息を飲んだ。

マリスが、ベアトリクスからの追手を避けているようなことを、言っていたのを思い出す。

それは、城の中での、反マリス派の手から逃れるということだったのだろう。

彼女が、いずれ、軍を率いて反旗を翻すことひるがえにでもなれば厄介だと踏み、

刺客を差し向けた——そう考えると、話が繋がった。

「城からの刺客が、マリスを追っているんだとしたら、……あの蒼い大魔道士と合わせ

て、二つの刺客があることは間違いないんだな？　もしかして、他にも……？　いったい、

いくつの組織が、彼女を狙ってるんだ？　彼女の味方は、ゴールダヌスだけなのか？」

ヴァルドリューズは、一度、空に視線を向けてからケインに戻した。

「反マリス派の頂点が、女王だ。女王は、ヤミ魔道士にもふれを出し、マリスに多額

の賞金を賭けた。紅通りの魔道士たちには、どうやら届いていないようであったが、

彼らが、外界と関わりを持つとしなかったためだろう。

魔道士で、彼女を狙うものの数は、以前よりも増えていると思われ、はっきりとは

わからない。真相を知った上での味方は、ゴールダヌス殿だけだった」

いつも通りの、平坦な口調で、そう告げる。

宿では必ずヴァルドリューズがマリスと同室に、マリスが一人の時はインカの香を

焚いて結界を張るという、厳重な警戒をしていたことにも、ケインは納得がいった。

「こりゃあ、思ったより複雑で、……強敵がまだまだ潜んでそうだな……。なのに、

あいつ——マリスのヤツは、俺には、アイリス王女を守ってやれって……。自分だって、

大変な目に遭ってるのに……」

「お前にもアイリス王女にも、自分の叶わなかった想いを重ね、託しているのだろう」

「よりによって、婚約者の母親が反マリス派とはな……。王子とは、陰謀によって、

仲を引き裂かれた……ってどこか……」

マリスの、去って行った後ろ姿を思い起こすと、ケインの中でも、なんとも言い難い、

遣る瀬ないような思いが湧いてくる。

「ヴァル、ゴールドナス派のヤツは、お前の他には？」

「私は、ゴールドナス派というわけではない」

意外な言葉が、ヴァルドリューズの口から発せられ、ケインは、耳を疑った。

「えっ……!？　だって、マリスを守れて、ゴールドナスから言われて……そのカシス
ルビーだって授かって……？」

わけがわからないケインを、ヴァルドリューズは何事も起きていないかのように見つめる。

「その通りだ」

ケインには、ますますわからなかった。

（ヴァルは、完全にはマリスの味方じゃないのか……!？　）
いつの間にか、ミュミュが、ヴァルドリューズの肩越しに、ケイ

ンを覗いていたが、
それに注目している余裕は、ケインにはない。

「ヴァル……、お前の目的って……？」

「世界平和だ」

「……」

タイミングよく、トリのさえずりなどが聞こえてくる。

そのような冷たい態度で言われても、ケインには真実味が湧かなかった。

といって、ヴァルドリューズが冗談を言うような性格とも思えない。

（……てことは、……やっぱり、ホントなのか！？）

「じゃ、じゃあ、……もし、マリスが『サンダガー』を制御出来ないようなことがあったら……」

「その時は、彼女を手懸^かけることも、あり得るだろう」

啞然として、ケインは、ヴァルドリューズを――彼の碧眼を見つめた。

（……なんてことだ……！ マリスは、そのことを知ってて……、
……いや、知っていたら、

一緒に旅なんか出来るわけがないし……。もし、知っていたとしたら、それだけの覚悟を

して……！）

ケインの心の中は、ますます遣る瀬ない想いに満ちていった。

「ゴールドダヌスはどうしたんだ？ どこにいるんだ？ そして、彼は、お前が、

『そういうつもりでいる』ことは、知ってるのか？」

「私は、私の考えを、彼には話さなかったが、おそらく、気が付いていたと思う。」

私を完全に自分の支配下に置いたとも、思っていなかっただろう。

だが、それでも、マリスと私が組むこと以外は考えられなかった――有り得なかった

たのだ。召喚魔法『サンダガー』以外の方法などは。

そして、彼は、もういない。……お前も、ここで戦ったヤミ魔道士グスタフによって、一年前、倒されたのだ」

「なんだって！？ 大魔道士が、……ヤミ魔道士に！？」

「もちろん、本来の大魔道士の能力ちからであれば、グスタフなどが倒すのは到底

無理であつたが、彼は、我々を守るために、あえて……犠牲になったのだ」

ケインには、ヴァルドリユーズの瞳が、その時の空しさに僅かに揺れたのが、見て取れた。

完全に部下となったわけではないヴァルドリユーズに、自分の作戦を任せなくてはならないほど、召喚魔法『サンダガー』は二人にしか実行出来ず、重要であつたのだ。

マリスが幼い頃から親しんだ大魔道士が、己の命と引き換えにしても、守らなければならぬほどの。

その重みを思うと、マリスとヴァルドリユーズの背負っているものが、単なる使命

以上のものでもあることを感じさせられた。

「……一六歳の少女が背負うには……あまりにも、酷だよな……」

『少女』と呼ぶには、多少抵抗はあつたが、ケインは、ぼそつと呟いた。

「私から、お前に確かめておきたいことがある。マリスから、ゴー

ルダヌス殿の予言
の話聞いたか？」

ヴァルドリューズから質問するとは珍しく、ケインには思えた。
「ああ、あの魔物だか魔族だかの間に伝わる予言てのなら、前にマリスから、ちらっ

とな。確か、魔王降臨の際に、サンダガーが脅威の存在になるだろうっていう内容だったと思っただけ……」

ヴァルドリューズは、相変わらず、抑揚のない声で告げた。

「あの予言には、大魔道士たちも知らない別の解釈もある。」

『魔王と金色の龍が相見えれば、
互いにこの世の塵と化す』

——と」

「……なっ……！」

それは、魔族の帝王——魔王が降臨後、マリスとヴァルドリューズのサンダガーをぶつけると、双方消滅する、という予言もあるということだった。

「魔道士協会や、蒼い大魔道士たちは、また違う解釈をしている。」

確かなことは、誰

にも解っていない。この解釈にしても、真実を裏付けけるものではなく、実にあやふやなものだ。従って、マリスの耳にも入れてはいない」

「そんな……！」

その衝撃は、大きいと言えた。

マリスからは、魔王と戦うとまでは聞いていない。魔界をつなぐ次元の穴を塞いで

いき、そこを通して復活するとされる魔王の現れる場所を限定する

——ということであった。

「ゴールダヌスからは、次元の穴を塞ぐことしか、言われてないんだろ？ 魔王の

復活する場所がわかったら、その後はどうするんだ？ 俺も、多分、

カイルたちも、

いざという時は、『サンダガー』を強みにしていたところがあった。それが通用

しないととなると、魔王を倒す手だては……」

「魔王を完全に倒すのは不可能だ。封印するか、その方法がわからぬままでは、

……『サンダガー』しか、可能性はないだろう」

「だけど……それじゃあ、マリスが、……あんまりだ！」

「数奇な運命は、サンダガーを守護神に持つ者の宿命だろう」

「淡々とそう言うてのけたヴァルドリューズを、ケインは、キツと睨みつけた。

「よくそんなこと簡単に言えるな？ 魔道を極めると、人間らしい

感情は無くして

しまうもんなのか！？」

「お前は、マリスと、少なくとも一年は一緒に旅をしてたってのに、彼女に対して、

何も情は湧かなかったのか？ 彼女は、ただの『サンダガー』を召

喚させる道具で、

お前が彼女を守るのは、魔王に対抗するためなのか？ 暴走すれば、

マリスを斬るな

んて淡々と言うし……！

「サンダガーを守護神に持ったのと、一国の王女だったということ
が重なったために、

陰謀に巻き込まれ、ややこしい敵に追われることにもなって……結局、マリスは、

自分で、自分の身を守るしかないのか……？」

それまでに積もってきた遣る瀬なさと、もどかしさが、熱い思いとなって吹き出す。

そんなケインを見下ろす碧い瞳は、依然として静かなままだ。

しばらくして、先に口を開いたのは、ヴァルドリューズの方であった。

「だから、お前が助けてやれ」

ケインは、驚いて見上げる。

「……俺が……？」

ヴァルドリューズがそのようなことを言うとは意外に思ったが、

それは、ヴァルド

リューズとしても、出来ることならマリスを助けたいと思っていることが、ケインに

も感じ取れ、いくらかほっとした。

「……だけど、ヴァルドだって見てただろ？ 俺は、たった今、マリ

スに解雇されたば

かりじゃないか。俺よりも強い彼女の助けになんて、なれるはずもない……」

ケインは、自分の左手——今まで剣を握って来た手を見つめてから、顔を上げた。

「ヴァルなら、守ってやれるじゃないか。お前のような上級魔道士なら——あの蒼い

大魔道士だって、一目置いてるようだったお前の力なら、マリスを守ってやる事が出来るじゃないか」

ヴァルドリューズは、首を振る。

「蒼い大魔道士には、私の力では敵わない」

「……！」

それは、意外でもあり、絶望的な言葉でもあった。

沈黙が続く。

諦めたように首を横に振ってから、ケインは重い口を開いた。

「……だったら、なおさら、俺になんか無理じゃないか」

「私には出来ないが、お前になら出来るかも知れない」

「あのな、いったいどんな根拠で、そんなこと……！」

「魔道士は剣を持たない。だからこそ、時には、剣が脅威に思えることがある」

ケインの青い瞳が見開かれ、ヴァルドリューズを見直す。

「魔道士の力を持ってしても出来なかったこと——すなわち、マスター・ソードを手にする

することが出来たというのに、なぜ、お前は、その剣を使おうとしない？　なぜ、

魔石をすぐに探さなかった？

お前には、彼らを倒すことが出来るかも知れない。その威力を、身を以て経験した

ことのあるお前になら、想像の付くことではないのか？」

ケインは、はっとした。

「確かに、三つの魔石の力を備えたマスター・ソードの威力を思い出すと、魔物や

ヤミ魔道士なんかには負けれないと思う……！」

それまで黙って聞いていたミュミュが、ぱたぱたと、嬉しそうに羽を鳴らした。

「そーだよ、ケイン！　ミュミュもまだ見たことないけど、マスター・ソードは、

すごい力を持ってるんだって、妖精の間でも言われてたよ！　だから、ミュミュは、

マスター・ソードの使者に『付き』たかったんだから！　魔石さえそろえば、

ぜーったいイけるよ！」

ミュミュは、ヴァルドリューズの肩の上で、勢い良く拳を回して

喜んだ。

勝算が見えてきたことに、ケインの瞳も輝いていく。

一人で旅に出てからというものの、自分の過去を封印するかのよう
に、マスター・

ソードを使うのを避けてきてしまったが、今こそ、使う時なのかも
知れない！

ケインは、マスター・ソードの柄に、確かめるように触れた。

二年前の威力が、その感触が、剣を伝って呼び覚まされる。

さまざまな敵との戦いも、まだ記憶に新しい。

彼は、力が甦ってくるような気持ちになった。

「……早く、残りの魔石も探さないとな」

そのケインのセリフに、ミュミュは大喜びし、ヴァルドリューズ
の肩の上で、小躍
りしていた。

「だけど、俺、サンダガーが戦う巨大モンスターや、大魔道士なん
かにまでは、今ま
で遭ったことなかったから、マスター・ソードでは試したことがな
いんだ」

「少なくとも、『サンダガー』同等か、それ以上の力を発揮出来な
ければなるまい」

「えっ、あそこまでの！？ ……そ、そうだな。そうでなくちゃ、
意味ないもんな

……。それに、魔石を全部揃えたとしても、どこまでが可能なのか、
見当も付かない

し……。例えば、魔王にも対抗出来るほどの力なのか……とか」

「確かに、すべての魔石を揃えても、魔王にまで通用するものかど

うかは、わからない」

ミュミュの羽の音は、ぱたっと止ま^ねってしまい、ケインも首をうなだれた。

またしても、絶望の沈黙が流れる。

「だが、……手は有る」

そう言われても、ケインは手放しで喜べる状態ではなかった。

先程から、ヴァルドリューズの思わせ振りのセリフには、喜んだり、がっかりさせられたりである。

魔道士というものは、なんで、ハッキリ、ストレートに言ってくれないのかと、恨めしくも思う。

「……それって、どんな……？」

ヴァルドリューズは、真面目なのか、無表情なだけなのか、わからない表情のまま
で答える。

「……今は言えん」

（……やっぱりな……）

「ケインたら、どこに行ってたの？　さんざん探したのよ」

城の警備に戻ろうと、王女の部屋に繋がる廊下を行くと、ちょうどクレアに出会う。

「どこって……、俺は、ずっと、あの後も、あの北の山で、マリスと話して、その後も、

ヴァルと話していただけたけど？」

クレアが、怪訝そうな顔をする。

「変ね。アイリス様が、あなたをお探しだったから、私も北の山に
もう一度行ったら、

マリスが下りてきたところで、一緒に頂上まで行ってくれたのよ。

そうしたら、誰も

いなかったから、てっきりヴァルドリューズさんと別の道を通って、
帰ったんだと

ばかり思っていたわ。本当に、ずっとあそこにいたの？」

言われてみて、ケインは気が付いた。

もしかすると、魔道士の敵を懸念して、ヴァルドリューズが密かに
結界を張って

いたのかも知れない、と。

（相変わらず、抜け目のないヤツだ！）

クレアに連れられて、ケインが王女の部屋に行くと、

「ケイン様！」アイリスが、いきなり抱きついてきたのだった。

（えっ、えっ！？　そ、そんな……、クレアだっているのに！？）

まごまごしているケインには構わず、クレアが、静かに扉を閉めた。

「わたくし、勇気を持って、お父様にお話ししてみましたの！　そ
うしたら……」

「は？　お話……？」

いったい何のお話なのか、ケインには、見当も付かない。

王女は、きらきらと星でも浮かんでいるのかと思えるくらい、大
きな栗色の瞳を輝

かせ、頬も、ほんのり上気させている。

「……そうしたら、……ケイン様さえよろしければ、……アス
トーレの正規の騎士に
してくださるって……！」

「……なんですって!？」

ケインには、よく事態が飲み込めず、呆然としているが、王女は、もう一度、彼の胸にすがりつくと、うつとりと言った。

「ずっと夢でした。ケイン様が騎士に……貴族とおなりになれば、わたくしとだって、

……もっと、皆の前で、堂々とお会いできるわ……!」

言ってから、王女は、恥ずかしそうに、顔をうずめた。

徐々に状況が飲み込めてきたケインは、話がほとんど、強い力で押し進められていくように感じた。

この、可愛らしく、儂いと思えた王女の、恋の力なのだろうか？ケインには、それは、彼への美化した思い込みにしか、思えなかったのだが、凄まじい力である。

ちらっと、クレアを見ると、クレアは、微笑んではいるものの、どこことなく複雑そうな表情であった。おそらく、彼女もマリスから、彼を解雇したいきさつは聞いているのだろう。

ケイン自身も、内心複雑だった。

北の山で、ヴァルドリューズと話さなければ、悪くはない話だと思ったかも知れない。

だが、しかし、そんなふうに、周囲の力に流されたまま、人生とは決まってしまうものだろうか？

自分の意志ではないところで、強い流れに身を任せる……そんな感覚で、決めるも

のだろうか？ ケインの中では、疑問が渦巻く。

（俺は、多分、宮廷では暮らしていけない。姫の護衛をした、たったの1ヶ月でさえ

退屈で、見ている限り、平和ボケしてしまいそうな世界だった。いくさもしばらく起

きないとなると、城にいることの方が多くなる……）

となると、サンスエラ王子とマリスが言っていたように、陰謀のお時間がやってくる。

（やっぱり、俺は、武道家だから、そんな陰湿な世界は、きっと耐えられないだろう

し、国の政治を取り仕切ることが、俺のやりたいことじゃない）

わずかな期間でも、カイルやクレアたち仲間と旅をして、強敵とも対峙したが、

かなり充実した日々であったと思う。

それまで、ケインが単身で旅をしていた頃と違い、仲間がいる

ことは、振り回されることがあっても、良いものだと感じていたのだった。

そして、マリスのことが気にかかっていた。

自分よりも優れた戦士であり、頼もしくもあるマリスだが、放ってはおけなかった。

『マスター・ソードを授かり、手に入れた力は、世のため、人のために役立てること
にこそ、価値があるのだ。』

同情からではなく、彼の中に流れる正義の血が、マリスの力になってやれるのなら、

なってやる！ と騒いでいる』——彼には、そのような説明が、自分
が納得するのに、

一番しっくりきたのだった。

ケインは、抱きついているアイリスを、両手ではがすように離し、大きく潤んだ

茶色の瞳を見つめた。

アイリスは、ぽっと頬を染めて、微笑んだ。

明らかに、良い返事を期待をしている星の浮かんだ瞳には、つい怯^{ひる}んでしま

いそうになるが、ケインは、思い切って打ち明けた。

「殿下、どうか聞いてください。せつかくのお申し出ですが……俺は、アストーレの騎士には、なれません。クレアやカイル、マリユスたちと、旅を続けます！」

クレアが、はっとして面を上げた。

ぐらーっ……

「姫っ！」

倒れ落ちかけた王女を、ケインが咄嗟^{とっさ}に抱きかかえる。

王女は、卒倒していた――！

エピローグ

まだ夜が明けたばかりだった。白み始めた空を見上げ、既に遠くになったアストーレ

城を、ケインは見つける。

「ほんとによかったの？」

ふと、隣にマリスがやってきた。

「ああ。別に、後悔はしないさ」

微笑むケインに、マリスが気遣うような目を向ける。

「だって……ケインだって、あの娘のこと、……好きだったんでしよう？」

「は？」

思わず、ケインは、立ち止まって、マリスを見下ろした。

「なんで、そう思うんだ？」

「だって、……あんな可愛い女の子に頼りにされたら、誰だって……ねえ？ いいの

よ、あたし、みんなには黙っててあげるから。……って、もうみんな知ってるかあ」

ふふっと笑ったマリスに、ケインは、ムツとした顔になった。

「おい、ヘンなこと言うなよな。王女様は、……まあ、俺がたまたま何度か危機を

救ったから、その……要するに、勘違いだよ！ 勘違いで、俺のこ
と、多少良く見

えちゃってただけだ。そのくらい、俺だってわかってるんだからな」

「あら、わかってたのね」

「……そ、そんな、あっさりと……。だ、だから、そうとわかって
たから、真に受ける
わけないだろ？」

それに、彼は、マリスやクレアのように、修行し、努力して頑張
っている女の子の

方が、好感が持てると、心の中で言いかけたのだが、それを口にす
るのは恥ずかしか
ったので、黙っていた。

マリスは、じっとケインを見つめてから、感心するように頷いた。
「そういえば、そうよね。ケインは、武浮遊術の『愛技』にだって、
引っかからなかったんだもんね」

ピクッと、ケインのこめかみが引き攣った。

「おい、……今後は、敵だろうと誰だろうと、『愛技』は使わないよ。
『初級編』でも

ダメだからな」

ケインは、皆に聞こえないよう、小声でマリスを諭す。

マリスは、きょとんとした顔で言った。

「なんで？」

「なんでも何も……！ お前は、……その……王女なんだし、……許嫁もいるんだろ？」

「……まあ、そうねえ。……でも、それって、あんまり関係ないし」
マリスは、興味のなさそうな表情と声であった。

「関係なくはないだろ！？」 まだ間に合うかも知れないんだから」
「間に合うって……何が？」

「だから、その……陰謀片付けて、許嫁と……結婚……とか……」
「……ふーん……」

気の無い返事であった。

「大丈夫か、お前……？ 最終的には、戻りたいんじゃないのかよ？」

「あたしは、お城にいと、アレルギー出ちゃうって言ったでしょ？」

ケインが、どうしていいものかわからないでいると、マリスは、両腕を上には伸ばして、伸びをした。

「あゝあ、ケインには、ホントのこと言って、損したな。ホントに、もうお別れだと思

ったから、つい……。まさか、ヴァルが話すとも思わなかったし」
そうは言うものの、ケインを振り返ったマリスの顔は、それほど嫌そうではなかった。

夜明けの朝日を受けたアメジストの瞳は、空のように透き通った青に近く輝き、

同じく日を浴びてオレンジ色に光る髪は、太陽の輝きを思わせる。

ケインは、その笑顔を見て、ふと気が付いた。

（……そっか。……そういうことか……！）

ケインは、つかえていたものが取れたように、すっきりした気分であった。

（俺は、マリスのことを……戦いも、その笑顔も、……ずっと見ていたかったんだ）

蒼い大魔道士が彼女を引き離そうとした時、タペス王子が彼女の腕を傷付けた時、

既にわかっていたのだ。何よりも、彼女の身を案じていた自分を。

（城では暮らしていけないとか、いろんな理由なんか、いらなかったんだ。俺が、

最初から守りたいと思っていたものは、……お前だったんだ。お前自身と、お前の中

にある、この世の希望と言ってもいいほどの、『光』なんだ……！

それは、使命感よりも、自分の意思であることが解った瞬間であった。

彼には、その選択しか有り得なかった。

そして、その選択が、彼の人生を大きく変え、安泰からはほど遠い世界へと、導いていく。

それが、伝説の剣を手にした者の、宿命であった。

運命の歯車は、しっかりと噛み合い、重く、ゆっくりと回っていく。

「アイリス様には悪いけど……、私、ケインと一緒に旅をすることに決めてくれて、良かったと思ってるの」

マリスが先頭に行くと、クレアがケインの隣に並び、遠慮がちに続けた。

「私とケインは、同時に旅に加わったから、ケインだけ外れちゃう

のは、やっぱり淋しいもの。それに、私、まだまだあなたから教わらなくちゃいけないこと、いっぱいあるし」

ケインは笑いながら、クレアの肩に、ぽんと手を置いた。

「よし、また剣の練習再開するか！ 剣も使える美少女魔道士目指して、頑張ろうな！」

「いやあね、そんな、美少女だなんて……！」

クレアは、両手で、赤く染まった頬を押さえた。

「ケインが王様になり損ねてくれたおかげで、俺も伯爵になり損なっちゃったな！」

でも、まあいっか！ あのまま、俺がアストーレに残ったら、宮廷の女どもが、

俺を取り合って戦争でも始めちゃったら厄介だしな。昨日なんて、次から次へと、

休むヒマはねーしよー。さすがに、十人連続デートはキツかったぜ！

カイルがケラケラ笑った。

まったくのウソであることを、ケインは知っていた。

昨晚は、警備の宿舎で、一晩中、カイルと酒盛りしていたのだから。

しかし、例のごとく、クレアは真に受けて、嫌そうな顔をしていた。

ひゅん……！

空気が揺れ、何もなかったところから、いきなり二人の人間が現れる。

「ダミアスさん！」

ケインたちは、その二人――ダミアスとヴァルドリューズに駆け

寄った。

見送りに来たダミアスは、マリスに掌ほどの袋を渡した。

「西の方角へ行くのでしょうか？ アストーレの最西端タルカの町から山を越えると、

しばらくは町のようなものはなく、その先は砂漠です。食料代わりに、これを皆さんで」

言われて、マリスが茶色い布袋の中を開けて取り出したものは、一口サイズの、

宝石のようなカットがされた赤い飴だった。

「それには、一粒で、一日に必要な栄養が、ほぼ詰まっていて、日持ちもするそうです」

「これは、ダミアスさんが？」

「いいえ。これは、フェルディナンドのバヤジッド殿から頂いたものです。効果がある

ようでしたら、また下さるそうで」

皆は、顔を見合わせた。

それらの顔には、「……てことは、誰も毒味をしていないのか？」と書いてある。

「……ま、まあ、そいつは有り難いけどさ、またくれるったって、どうやって連絡取るんだよ？」

眉間に皺を寄せたカイルが、首を傾げる。

「ああ、それなら……」

ケインは、思い出したように、ズボンのポケットから木のペンダントを取り出した。

フェルディナンドから帰る時、バヤジッドにもらったものだ。

ペンダントのロケットを開けると、彼の肖像画が入っている。

それは、ただの絵だったものが、彼の姿を映し出す鏡でも嵌め込まれていたのかと

いうように、開けた拍子に、ぼやぼやと、本物の木の魔道士の姿へ

と、移り変わって
いったのだった！

「おや、皆さん、お久しぶりです！ いやあ、こんなに早くお会い
できるとは、思っ
てもみませんでしたよ！」

例のヒト離れた声が、そのまま聞こえる。

一行は、思わずペンダントの中を覗き込んだ。

「今日は、フェルディナンドは快晴になると思います。あなたがた
がお帰りになった
後、紅通りの治安は良くなったのですが、お天気の方は、ずっとい
まいちでして、
昨晩などは、大雨になったのでございますよ。これで、やっと洗濯
物が……」

パチッ

ケインは、ペンダントを閉じた。

「あら？ どうしました？ もしもし？ もしもしー？ ……」
バヤジッドの声が、フェイドアウトしていく……。

「……さ、さあ！ 次の目的地へ出発よ！」

マリスが、気を取り直して、拳を高く掲げた。

「そ、そうね！ この世にはびこる悪を倒し、正義のために、皆で、
力を合わせて
頑張らましよう！」

クレアも続く。

二人の女たちを先頭に、男たちは、疲れたように、ゆっくりと付
いて行く……。

『やっぱり、王様になつときゃ良かった』

ケインにとって、そう思えてならない日は、出来れば来て欲しくないものだった。

「また、いつかどこかでお会いできたら……」

ダミアスが、ヴァルドリューズの背に、声をかける。

ヴァルドリューズは、顔だけ振り返ると、僅かに頷いた。

ダミアスに見送られ、涙の別れとはほど遠く、彼らは、新しい旅路へと、出発したのだった！

あとがき（1・2巻まとめて）（前書き）

ちよっこし、あとがきを……

あとがき（1・2巻まとめ）

ここまで読んでくださった方々、
お気に入り（ユーザー含め）登録してくださった方々、
貴重な感想や評価を下された方、
もちろん、ちら読みの方も、通りすがりの方も、
ありがとうございました。m（＿）m
本当に、嬉しく思っております!!!!

過去に書いた時は一人称だったのを、この度、三人称にリニューアルし、更新後も
気になるところは、ちょこちょこ手を加えながら、なんとか書き上げることができました。

設定・ストーリー的に変わったところは……

ケインの性格が、以前はわかりやすい熱血っぽかったのが、のんびり？

ちよつとぼーっとしてる？　みたくなったところ。内に秘めた熱いものはあっても。

デイズニールランドだか、ゴールドランドだかに行きたい！
とか言ってるのは前からですが。

ミュミュも、『元の話』では、鍛冶屋の湖で一行に出会ったのが、もう最初からケインに
付いていたり。

性格や、やっていることは変わりません。

クレアは、ほとんど変わりませんでした。カイルのセリフは、年齢制限引つかからないように変えたところも。（^^；

三人称ならではの、皆のいないところでの、マリスとヴァルドリューズのシーンを、
ちょっとだけ入れたりも出来ました。

ケインはお姫様に一目惚れしてはいたんですが、リニューアル版は、なぜかそう
なりませんでした。

マリスが、まだお姫様と出会う前に『愛技』を仕掛けたからでしょうか？？

『元』では、姫と出会った後に、もっと大胆に仕掛けていたのですが。

リニューアルでも、彼女は勝手に動くのか。（――；

仕掛けられる前から、ケインは彼女が気になっていた感じでしたが、

『元』は、

物語が進むにつれて、惹かれていく感じだったかと。

ストーリー進行的には、謎を「えーい、明かしてしまえ！」と、『元』よりも

どんどん明かしてしまいました。

2巻の終わりで、ヴァルって、あんなに喋らなかったんですが……。

思い出せたのは、こんなところですよ。

あとがきというよりも、作者の独り言になってしまいました。（

^o^；

この次は、3巻へと続きます。

1・2巻よりも短めで、軽い感じ？

そして、外伝『伝説の剣』も準備中です。ケインの過去のお話です。
1～2章は軽く読み流して頂ければ。

3章から、二つ伝説の剣のエピソードになります。

今後とも、よろしくお願い致します。 m () m

かがみ透

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5453v/>

『Dragon Sword Saga 2』旅の仲間（後編）

2011年9月9日22時37分発行